

^ごせ
奈良県御所市

^こ ^せ ^{やま}
巨勢山古墳群 VII

—京奈和自動車道建設に係る巨勢山773号墳の発掘調査—

平成27年(2015)12月
御所市教育委員会

例 言

1. 本書は、京奈和自動車道大和御所道路（御所区間）の建設に先立って、御所市教育委員会が実施した巨勢山 773 号墳（E 地区）の発掘調査報告書である。

なお、御所市教育委員会では、平成 19 年度以来実施している同事業による発掘調査の調査区について、遺跡ごとに A～F 地区と呼称し、既刊の概要報告でもその名称を用いている。これに従って本書でもその地区名称を踏襲する。各地区名称と遺跡との対応関係は以下のとおりである。

A 地区：観音寺本馬遺跡（御所インターチェンジ部分）

B 地区：観音寺本馬遺跡（路線部分）

C 地区：茅原中ノ坊遺跡

D 地区：玉手遺跡

E 地区：中西遺跡・巨勢山 773 号墳

F 地区：朝町銅山遺跡ほか

2. 調査は、E 地区における発掘調査として実施した。E 地区は中西遺跡の範囲に当たることから、今次発掘調査は中西遺跡第 12 次調査として位置づけ、それをさらに、面的な調査範囲や掘削深さを決定するためのトレンチ調査（第 12－1 次調査）と、それを受けた発掘調査（第 12－2～4 次調査）に区分している。

3. E 地区のうち、巨勢山 773 号墳の発掘調査は、佐々木健太郎・奥田智子が担当した。E 地区におけるその他の調査の担当者は下記のとおりで、全体を木許 守が総括した。

E 地区 調査期間と調査担当者

中西遺跡

第 12－1 次調査：平成 20 年 6 月 9 日から平成 21 年 2 月 27 日（担当 佐々木健太郎・西村慈子）

第 12－2 次調査：平成 21 年 4 月 6 日から平成 21 年 8 月 31 日（担当 佐々木健太郎）

第 12－3 次調査：平成 21 年 9 月 28 日から平成 21 年 10 月 14 日（担当 佐々木健太郎）

第 12－4 次調査：平成 24 年 9 月 5 日から平成 24 年 10 月 24 日（担当 奥田智子・井ノ上佳美）

巨勢山古墳群

巨勢山 773 号墳：平成 22 年 8 月 16 日から平成 22 年 8 月 27 日（担当 佐々木健太郎・奥田智子）

4. 本書の編集は、木許の指導のもと、奥田が行った。執筆は、第 7 章以外を奥田が担当して行った。

5. 第 7 章「自然科学的方法による分析」として、動物遺存体の同定を委託したパリオ・サーヴェイ株式会社金井慎二氏の報告を掲載したほか、銀製品・金銅製品の分析結果について、村上隆氏（京都美術工芸大学）・奥山誠義氏（榎原考古学研究所）から玉稿を賜った。

6. 本書に先立って『御所市文化財調査報告』第 40 集として、概要報告書を刊行している。しかし同書刊行後にも整理作業を進めた結果、玄室床面における埋葬の状態などで当初の認識を改めた点もある。報告内容について本書との齟齬がある場合には、本書をもって訂正とする。

7. 出土遺物のうち、土器については別表として観察表を本文末に付した。遺物番号は、本文・挿図・図版・観察表のそれを統一した。挿図における出土遺物実測図の縮尺は、1/3 を基本にしたが、一部 1/1、1/2、1/8 にしているものがある。

8. 引用・参考文献は、第 7 章に限って各節末尾に記したが、第 1 章から第 6 章および第 8 章のそれは、第 8 章末尾に一括した。

また、本書で用いた須恵器の土器型式および編年観は、田辺昭三氏の研究成果（田辺 1966）によっている。そのほか依拠した遺物の編年観等は必要に応じて本文中で述べる。

9. 本書で用いた「北」は「座標北」である。

10. 本書作成にかかる整理作業中、森岡秀人氏（奈良県立榎原考古学研究所共同研究員）、森島康雄氏（京都府立山城郷土資料館資料課）、森下章司氏（大手前大学教授）、藤本史子氏（武庫川女子大学非常勤講師）から貴重なご教示を賜りました。記して深謝します。

本文目次

例言

第1章 位置と周辺の遺跡	1
第2章 調査の契機と経過	2
第3章 墳丘	8
第4章 横穴式石室	10
第5章 遺物出土状態	14
第1節 第1床面	14
1. 遺物出土状態	
2. 棺体配置の復原	
第2節 第2床面	26
第3節 第3床面	28
第6章 出土遺物	29
第1節 第1床面	29
1. 土器	
2. 鉄鏃	
3. 鉄刀	
4. 胡籙金具	
5. 馬具	
6. 鉄製農工具	
7. 装身具	
8. 不明鉄製品	
9. 鉄釘	
第2節 第2床面	45
1. 土器	
2. 鉄製品	
3. 鉄釘	
4. 動物遺存体	
第3節 第3床面	47
1. 土器	
2. 石製品	
3. 動物遺存体	
第7章 自然科学的方法による分析	49
第1節 巨勢山773号墳出土銀製指輪の制作技術の考察	51
第2節 巨勢山773号墳出土の銀製指輪・胡籙金具の蛍光X線分析結果	55
第3節 巨勢山773号墳出土の動物遺存体の同定	57
第8章 まとめ	64
〈参考文献〉	

挿 図 目 次

- 図 1 御所市の位置
 図 2 巨勢山古墳群と周辺の遺跡 (S. =1/50,000)
 図 3 巨勢山 773 号墳と中西遺跡 (E 地区) トレンチ配置図 (S. =1/3,500)
 図 4 墳丘測量図 (S. =1/150)
 図 5 墳丘調査区 1・2 トレンチ 平面・断面図 (S. =1/60)
 図 6 墳丘周辺出土遺物 (S. =1/3)
 図 7 横穴式石室 平面・立面・断面図 (S. =1/60)
 図 8 石室内土層堆積状態 断面図 (S. =1/60)
 図 9 第 1 床面 遺物出土状態 (S. =1/50)
 図 10 第 1 床面 遺物出土状態 詳細図 (1) (S. =1/20)
 図 11 第 1 床面 遺物出土状態 詳細図 (2) (S. =1/20)
 図 12 第 1 床面 遺物出土状態 詳細図 (3) (S. =1/20)
 図 13 第 1 床面 遺物出土状態 詳細図 (4) (S. =1/20)
 図 14 第 1 床面 床面上の石材と棺体配置の復原案 (S. =1/50)
 図 15 第 2 床面 遺物出土状態と棺体配置の復原案 (S. =1/50)
 図 16 第 3 床面 遺物出土状態 (S. =1/50)
 図 17 第 1 床面に伴うと考えられる出土遺物 (S. =1/3)
 図 18 第 1 床面 出土遺物 (1) (S. =1/3)
 図 19 第 1 床面 出土遺物 (2) (S. =1/3)
 図 20 第 1 床面 出土遺物 (3) (S. =1/3)
 図 21 第 1 床面 出土遺物 (4) (S. =1/3)
 図 22 第 1 床面 出土遺物 (5) (S. =1/3)
 図 23 第 1 床面 出土遺物 (6) (S. =1/3)
 図 24 第 1 床面 出土遺物 (7) (S. =1/3)
 図 25 第 1 床面 出土遺物 (8) (S. =1/3)
 図 26 第 1 床面 出土遺物 (9) (S. =1/3、S. =1/1、S. =1/2)
 図 27 第 1 床面 出土遺物 (10) (S. =1/3)
 図 28 第 2 床面 出土遺物 (S. =1/3)
 図 29 第 3 床面 出土遺物 (S. =1/3、S. =1/8)
 図 30 銀製指輪 (S. ≒ 2/1)
 図 31 開口部のアップ
 図 32 マイクロフォーカス X 線 CT による断面観察
 図 33 X 線 CT の観察結果に基づく想定図
 図 34 X 線 CT で得られた銀製指輪開口部における銀線構造の解析
 図 35 銀製指輪の蛍光 X 線スペクトル
 図 36 胡籙破片の蛍光 X 線スペクトル
 図 37 人体骨格各部の名称
 図 38 ウシ骨格各部の名称
 図 39 横穴式石室の地区設定
 図 40 出土骨貝類 (1)
 図 41 出土骨貝類 (2)

表 目 次

- 表 1 検出分類群の一覧
 表 2 同定結果
 別表 巨勢山 773 号墳 出土土器観察表

図 版 目 次

- 図版 1 墳丘 1・2 トレンチ (南東から)
 墳丘 1 トレンチ (南から)
 図版 2 墳丘 2 トレンチ (南西から)
 横穴式石室 (北西から)
 図版 3 横穴式石室 (南西から)
 横穴式石室 (北東から)
 図版 4 横穴式石室 左側壁 (西から)
 横穴式石室 羨道部左側壁 (北西から)
 図版 5 横穴式石室 右側壁 (東から)
 横穴式石室 左側壁 (北東から)
 図版 6 横穴式石室 横断面 (南西から)
 横穴式石室 縦断面 (北西から)
 図版 7 第 1 床面 遺物出土状態 全景 (西から)
 第 1 床面 遺物出土状態 (西から)
 図版 8 第 1 床面 遺物出土状態 奥壁付近 (南西から)
 第 1 床面 遺物出土状態 玄室中央部左側壁付近 (北西から)
 図版 9 第 2 床面 遺物出土状態 (北東から)
 第 3 床面 遺物出土状態 (西から)
 図版 10 第 3 床面 遺物出土状態 (南西から)
 第 3 床面 遺物出土状態 (北西から)
 図版 11 第 1 床面に伴うと考えられる出土遺物 (S. ≒ 1/3)
 第 1 床面 出土遺物 (1) (S. ≒ 1/3)
 図版 12 第 1 床面 出土遺物 (2) (S. ≒ 1/3)
 図版 13 第 1 床面 出土遺物 (3) (S. ≒ 1/3)
 図版 14 第 1 床面 出土遺物 (4) (S. ≒ 1/3)
 図版 15 第 1 床面 出土遺物 (5) (S. ≒ 1/3)
 図版 16 第 1 床面 出土遺物 (6) (S. ≒ 1/3)
 図版 17 第 1 床面 出土遺物 (7) (S. ≒ 1/3)
 図版 18 第 1 床面 出土遺物 (8) (S. ≒ 1/3)
 図版 19 第 1 床面 出土遺物 (9) (S. ≒ 1/3、S. ≒ 1/1、S. ≒ 1/2)
 図版 20 第 2 床面 出土遺物 (S. ≒ 1/3)
 第 3 床面 出土遺物 (S. ≒ 1/3、S. ≒ 1/8)
 墳丘周辺出土遺物 (S. ≒ 1/3)

第1章 位置と周辺の遺跡

御所市は奈良県の中部に位置し、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町と接している。奈良盆地の西南部に位置する本市は、西部に金剛山・葛城山がそびえ、東南部は竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵などの丘陵が起伏し、南には中央構造線が走って吉野川河谷と境している。また、西は金剛山・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へ至り、南は風の森峠を介して五條・吉野・和歌山方面へ至るなど交通の要衝にあたる。

巨勢山 773 号墳は、御所市南東部にみられる巨勢山丘陵上に位置する。この丘陵上には巨勢山古墳群（A）として総数 700 基を超える古墳が築造されており、当古墳はその一部に含まれる。この周辺ではその他にも数多くの単独墳や群集墳がみられる。ここでは、図 2 に示した周辺に分布する古墳の状況について述べておきたい。

古墳時代前期では著名な古墳に鴨都波 1 号墳（4）がある。鴨都波 1 号墳は、長辺 20 m、短辺 16 m 程の小規模な方墳であるが、主体部の粘土槨からは三角縁神獣鏡 4 面や方形板革綴短甲 1 点、漆塗り鞆などの豊富な副葬品が出土している。このほかの前期古墳は西浦古墳（1）、オサカケ古墳（2）、巨勢山 419 号墳や、周辺地域では旧新庄町域の寺口和田 13 号墳（3）などが知られている。

中期前葉にはこれまでの古墳とは墳丘規模などにおいて隔絶している室宮山古墳（5）が築造される。室宮山古墳は墳長 238 m の規模を誇る大形前方後円墳であり、主体部の堅穴式石室には長持形石棺を有する。古墳の北側にはネコ塚古墳（6）を陪冢にもつ。その室宮山古墳の東側には径約 50 m の円墳と考えられるみやす塚古墳（8）が位置しており、室宮山古墳との関係が注目される。

室宮山古墳以降の前方後円墳は掖上罐子塚古墳（7）が築造されるが、その規模は縮小化している。また、旧新庄町域では中期に屋敷山古墳（9）、北花内大塚（飯豊陵）古墳（10）が築かれる。

後期には大型横穴式石室墳の築造がみられる。巨勢谷では権現堂古墳（12）、新宮山古墳（13）、水泥北古墳（14）、水泥南古墳（15）があり、地理的には離れたところになるが條ウル神古墳（16）などが知られている。また、周辺地域では高取町域に市尾墓山古墳（17）や市尾宮塚古墳（18）、旧當麻町域の平林古墳（19）、旧新庄町域の二塚古墳（11）があり、いずれも前方後円墳に築かれ



図 1 御所市の位置

ている。そのうち二塚古墳は後円部と前方部、造り出し部に各1基ずつの合計3基の横穴式石室を有している。なかでも、造り出し部のものは玄室の床面の高さが羨道の床面の高さよりも低い位置にあるいわゆる竪穴系横口式石室の構造であり、渡来人との関係が指摘されている。

終末期古墳は金剛山東麓のハカナベ古墳(20)、巨勢山古墳群中にある巨勢山323号墳(21)のほか、旧新庄町域の神明神社古墳(22)、旧當麻町域の兵家古墳や鳥谷口古墳など点在して認められる。

群集墳は巨勢山古墳群や、その北の独立丘陵上に築かれた石光山古墳群(B)のほか、市内では葛城山東斜面の尾根上に小林古墳群(C)、石川古墳群(D)、吐田平古墳群(E)、金剛山東斜面の尾根上に北窪古墳群(F)、ドンド垣内古墳群(G)、旧新庄町では葛城山東斜面の尾根上に寺口忍海古墳群(H)や寺口千塚古墳群(I)など多数が造営されている。

第2章 調査の契機と経過

京奈和自動車道は、京都から和歌山を結ぶ全長120kmの高規格幹線道路として計画された自動車専用道路である。このうち、大和郡山市伊豆七条町から五條市居伝町までは大和御所道路とされ、御所市はこのうちの「御所区間」が該当している。

大和御所道路は、平成4年度に事業化がなされ、以降、用地買収・建設工事等が進められてきた。そして、この事業と併行して、工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査も奈良県立橿原考古学研究所を中心として、多くの地点で実施されている。

こうした状況にあって、平成19年4月に、国土交通省近畿地方整備局 奈良国道事務所長から、御所市教育委員会に対して、「御所区間」について、埋蔵文化財発掘調査業務にかかる「委託申込書」が提出された。

各種公共事業のうち国・県が行う事業に伴う発掘調査は奈良県が行うという取り決めがある。したがって、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査は奈良県が行うべきであるが、事業の早期完成とそれによる地元の利便性向上など様々な条件を考慮すると、御所市内における文化財調査については、御所市も一定の役割を担うべきであると判断された。しかし、御所市がこの事業を実施するには、調査員の人数が絶対的に不足するという問題があった。そこで当市教育委員会は、この「委託申込書」の提出に前後して、事業自体の受託の可否をも含めて内部調整を行いつつ、調査の方法や体制について奈良県教育委員会文化財保存課および奈良県立橿原考古学研究所と協議を重ねた。そして最終的に事業受託の方針を固め、同年4月に申込者に対して、「埋蔵文化財発掘調査受託承諾書」を発行した。調査体制については、最大の問題であった調査員は事業囑託を新たに雇用して対応することや、技術職員1名をほぼ専従させて全体を総括すること、各種事務手続きなどに文化財係職員が当たることなどを決め、その整備に努めた。



1. 西浦古墳
2. オサカケ古墳
3. 寺口和田 13 号墳
4. 鴨都波 1 号墳
5. 室宮山古墳
6. ネコ塚古墳
7. 掖上鐘子塚古墳
8. みやす塚古墳
9. 新庄屋敷山古墳
10. 北花内大塚（飯豊陵）古墳
11. 二塚古墳
12. 樋野権現堂古墳
13. 新宮山古墳
14. 水泥北古墳
15. 水泥南古墳
16. 條ウル神古墳
17. 市尾墓山古墳
18. 市尾宮塚古墳
19. 平林古墳
20. ハカナベ古墳
21. 巨勢山 323 号墳
22. 神明神社古墳
- A. 巨勢山古墳群
- B. 石光山古墳群
- C. 小林古墳群
- D. 石川古墳群
- E. 吐田平古墳群
- F. 北窪古墳群
- G. ドンド垣内古墳群
- H. 寺口忍海古墳群
- I. 寺口千塚古墳群

図2 巨勢山古墳群と周辺の遺跡 (S. = 1/50,000)

御所市の発掘調査担当区については、奈良県および橿原考古学研究所との協議によって取り決めた。具体的には、道路建設予定地のうち、御所インター建設予定地の南端の一部から玉手遺跡（御所市玉手所在の新池より北側）までの範囲と、国道 309 号線から巨勢山丘陵のトンネル抗口までの範囲、および南部丘陵地の朝町におけるトンネル抗口部の工事により掘削が行われる範囲である。

これらの範囲にはそれぞれ遺跡が所在しているので、本市教育委員会は、便宜上各地区をアルファベットの地区名を付けて呼称した。現地作業および先に刊行した概要報告（御所市教委 2011 ほか）においては一貫してこの地区名を用いたので、本書でもこれを踏襲する。本書で報告する巨勢山 773 号墳は、このうち E 地区（條・室地区）の範囲内に当たる。なお、A 地区など、当該地区以外の地区名称と遺跡との対応については、例言に記したので参照されたい。

E 地区には、中西遺跡が所在している。中西遺跡はこれまでも複数回の発掘調査が実施されているので、本市教委は、今回の E 地区の発掘調査を、中西遺跡第 12 次調査として臨んだ。そして、各年度や調査区の違いなど必要に応じて、第 12 - 1 次調査などと調査回数に枝番号を付して整理した。

E 地区の範囲は、京奈和自動車道建設予定地のうち、国道 309 号線を北限とし巨勢山丘陵の北裾付近を南限とした、南北約 650 m の長さ及び。東西の幅は、地点によって異なるが、約 60 ～ 80 m ある。対象地が広大になるうえに、E 地区の現地地形をみれば丘陵裾部にあって尾根地形や谷地形が入り組んでいることから、実際に遺構が存在する範囲などをまず確定する必要があった。

そこで、平成 20 年度は、第 12 - 1 次調査として、図 3 に示したように、E 地区全体を 5 区に区分したうえで、全体にできるだけ満遍なくトレンチを配置し、遺構の状態やその分布範囲を確認することを目的とした発掘調査を実施した。平成 21 年度は、この第 12 - 1 次調査の結果を受けて、面的な発掘調査が必要な範囲を絞り込み、第 12 - 2 次調査として、E 2 区と E 3 区でこれを実施した。第 12 - 2 次調査を終了した時点で、土地買収など用地上の事情によって未調査になっていた E 1 区南半部を除いて、E 地区は調査完了となったので、工事担当に引き渡した。その後、道路の建設工事が始まった。

ところが、平成 22 年 8 月に至り、條・室地区で建設工事を行っていたところ、土器が完形で数点出土したと、工事担当者から御所市教育委員会に通報があり、実際にその土器が事務所に持ち込まれた。対応した担当職員によると、土器を一瞥すると古墳時代の須恵器であることが明らかで、さらに事情を聴取すると、自動車道建設に伴う法面造成工事中に、斜面上にあった石を重機で除去したところその下から発見されたということであった。そこで、まず、土器が出土した状況を確認するため、直ちに現地立会が行われた。その場所は、図 3 に「巨勢山 773 号墳」として黒丸で示した地点の北縁部で、第 12 - 1 次調査として調査を実施した E 5 区第 3 トレンチから北に約 10 m の地点である。

立会時のメモによると、工事によって削られた斜面を観察すると、地山と石材が露出していた。

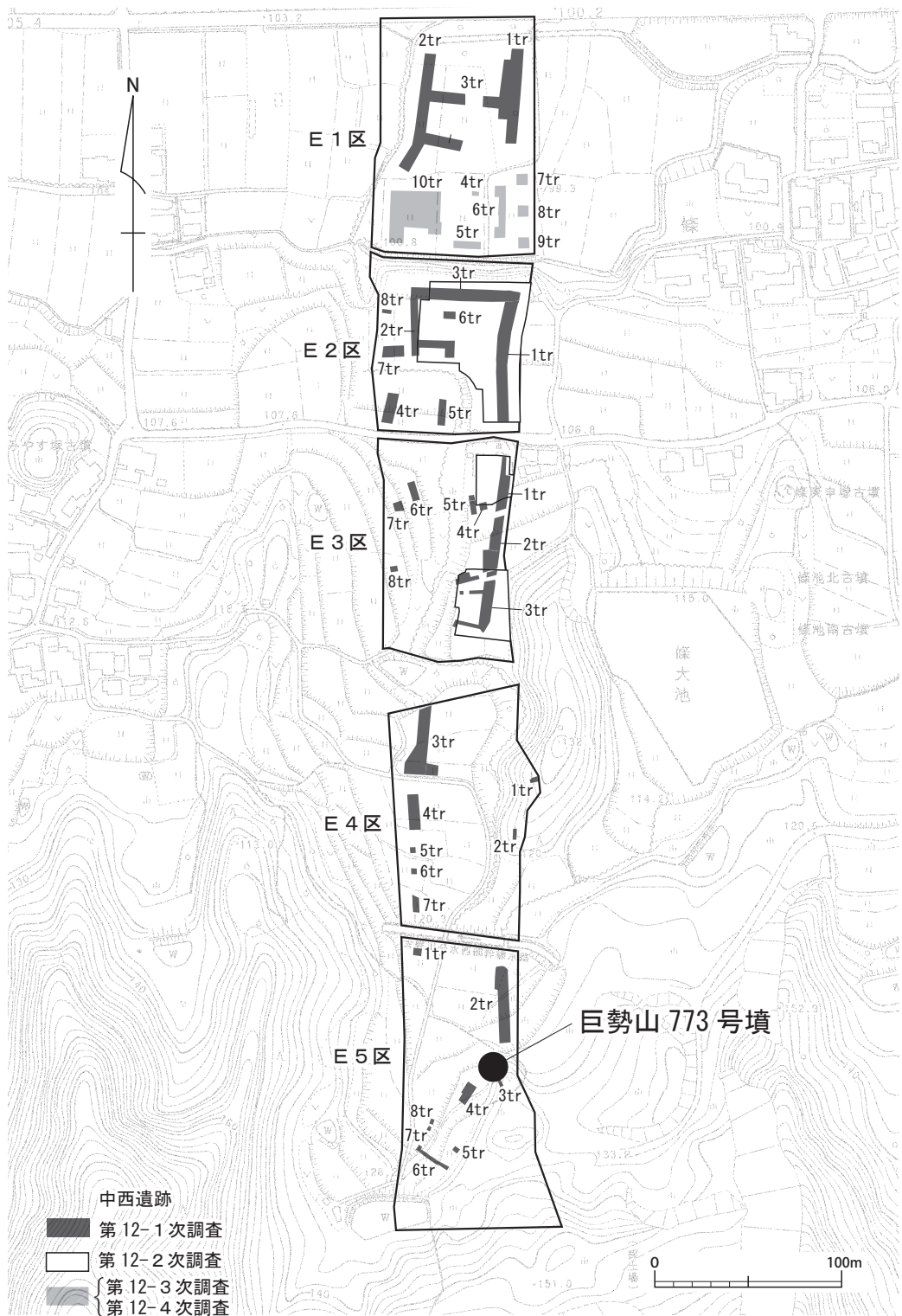


図3 巨勢山773号墳と中西遺跡(E地区)トレンチ配置図 (S. = 1/3,500)

工事担当者は、須恵器はその地山上面辺りから出土したと言い、立会時において、その箇所には須恵器がなお数点存在していた。さらに工事によって露出した石材の中には2段ないし3段の石積みを確認できるものがあった。これらの状況から当該地は横穴式石室を主体部とする古墳であると判断された。もちろん、これはこれまでに周知されていた古墳ではない。当該地は、巨勢山古墳群の一角に当たるが、この古墳に関しては新たに確認されたものであるから、その名称は、従前の巨勢山古墳群の通し番号の末尾に続けて、巨勢山 773 号墳と呼称することとした。

この事態は、発掘調査の範囲や深さを確定するための調査として中西遺跡第 12 - 1 次調査を実施したにもかかわらず、開発範囲内に古墳が存在したことに気がつかなかったということである。ただ、そのことには幾ばくかの理由がある。最大の理由は、巨勢山 773 号墳が南から延びてくる丘陵尾根の端部付近にあって、後述するように、墳丘の北半に当たるおよそ 1/2 をすでに失っていたことである。また、墳丘南側の区画として設けられた周溝は、より高所から流れ込んだ多量の土砂で埋没し、さらにその土砂は石室の上部も覆っていたらしい。このようなことで、周辺地形の改変が著しく、巨勢山 773 号墳の外観は、丘陵尾根上に残存している一般的な古墳のあり方とは随分と異なっていたことがある。さらに、本墳の周囲にはほかの古墳が築造されておらず、群集墳としての巨勢山古墳群のあり方としては、全くないわけではないがやや異例であったことも、本墳の存在を見逃す要因になったと思われる。

巨勢山 773 号墳が、これまでに幾たびも行われた踏査による遺跡分布調査で周知の遺跡とされなかったのも、そのような事情による。外観から見えない埋没した小規模な古墳を見出すためには、開発範囲を全掘する以外にない。しかし、そのことは、トレンチ調査を行ったうえで、面的に行う調査の範囲と深さを決定していくという方針とは異なるし、現状では現実的ではないだろう。

ただし、後述するように、第 12 - 1 次調査の時点で設定された E 5 区第 3 トレンチには、後の検証によれば古墳の墳丘端の一部が見られたはずである。当該トレンチは、南北 4 m、東西 2 m の規模で、南から延びる丘陵地形の先端部付近において地形が比較的平坦になる場所に設定された。これは、丘陵上において古墳などの存否を確認する目的で設定されたものである。調査の結果、表土直下に地山がみられ、ここには遺構・遺物は存在しないと判断された。しかし、このことは、土層の認識を含めて遺憾ながら誤謬であった。古墳が存在する徴候は極めて捉え難い状況があったのであろうが、掘削したトレンチの土層など、あるいはそれを捉える手がかりは、この時点でも見いだし得たかもしれない。このことは今後に向けて自戒としたい。

このような経緯で、巨勢山 773 号墳は、道路工事の最中に突如として現れた。すでに、工程に従って建設作業が行われており、掘削作業は古墳が存在する地点に至っていたのであるが、発掘調査に関して工事担当者の理解を得ることができた。協議によって、発掘調査を優先し、その期間は別の地点で作業を進めるよう作業手順を組みかえるなど可能な限りの協力を得た。このようにして、巨勢山 773 号墳の発掘調査に至った。調査期間は、例言に記した。

第3章 墳丘

巨勢山 773 号墳は巨勢山古墳群の北部に位置する（図 2）。墳丘は、南から北にのびる尾根先端の低いところに築かれていた。この辺りは傾斜地であるため、水田が棚田のように段々に形成されている。墳丘の北から西にかけては現代までに水田として利用されていたため著しく地形の改変を受けており、その改変は西部分では横穴式石室付近にまで及んでいた（図 4）。

墳丘に対するトレンチは横穴式石室の南側に南北方向のものを 4ヶ所に設けた。1 トレンチは長

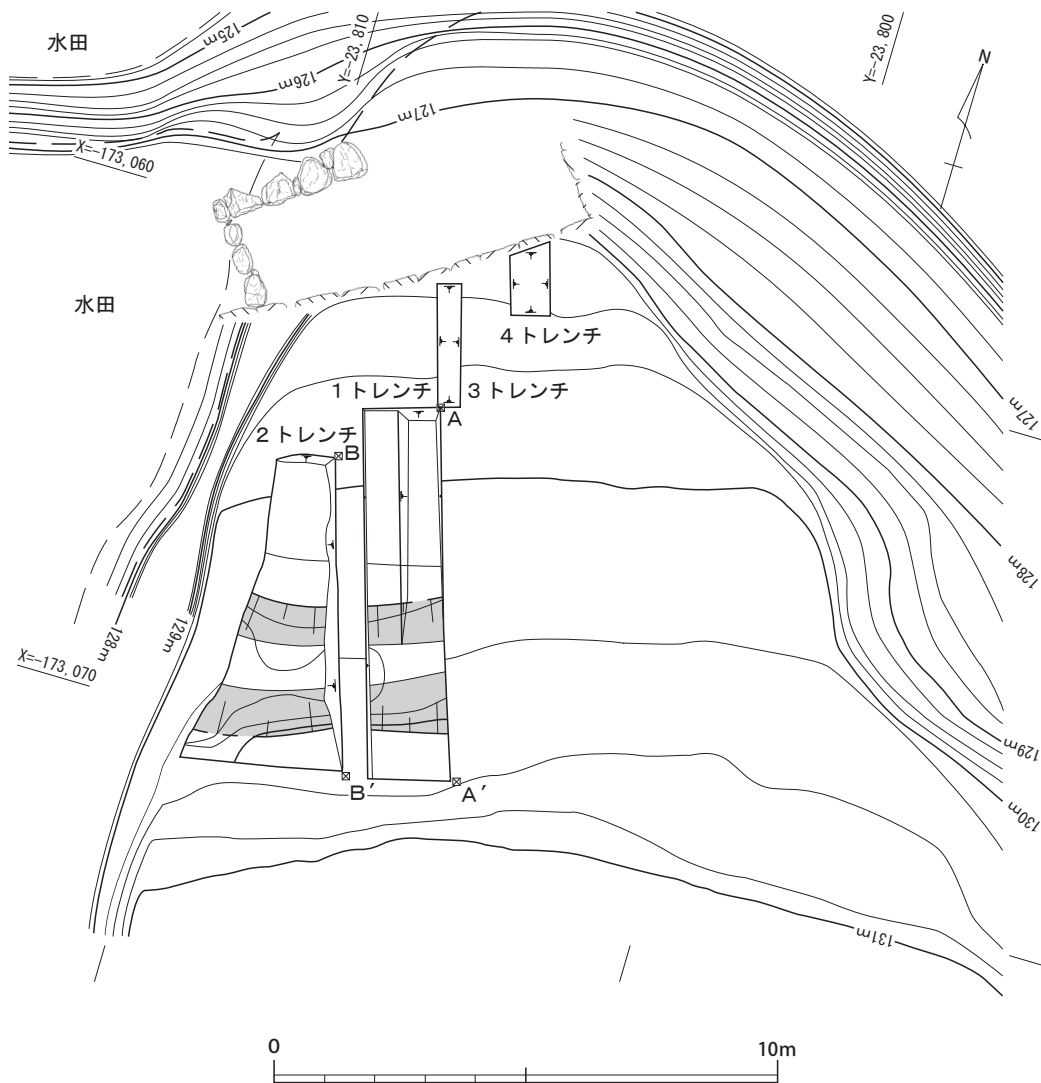


図 4 墳丘測量図 (S. = 1/150)

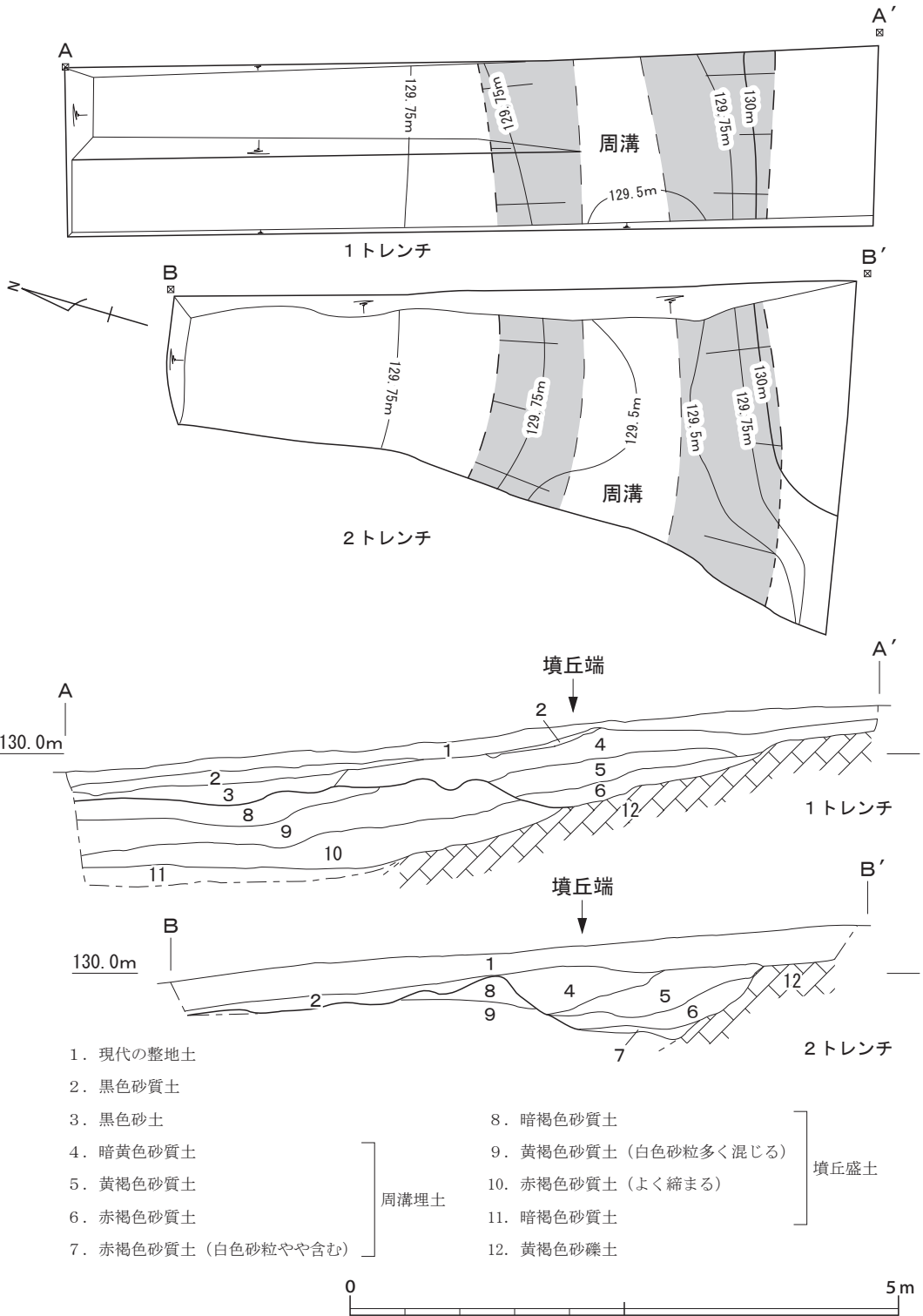


図5 墳丘調査区 1・2トレンチ 平面・断面図 (S. = 1/60)

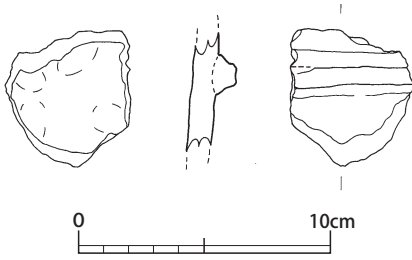


図6 墳丘周辺出土遺物 (S. = 1/3)

れた。

盛土は褐色系統の砂質土が4層認められた(図5-8~11層)。盛土の各層はそれぞれ約20~30cmの厚さで比較的水平に積まれている。周溝の平面形態は緩やかな弧を描いており、断面形は幅の広いU字形をなす。周溝の検出規模は、最大幅約2.4m、同じく深さ0.6mである。盛土上には現代の整地土(図5-1層)と、流入土(黒色砂質土 図5-2・3層)が20~40cmほど堆積していた。

以上の少ない情報から墳丘を復原することにならざるを得ないが、墳丘は1トレンチの西壁でみられた盛土の端を南端として、横穴式石室の玄室主軸を中心にして反転させると、径約16mの円墳に復原できる。

なお、墳丘周辺から出土した遺物として、盛土上に堆積した黒色土層中から埴輪片が1点(図6・図版20)と、土師器片、瓦器片が数点ある。これらは本墳とは直接関係しないものである。埴輪は円筒埴輪の突帯部分の小片である。その残存高は5.2cm、残存幅4.9cmである。突帯の断面形は台形をなし、器壁からの高さは約0.9cmである。内外面ともに摩滅しているため調整は不明である。

第4章 横穴式石室

横穴式石室は、すでに述べたように現代までの水田造成によって著しく地形の改変を受け、比較的早い段階で天井石や側壁石材の多くが移動しており、前庭部と羨道部の一部も削平されていた。その後、今回の工事によっていくらかは残っていたであろう右側壁部分も破損したと思われる。その結果として、石積みは左側壁の石材が比較的残存していたが、その他の多くが失われていた。そのため、石室の平面プランやその寸法について不明な点は少なくないが、残存箇所からみると石室は無袖の横穴式石室とみられる。この石室の初葬面には後述するように、地山上に貼床をして形成した玄室床面上に3石の框石が認められる。この框石およびそれに伴う床面の段差によって、石室の玄室と羨道を区別することが可能である。

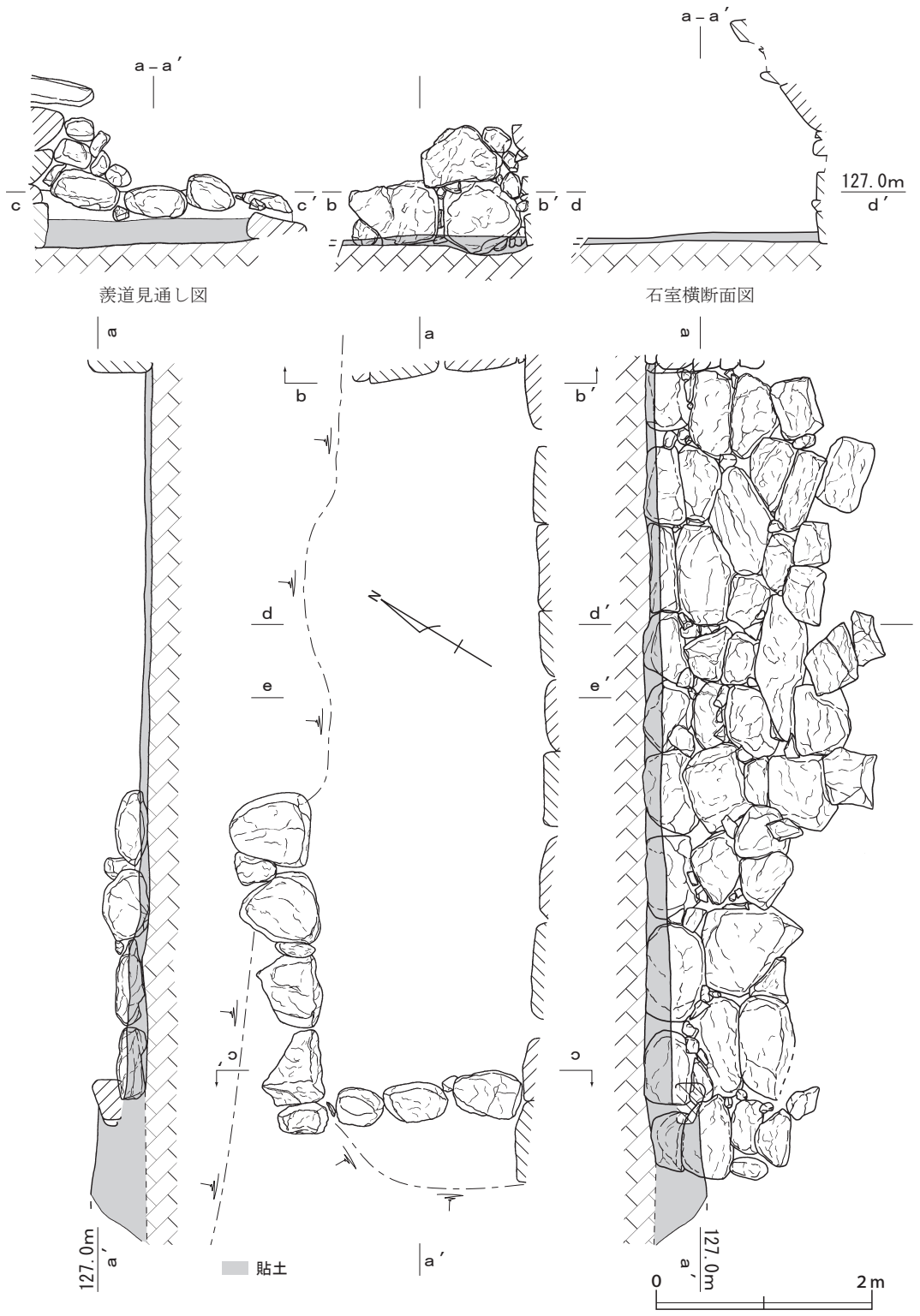


図7 横穴式石室 平面・立面・断面図 (S. = 1/60)

石室の主軸はN-58.5°-Eに向け、開口方向はおおよそ南西を向いている。石室の規模は、現状では長さ7.5m以上あり、玄室は長さ約6.5mである。玄室の幅は残存する右側壁の基底石から中央部付近で約2.1m、玄門部付近で約1.8mであり、玄室中央部がやや膨らむ平面形態をなす。奥壁基底石のラインは左側壁基底石のラインに対してやや鋭角になっている。玄室の残存高は、石積みが良好に残る玄室中央付近の左側壁で見ると床面から約2mである。羨道長は残存長約90cmであり、残存高は床面から約80cmである。

石室の下部は地山を掘り込んだ墓壇内に築かれている。墓壇は玄門部付近の左側壁背面で石室の主軸に平行して延びる掘方の上端を確認した。この辺りでの墓壇の深さは約95cmである。左側壁の石材の背面と墓壇掘方の上端の間には約40cmの隙間があり、そこに暗褐色砂礫土を充填している。なお、墓壇の全体的な平面形態については、今回の調査では明確にすることができなかった。

石室の石材には花崗岩の自然石が用いられており、横約40cm・縦約20cmのものから、横約1.4m・縦約50cmのものがある。石材間の隙間には人頭大から拳大の石を充填している。

奥壁は2段分が残存している。基底石には横約70～80cm・縦約60cmの石材が2石配置されており、その上段には横約70cm・縦約50cmの石材が左側壁側に1石残存していた。左側壁に接する部分や右側壁側の基底石の下部などにみられる隙間には、一辺が20cm程度の小形の石材を充填している。奥壁の残存幅は1.6m、基底石の下端からの残存高は1.1mである。

左側壁は他の壁面と比べて残存状態が比較的良く、石積みは良好なところで6段分が残っている。壁面に使用されている石材は、大きなものでは横約70～140cm・縦約50～100cm、小さなものでは横約40～50cm・縦約20～40cmの規模のものがある。それらの石は、たとえば基底石と上部で石材の大小の使い分けなどをしているものではなく、壁面の中でも大小が混在して使用されている。

左側壁の基底石は奥壁から框石まで9石配置しており、その上端は比較的揃っている。標高約127.7～127.8mまでは3段積み単位としており、この3段目の上端の高さは、奥壁の2段目の上端の高さと揃う。それに加えて、壁面は基底石からこの3段目までは垂直に立ち上がり、4段目から上部は持ち送っていることから、石室の構築過程の1つの単位とみることができる。また、奥壁から約3.6m付近の、奥壁から5石目の基底石と6石目の基底石の境は、その上段まで縦目地が通っている。このようなラインも、石室の構築過程の1つの単位を示しているとみられる。

右側壁は玄門部から玄室中央付近の間で基底石が4石残存していた。横約70cm・縦約30～40cm・奥行き約50～70cmの石材を用いている。玄室中央付近から奥壁にかけては基底石が残存しておらず、その抜き取り穴内からは数点の遺物が出土している。

羨道部では左側壁で最も玄室寄りの縦1列分が4段に積まれた状態で残存している。基底石はその上段の石材よりも小形のものを用いている。この基底石は、後述する羨道部の貼床の上面よりも下に位置している。また本来の石材のうち上部の2段は石室内にやや内傾しているが、これは土圧による影響の可能性も考えられる。

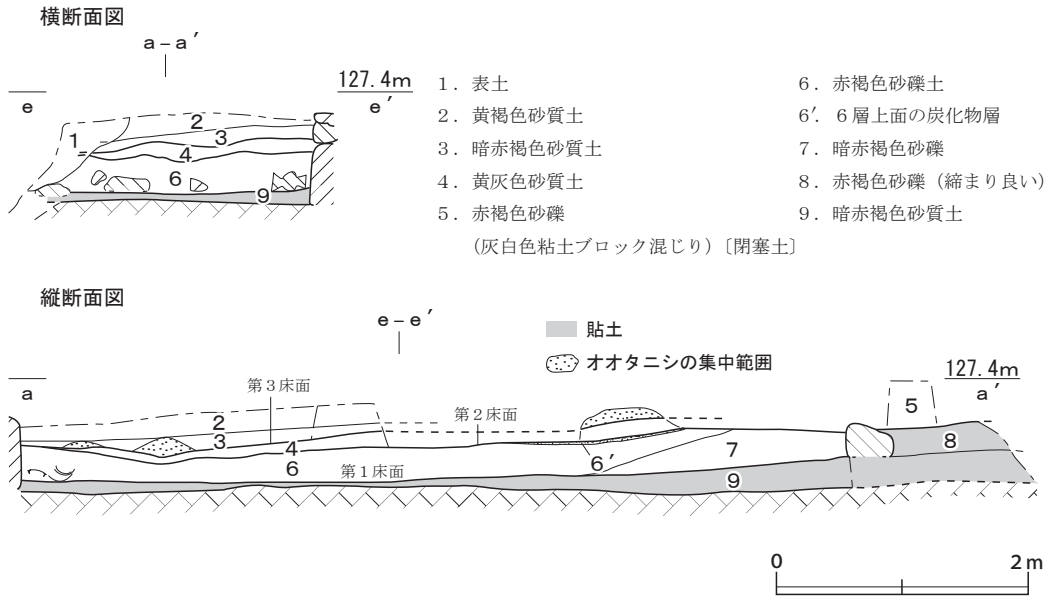


図8 石室内土層堆積状態 断面図 (S. = 1/60)

玄室の床面は図8の断面図にみられるように、地山面上に暗赤褐色砂質土(図8-9層)を5~25cm敷き詰めて貼床をしていた。貼床は、玄門付近で厚さ約20cm、奥壁付近で厚さ約10cmであり、玄門から奥壁に向かって薄くなっている。それにともない、初葬面の床面は玄門から奥壁へ緩やかに下る状態となっている。玄室と羨道の境には貼床の上に石室の軸に直交して、横約45~60cm・縦約30cm・奥行き約40cmの框石3石を1列に並べている。羨道側ではその框石の上面の高さに合わせて赤褐色砂礫(図8-8層)を置いて羨道の床面を形成しているため、玄室の床面は羨道の床面より約30cm低くなっている。

框石から羨道部へ約1mの位置に落ち込みがみられる。これは先に述べた水田造成のために生じた段差である。

閉塞石は框石上面の左側壁付近にその一部が残存していた。人頭大から拳大の石を積み、赤褐色砂礫土(図8-5層)を充填して裏込めをしている。

天井石はすべて失われていたので、前壁の有無などは不明である。

なお、横穴式石室の基底石の下端の高さは、残存する墳丘盛土上面の高さから約3.1m下方に位置している。

横穴式石室の形態は、玄門部に框石を有しており、玄室床面が羨道床面よりも低い位置にあることから竪穴系横口式石室の形態が想定される。ただし、いわゆる竪穴系横口式石室は石室幅1.4m以下、同様に高さ1.4mに満たない石室規模のものと定義(蒲原1983)されている。このことから、当該石室は竪穴系横口式石室の系統を引く無袖の横穴式石室であるといえる。

第5章 遺物出土状態

図8に示したように、石室内では築造時の床面である暗赤褐色砂質土（図8-9層）の上層に4～5層の堆積土を確認した。そのうちの床面から約10～30cm高い位置にある赤褐色系統の砂礫土（図8-6・7層）の上面では、土器や鉄器、動物遺存体などを検出した。さらにその面の上には黄灰色砂質土（図8-4層）が約10cmの厚さで堆積しており、その上面で、土器や多量のオオタニシの殻などの動物遺存体を検出した。このように、石室内には築造時の床面のほか、2面の床面が存在していることを確認した。ここでは、石室築造時の床面である暗赤褐色砂質土の上面を第1床面、赤褐色系統の砂礫土の上面を第2床面、黄灰色砂質土の上面を第3床面として記述する。

第1節 第1床面

1. 遺物出土状態

第1床面は地山面上に暗赤褐色砂質土（図8-9層）を5～25cmほど敷き詰めた貼床の上面である。床面の高さは奥壁付近が標高126.6m、玄門付近が標高126.75mである。古墳築造時の玄室床面に当たるこの面上では、土器等の多くの遺物のほか、奥壁付近から玄室中央付近にかけて合計12石の自然石を検出した。これらの石材の多くは棺台として機能したと考えられるもので、棺体配置の復原にも大いに参考になるものである。したがって、これら石材の出土状態については、次項で棺体配置について考える際に併せて記述する。

それらの石材のほか、土器や金属器など多くの遺物が出土した。それらは、須恵器、土師器、馬具、胡籙金具、鉄刀、玉、銀製指輪などである。

図9にその遺物出土状態を示したが、これを見れば遺物は分布に偏りがあり、奥壁付近、玄室玄門寄り右側壁付近、玄室中央部右側壁付近、玄室中央部左側壁付近というまとまりが認められる。**奥壁付近** 奥壁付近の遺物は土器が中心である。図10に出土状態の拡大図を示した。出土遺物の内訳は、須恵器は杯蓋8点、杯身8点、高杯蓋1点、有蓋高杯2点、無蓋高杯3点、甕1点、広口壺3点、有蓋長頸壺の口縁部1点、台付壺の体部から脚部1点、短頸壺蓋2点、短頸壺3点、提瓶2点、器台の脚部1点、土師器は杯2点、高杯1点、鉄鏃5点、胡籙金具3点、曲刃鎌2点、刀子1点、鉄鏝1点、鉄釘3点である。それらの出土範囲は奥壁から石3～石5までの間でほぼ収まっている。

ただし、本墳の出土遺物には、道路建設工事の最中に出土したものがあることを先に記した。その際に取り上げられたものは、図17に掲げてある須恵器杯蓋2点（17-1・2）、同杯身2点（17-3・4）、同甕1点（17-5）である。このほかにも須恵器台付壺胴部片と同脚部片が同時に採

集されており、特にこの台付壺の破片は、上記の奥壁付近の遺物の纏まりのうち右側壁付近で出土した台付壺（21 - 33）の脚部片と接合した。このことから、工事の際に出土した遺物の一部は、元はこの奥壁付近に置かれていたことが確実である。さらに、出土時の状況に関する工事担当者の証言や直後の文化財係職員による立会の所見から、遺物はほぼ一箇所から出土したと考えられる。そうであれば、図17に示した、台付壺の破片と共に採集された杯蓋、杯身、甕についても、元はこの奥壁付近の遺物群に含まれており、そのうちでも右側壁付近にあった可能性が高いと考えられる。

次に、図10に示した奥壁付近の出土遺物状態について、右側壁付近から左側壁へと順に記述していく。

右側壁の奥壁付近は、工事の時に石室の石材が失われた。そのため、この付近の出土遺物はやや攪乱されており、元の位置からいくつかは動いているものと考えられる。攪乱の落ち方の上端では、奥壁側から玄門方向に、須恵器台付壺の脚部片、同杯身（19 - 16）があった。台付壺の脚部片は後述する台付壺（21 - 33）と接合した。杯身（19 - 16）は口縁を上に向けた状態であり、その上には須恵器無蓋高杯（20 - 27）の杯部が口縁を右側壁側に向けた状態で重なっていた。この無蓋高杯の杯部は、左側壁側にやや離れて出土した高杯脚部と接合した。このことから、杯身（19 - 16）と無蓋高杯（20 - 27）の杯部は、多少の攪乱を受けて右側壁方向に動いたのであろうが、ほぼ原位置を保っていると考えられる。この杯身および高杯の玄門側では須恵器提瓶（22 - 39）が横位

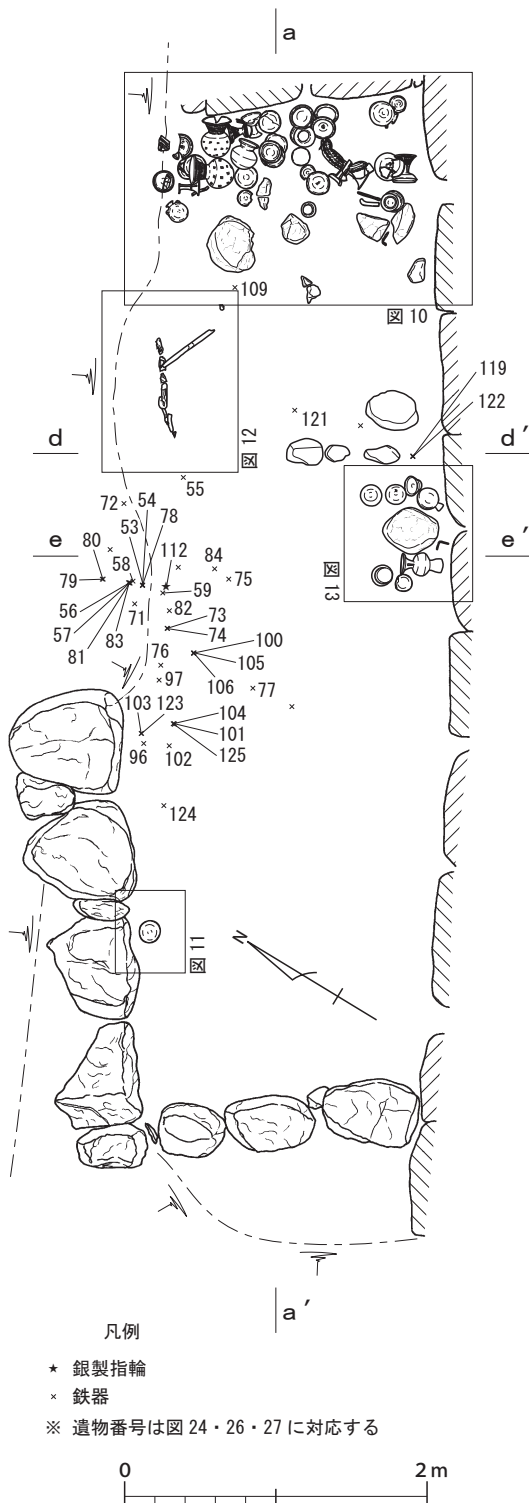


図9 第1床面 遺物出土状態 (S. = 1/50)

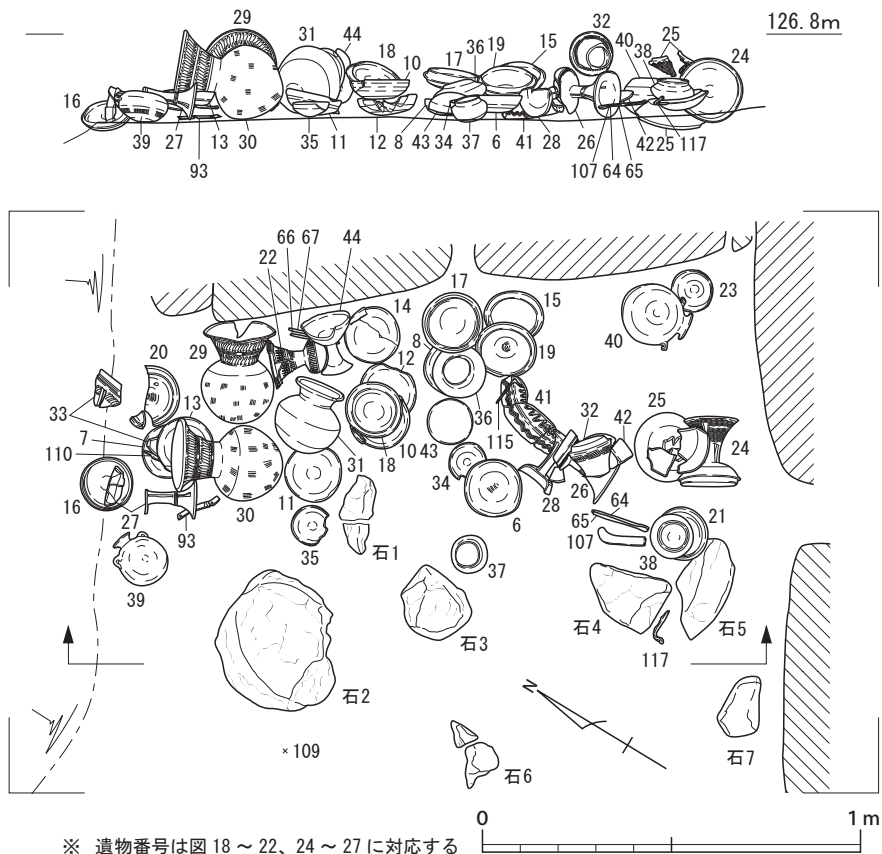


図10 第1床面 遺物出土状態 詳細図(1) (S. = 1/20)

で出土した。その口縁は奥壁方向からやや右側壁側に向けていた。

台付壺(21-33)の脚部片の左側壁側では、須恵器杯身(19-20)が口縁を上に向けた状態で出土した。(19-20)はその半分が欠けた状態であることから、これについても工事の影響を受けている可能性が高い。

この杯身(19-20)の玄門方向に隣接した位置で、須恵器と鉄製品が上下に重ねられて置かれていた。下から、須恵器杯蓋(18-7)、同台付壺(21-33)の脚部片、鹿角装鉄鑿(26-110)、同杯蓋(18-13)、同広口壺(21-30)の口頸部の順に重なっていたものである。さらに、この広口壺の中には曲刃鎌(26-108)が入っていた。広口壺の体部はその横の床面上に置かれていたから、鉄鎌を入れた広口壺を横位に置き、その口頸部を意識的にほかの須恵器等と重ね合わせたという状況である。

また、その頸部の直下で、杯蓋(18-13)のすぐ左側壁側に当たる地点で胡籙金具(25-92)の破片が出土した。この胡籙金具も広口壺(21-30)と上下に重なっていたのである。胡籙金具は、このほか(25-92)から約10cm玄門方向に離れた地点で(25-93)が出土した。(25-93)は、

無蓋高杯(20-27)の脚部と重なっていて、その下から出土したものである。この地点の胡籛金具は、3片に割れていたが、そのうちの1片は(25-92)と接合した。この接合関係や形状からみると、接合しなかった破片も含めて、これらの金具はおそらく同一個体であると考えられる。すなわち、この出土状態はある程度破片化した胡籛金具が纏められて土器の下に置かれたことを示している。

広口壺(21-30)の奥壁側に隣接して、やはり横位に置かれた広口壺(21-29)があった。その口縁部は奥壁方向を向き、口縁部の一端が奥壁の基底石に接していた。

広口壺(21-29)と(21-30)の左側壁側に隣接して、奥壁から玄門方向に向けて、鉄鏃(24-66・67)、土師器高杯(22-44)、須恵器甕(19-22)、同広口壺(21-31)、同杯蓋(18-11)、同短頸壺蓋(22-35)が置かれていた。鉄鏃は2点が並んだ状態であり、いずれも鏃身は左側壁側に向いていた。また、これらの鉄鏃と土師器高杯は、折り重なるようになっていて、高杯が鉄鏃の上に乗っている。高杯(22-44)、甕(19-22)、広口壺(21-31)はいずれも横位に置かれていたが、その口縁は、高杯と広口壺はおおむね奥壁方向を、甕は右側壁の方向を向いていた。杯蓋(18-11)と短頸壺蓋(22-35)はいずれも口縁を上に向けていた。

これらの遺物群の左側壁側で、奥壁に接する位置に須恵器杯身(19-14)があった。(19-14)は口縁部を下に向けた状態であった。この杯身(19-14)の玄門方向に隣接して、須恵器蓋杯3点が重なり合って出土した。下から順に、杯蓋(18-12)、杯蓋(18-10)、杯身(19-18)が、いずれも口縁を上に向けた状態で重ねられていた。

これらの左側壁側で、現存する奥壁幅の中央付近に当たる地点では、奥壁から玄門方向に向けて、須恵器杯身(19-17)、同杯蓋(18-8)、同短頸壺(22-36)、土師器杯(22-43)、須恵器短頸壺蓋(22-34)、同杯蓋(18-6)、同短頸壺(22-37)が置かれていた。このうち、杯蓋(18-8)と短頸壺(22-36)は、上下に重なっており、口縁を上に向けた杯蓋の上に、やはり口縁を上に向けた短頸壺がのせられていた。その奥壁側にある須恵器杯身(19-17)は口縁を上に向けているが、その一部がこの短頸壺(22-36)の肩部にのった状態で斜位になっていた。また、短頸壺蓋(22-34)の一部に杯蓋(18-6)がのった状態で出土した。これらはいずれも口縁を上に向けている。このほか、土師器杯(22-43)は口縁を下に向けており、短頸壺(22-37)が口縁を上に向けた状態で置かれていた。

これらの土器群の左側壁側には、奥壁から玄門方向に向けて、須恵器杯身(19-15)、同杯身(19-19)、鉄釘(27-115)、須恵器器台の脚部(22-41)、同高杯(20-28)、同高杯(20-26)、同有蓋長頸壺の口頸部(21-32)、土師器杯(22-42)が重なり合って出土した。

杯身(19-15)と(19-19)は、いずれも口縁を上に向けていたが、(19-19)が(19-15)の一部にのり、口縁が玄門方向に傾いた斜位になっていた。須恵器器台(22-41)は脚部の1/4程の破片であるが、それがさらにこの場で割れて3片になっていた。この破片の上には、奥壁側の端付近に鉄釘(27-115)がのり、他方の端付近に横位になった高杯(20-28)の脚部がのっ

ていた。また、器台（22－41）の左側壁側に隣接して土師器杯（22－42）があったが、その上には、高杯（20－26）がのり、さらにその上に有蓋長頸壺の口頸部（21－32）が重なる状態で出土した。高杯（20－28）と（20－26）は共に横位になっていたが、隣接する位置に当たっていて、（20－26）の杯部に（20－28）の脚裾部が入り込んでいる状態であった。なお、有蓋長頸壺（21－32）は、右側壁付近で出土した台付壺（21－33）と出土位置が離れており接合関係もなかったのであるが、色調、焼成、胎土などの点で類似しているため、同一個体である可能性もある。

最も左側壁に近い地点では、奥壁から玄門方向に向けて、須恵器高杯蓋（20－23）、同提瓶（22－40）、同有蓋高杯（20－25）、同有蓋高杯（20－24）、鉄鏃（24－64・65）、曲刃鎌（26－107）、須恵器杯身（19－21）、鉄鏃（24－68）、須恵器短頸壺（22－38）、鉄釘（27－117）が出土した。

高杯蓋（20－23）は、口縁を上にした状態で置かれていた。提瓶（22－40）は、口縁を左側壁に向けた状態で、その高杯蓋（20－23）の一部の上ののっていた。高杯（20－25）と（20－24）は左右に隣接していたが、（20－25）は杯部を下にした倒立した状態で置かれており、（20－24）は口縁部を玄門方向に向けた横位の状態であった。鉄鏃（24－64・65）は並んだ状態で出土し、いずれも鏃身を左側壁側に向けた状態であった。曲刃鎌（26－107）は鋒を右側壁側に、刃部を奥壁側に向けた状態で出土した。

杯身（19－21）、鉄鏃（24－68）、短頸壺（22－38）は上下に重なった状態であった。最も下に杯身（19－21）が口縁を上にして置かれ、その中に鉄鏃（24－68）が入れられていた。さらにその上に短頸壺（22－38）が口縁を上に向けた状態で置かれていた。

鉄釘（27－117）は、そこから玄門側に約15cmの間隔をあけ、石4と石5の間に当たる地点で単独で出土した。

以上のほか、石2の玄門側のやや離れた位置に刀子（26－109）が出土している。この刀子は奥壁付近で取り上げた鉄片と接合した。また、明確な出土地点を記録できなかったが、鉄地金銅張の胡籙金具（25－91）が奥壁付近の中央辺りから出土している。

以上の奥壁付近の出土遺物を概観すると、まず、須恵器ではTK10型式、TK43型式、TK209型式のものが認められる。基本的にはTK10型式の須恵器で構成され、その中にTK43型式とTK209型式の土器が点在している状態である。

また、出土状態として特徴的なことは、同じ地点に重なり合って出土しているものや、本来の正置状態ではなく天地が逆転した倒置状態になって出土したものが少なくないこと、また、やや離れた地点で出土した破片が接合した場合があることなどを挙げることができる。

重なり合って出土したもののうち、特に顕著であったものの一つは、右側壁付近にあった杯蓋（18－7）、台付壺（21－33）、鹿角装鉄鏃（26－110）、杯蓋（18－13）、広口壺（21－30）の一群である。記述の順に下から重ねられており、広口壺（21－30）の内部には、曲刃鎌（26－108）

が入れられていた。今一つは、左側壁付近の杯身（19－21）、鉄鏃（24－68）、短頸壺（22－38）である。杯身（19－21）の中に鉄鏃（24－68）が入れられ、その上に短頸壺（22－38）が置かれているという状態であった。

倒置状態の土器も目立つ。杯蓋（18－12）、杯蓋（18－10）、杯身（19－18）はこの順に重ねられて置かれていたが、いずれも器種に関係なく口縁を上に向けていた。このほかにも、短頸壺蓋（22－34）、杯蓋（18－6）、高杯蓋（20－23）等が口縁を上にして置かれていた。

やや離れた地点の破片が接合したものは、胡籙金具（25－93）や刀子（26－109）があった。有蓋長頸壺（21－32）と台付壺（21－33）は、接点はなかったが同一個体である可能性が考えられる。

このような出土状態の特徴は、この奥壁付近の出土遺物が追葬時に片付けが行われた後の状態であることを示している。

なお、須恵器蓋杯では、法量、色調、焼成、胎土や、内面調整の当て具痕や静止ナデといった痕跡などから製作時および焼成時においてセット関係にあったと考えられるものが認められる。それは、杯蓋（17－1）と杯身（19－14）、杯蓋（18－6）と杯身（17－3）、杯蓋（18－7）と杯身（17－4）、杯蓋（18－8）と杯身（19－15）、杯蓋（18－9）と杯身（19－16）、杯蓋（18－10）と杯身（19－17）、杯蓋（18－11）と杯身（19－18）、杯蓋（18－12）と杯身（19－19）である。そのほか、短頸壺蓋（22－35）と短頸壺（22－36）は焼成時の痕跡からセット関係が窺える。これらの遺物は、出土状態においてはそのセット関係は保たれていないのであるが、追葬時の片付けによって当初の位置から移動していると考えられるから、それぞれの副葬時にそれが保たれていたのかどうかは分からない

玄室玄門寄り右側壁付近 図11に示したように、ここでは須恵器杯蓋（23－45）が口縁を上に向けた状態で出土した。この付近では当該床面に伴う遺物はなく、杯蓋は単体での出土である。追葬に伴って片づけられたという状況ではなく、また床面上で検出されたことから、おそらく、原位置を移動していないものと考えられる。須恵器の型式はTK43型式に比定される。

玄室中央部右側壁付近 玄室中央部右側壁付近では、鉄製品が多く出土した。図9に示したように、図12として拡大図を作成した鉄刀の出土地点から（27－124）が出土した地点まで、おおよそ長さ2.5m、幅1.3mの範囲に遺物の分布が認められた。ただし、その遺物出土状態の詳細な平面図は、図12として掲げたものを除いては作成できておらず、その他の遺物は、出土地点の位置および高さを記録し得たものである。

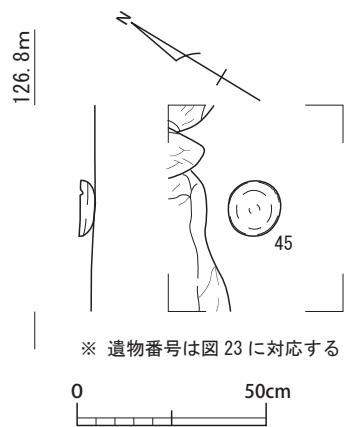


図11 第1床面 遺物出土状態
詳細図（2）（S. = 1/20）

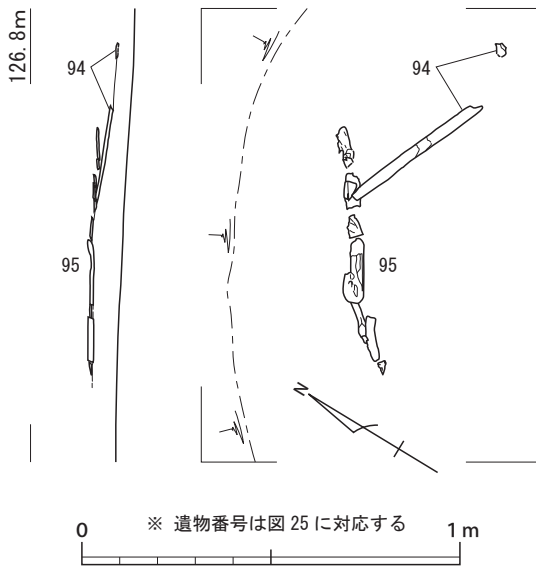


図 12 第 1 床面 遺物出土状態
詳細図 (3) (S. = 1/20)

側壁に向いていることがわかる。

鉄刀 (25 - 94) は石室の主軸方向に対して約 53° 振っている。残存状態は比較的良好である。本来は石室の主軸方向と平行に置かれていた可能性が高い。切先と刃は右側壁の方を向く。その切先はもう 1 点の鉄刀 (25 - 95) の上に重なっていた。いずれも床面から淡褐色粘質土を挟んで約 7 cm 上位で出土している。床面と考えている面よりもやや浮いた状態であるが、現地調査でも、この高さで安定的な面を認めることができなかった。このことに関しては不分明な点も多いが、これらの鉄刀が棺内に副葬されたもので、かつこの棺に本来は棺台が用いられていたとすれば、床面と棺底外面との間に入り込んだ土の厚みである可能性などが考えられる。

これらの鉄刀よりも玄門側の遺物は、床面上から出土したものと、右側壁の基底石の抜き取り穴内から出土したものがある。いずれも鉄鏝の破片が散在している状態であり、元の位置からは動いているものと考えられる。

銀製指輪 (26 - 112) は鉄刀から玄門側に 1 m ほど離れた地点で出土した。また、この周辺から琥珀製玉 2 点 (26 - 113・114) が出土している。

そこから玄門側に 1 m ほど離れて、鞍 (26 - 96) が出土した。その周囲からは、馬具の一部と考えられる鉸具 (26 - 97 ~ 101) や、方形金具 (26 - 102 ~ 104)、留金具 (26 - 105・106)、鋳状金具 (27 - 123 ~ 125) などが出土している。

また、右側壁基底石の抜き取り穴内からは、鉄鏝が数点とミニチュアの U 字形鍬鋤先 (26 - 111) が出土した。これらは、元はこの付近の床面上にあったと考えられる。

玄室中央部左側壁付近 玄室中央部左側壁付近 (図 13) では、須恵器杯蓋 (23 - 46)、同杯身 (23

この範囲で検出した遺物は、鉄刀 (25 - 94・95)、鞍 (26 - 96)、鉸具 (26 - 97 ~ 101)、方形金具 (26 - 102 ~ 104)、留金具 (26 - 105・106)、銀製指輪 (26 - 112)、琥珀製玉 (26 - 113・114) などのほか、鉄鏝片 33 点以上、鋳状金具 3 点 (27 - 123 ~ 125) である。

図 12 に示した鉄刀は、奥壁から玄室側に約 1.5 m 離れた地点で 2 点が出土した。

鉄刀 (25 - 95) は石室の主軸方向とおおむね平行している。残存状態が悪く、破片が連なっている状態であった。切先、茎、および刃などの各部を特定する形状は残っていないが、破片の断面形態を観察すると、刃は右

— 47)、同提瓶 (23 - 50)、同高杯 (23 - 48)、同台付長頸壺 (23 - 49)、同甕 (23 - 51)、土師器杯 (23 - 52)、鉄釘 (27 - 120) が各 1 点出土した。これらの遺物は石 12 を挟んで奥壁側と玄門側に分け置かれていた。

石 12 の奥壁側では、左側壁から玄室中央方向に、須恵器提瓶 (23 - 50)、同高杯 (23 - 48)、同杯蓋 (23 - 46)、同杯身 (23 - 47) が並べ置かれていた。提瓶は口縁を左側壁側に向けた状態で横位に置かれていた。高杯も横位で置かれていたが、口縁の方向は玄室中央側を向いていた。杯蓋、杯身はいずれも口縁を下に向けて伏せ置かれた状態であった。

石 12 の玄門側では、左側壁から玄室中央方向に、鉄釘 (27 - 120)、須恵器台付長頸壺 (23 - 49)、土師器杯 (23 - 52)、須恵器甕 (23 - 51) が出土した。

鉄釘は床面よりやや浮いており石 12 の上面の高さで出土した。台付長頸壺は石 12 に近接して置かれており、その口縁は左側壁側に向けた状態であった。土師器杯は口縁を上に向けた状態で置かれていた。須恵器甕は口縁を下に向けた、倒立した状態であった。

また、ここから奥壁側にある石 8 の周辺では鉄釘 3 点 (27 - 119・121・122) と、鉄鏃の破片が出土している。

この地点に集中する土器のうち、須恵器 6 点を見るといずれも TK209 型式に限定される。この点では、奥壁付近で出土した遺物群とは、数量的な格差と共に際立った違いとなっている。奥壁付近の遺物は、複数回の埋葬にともなう副葬品が片付けられ一箇所に集められたものと考えられたことに対し、この地点で出土した土器は、原位置を保っている可能性が高いと考えられる。

2. 棺体配置の復原 (図 14)

前項に遺物出土状態について詳述した。出土遺物のまとめりごとに須恵器の型式を一瞥すると、奥壁付近では TK10 型式、TK43 型式、TK209 型式のものが認められた。基本的には TK10 型式が多く認められ、その中に TK43 型式と TK209 型式の土器が点在している状態である。その出土状態から、これらの遺物は追葬時に片付けられたものと考えた。玄室玄門寄り右側壁付近では、TK43 型式の杯蓋が 1 点のみ単独で出土した。玄室中央部左側壁付近では、TK209 型式に限定できる須恵器 6 点と土師器 1 点がそれぞれほぼ完形で出土した。TK209 型式の土器でも、この 6 点の須恵器は、奥壁

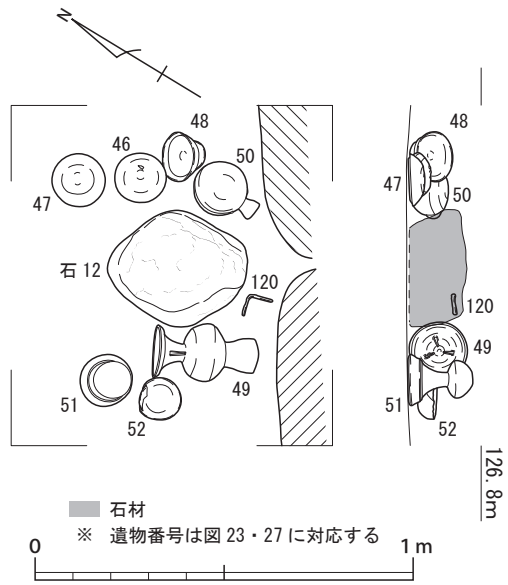
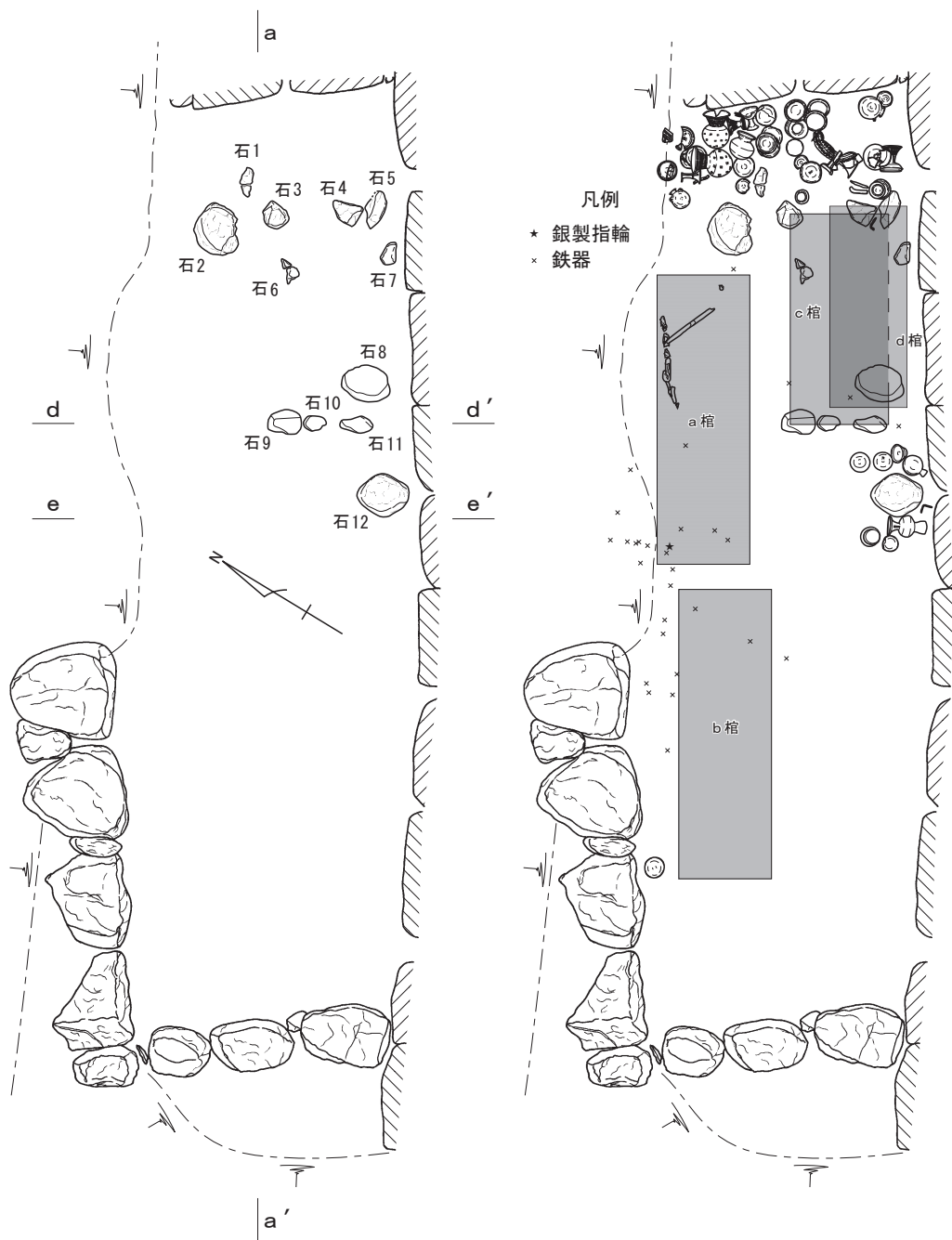


図 13 第 1 床面 遺物出土状態
詳細図 (4) (S. = 1/20)



石材出土状態

棺体配置の復原案

0 2m

図14 第1床面 床面上の石材と棺体配置の復原案 (S. = 1/50)

付近でより古い型式の土器と混在して出土したものと、出土状態が明らかに異なっており区別できるものである。

そして、このような出土須恵器の型式差から、玄室における埋葬の回数がある程度知ることができ。すなわち、TK10 型式期、TK43 型式期、TK209 型式期の埋葬があり、TK209 型式期では、副葬品が奥壁付近に片づけられた段階のものと、玄室中央部左側壁付近に置かれた段階のものがあるとみられる。つまり、ここでは初葬の後に 3 回の追葬が行われ、合計 4 棺の埋葬があったと想定することが可能である。

ただし、それぞれの埋葬が土器型式に厳密に対応していたかどうかという点については、判然としない。このことを考えるためには、各棺に伴う遺物を区別してそれぞれに帰属させる必要があるが、特に奥壁付近の土器は片付けられて原位置を移動しているとみられるから、その作業は不可能に近い。ここでは、厳密さを欠くものの、土器の型式差から 1 棺目（初葬）を TK10 型式期、2 棺目を TK43 型式期、3 棺目を TK43 ～ TK209 型式期、4 棺目を TK209 型式期とする。

次にこのような各棺の棺体配置について考える。棺体配置を復原する際には、一般に、棺台、棺に用いられた繋結金具、副葬品の出土位置などが参考になる。本墳の第 1 床面においても、棺台と思しき石材や、鉄釘、副葬遺物が出土している。結論から先に述べるが、これらの情報を基にして、図 14 の右図に示したように、a 棺から d 棺の 4 棺の棺体配置を想定した。ただし、その復原には根拠が薄弱なものもあるため、より確かなものから順に、その状況について整理しながら記述していきたい。

まず、c 棺の配置は、主として棺台となる石材の位置から推定した。

第 1 床面上では、奥壁付近から玄室中央付近にかけて合計 12 石の自然石を検出した。出土遺物のうちこれらの石材のみを抽出して、図 14 の左図としてその出土位置を示した。12 石の自然石は、長さ約 15 ～ 30cm、幅約 10 ～ 20cm、厚さ 5 ～ 10cm の小形石材と、長さ約 35 ～ 40 cm、幅約 25 ～ 30cm、厚さ約 10 ～ 20cm の大形石材に分けられる。

小形石材のうち、奥壁付近の石 3 ～ 石 5 と、玄室中央付近の石 9 ～ 石 11 の石材は、それぞれが玄室の主軸方向とはほぼ直交する方向に列をなして並んでいる。この 2 列は、石 3 と石 9 がいずれも玄室の中軸付近にあって、列はそれより左側壁側に延びている。2 列の間は、約 1.35 m 離れているが、おおむね対向する位置にあって、平行している。

石 3 ～ 石 5 の石列は、奥壁から玄門側へ約 70cm 離れた位置にある。石 3 から石 5 までの最大長は約 90cm である。石 5 と左側壁とは約 15cm 離れている。石 3 と石 4 の間隔は約 33cm であるが、石 4 と石 5 はほぼ接している。この 3 石の上面の高さは、石 3 が標高 126.70 m、石 4 は標高 126.66 m、石 5 は標高 126.67 m となっていて、おおむね揃っている。

一方、石 9 ～ 石 11 の石列は、奥壁から約 2.3 m の位置にあって、上記のように石 3 ～ 石 5 の石列からは約 1.35 m 離れている。石 9 から石 11 までの最大長は約 75cm である。石 9 と石 10 はほぼ

接しているが、石 10 と石 11 の間隔は約 8 cm ある。石 11 は左側壁から約 28cm 離れた位置に置かれている。これらの石材の上面の高さも標高が 126.64 ～ 126.68 m とおおむね揃っており、この高さは先の石 3 ～石 5 の上面の高さともほぼ一致している。

このほかの小形石材の出土位置を見ると、石 1 は石 3 の右側壁寄りの奥壁側に約 15 cm 離れて置かれている。石 6 は、石 3 から玄門側へ約 20 cm 離れて置かれており、その位置は石 3 と石 9 を結ぶ線上に当たっている。石 7 は石 5 から左側壁寄りの玄門側に約 15 cm 離れて置かれており、石 5 と石 11 を結ぶ線上に比較的近い地点になる。石 6 の上面の標高は 126.65 m、石 7 は 126.68 m である。

このような石材の出土位置や上面の高さをみると、これらは一つの棺の棺台に用いられた石材であると考えられる。その際に、石 3 ～石 5 と石 9 ～石 11 の 2 列の石列は棺の小口部分に用いられたものであろう。石 6 と石 7 は、棺の側面部分に用いられた可能性が考えられるが、その位置は棺の長側辺の中央ではない。また、石 1 についてはやや離れた位置にあるため、これらはいずれも原位置から動いているものと考えられる。

これらの石材を棺台としたと想定される棺を c 棺とした。c 棺は、玄室内でも奥壁に近く、玄室中軸に棺の長辺を合わせて安置されたとみられる。その規模は、棺台とみられる石材の配置から棺の長さ 1.5 m 以上、幅 70 cm 以上に復原できる。

d 棺の棺体配置は、玄室中央部左側壁付近で出土した須恵器等遺物群の奥壁側に想定した。これらの土器は、上述のように、TK209 型式の遺物群で原位置を保っていると考えられる。この副葬品を伴う棺として d 棺を考えるものである。

先に、棺台として用いられた石材は小形石材と大形石材の 2 種があると記したが、石 8 は大形石材に当たるもので、奥壁から玄門方向に約 2 m 離れた地点で、左側壁に近接した位置に置かれている。大形石材には、そのほか石 2 と石 12 がある。また、平面図として記録されていなかったが、図版 7 で右側壁付近に写っている同規模の石材も同様に棺台の石材であったかもしれない。石 2 は奥壁から約 70 cm 離れた右側壁付近に置かれ、石 12 は、石 8 からさらに約 50cm 玄門側に置かれている。石 8 と石 12 の間には石 11 が位置しているが、石 8 ・石 12 の石材の上面の高さはそれぞれ標高 126.77 m ・標高 126.745 m とほぼ揃っており、その間にある石 9 ～石 11 の上面の高さよりも約 8 ～ 10cm 高い。

このような、石 8 と石 12 の 2 石の位置および上面のレベルからみて、これを棺の両小口付近に据える 1 棺の棺台と見立てることもできなくもない。しかし、特に石 12 についてはそれを挟むようにその奥壁側と玄門側に遺物が置かれているから、この位置で棺台として用いられたとは考えにくい。

したがって、玄室中央部左側壁付近で出土した須恵器群を伴った棺としてこの周辺での棺体配置を考えるならば、石 12 の両脇に分け置かれた須恵器群のさらに奥壁側か、ないしは玄門側のいず

れかが想定されよう。この場合、そのいずれであるかを定める決定的な根拠はないが、その棺が棺台を用いたとすれば、奥壁側の d 棺として示した地点に、石 8 と石 4・石 5 を両小口に使用したもののとして安置されたと考えられよう。これらの石材の間隔は約 1 m あいている。上面の標高は石 4・石 5 の方が 4～7 cm ほど低くなっているが、その差は、棺を安置したとき実用に支障のあるほどではないだろう。

また、この位置は c 棺が置かれていたと想定する地点に重なる。d 棺が TK209 型式に伴うとすれば、d 棺は当該石室の中では最も新しい埋葬に伴うと考えられるから、c 棺と d 棺の先後関係は明らかであろう。すなわち、d 棺は、c 棺が片付けなどによって無くなった状態で、c 棺の棺台であった石 4・石 5 のほか新たに置かれた石 8 を棺台として用いて安置されたものであろう。また、石 8 の上面の高さが c 棺の棺台と考えた石 9～石 11 の上面の高さより高いことから、c 棺を安置したときにはこの石 8 が存在しなかったと考えられることも、この想定と合致する。

ところで、石 8 が、棺台として使用されるために改めて墓室の外から持ち込まれたとすれば、一方を以前からあった石 4 や石 5 を流用して棺台としていることがいぶかしい。また、石 2 と石 12 が石 8 と同程度の大きさの石材であるにもかかわらず、玄室床面上にありながら棺体配置とは何ら関係のない位置に転がっていることや、石 12 の周囲に副葬土器が置かれていることも、通有のあり方とは異なっていよう。

この状況を総合的に理解しようとするれば、石 2、石 8、石 12 は、元は、右側壁付近で後述する a 棺ないしは b 棺の棺台として用いられていたと考えるのが妥当ではないか。そのいずれに伴ったものであるかは俄に断じたいが、追葬時の片付けによってそれぞれ動かされたことが想定でき、その後、石 8 は棺台として利用され、石 12 はその周囲に土器が置かれたと考えられよう。

次に、a 棺と b 棺の棺体配置について考えよう。ただし、a 棺と b 棺の配置として図示した位置や、特に大きさを想定することはやや根拠が薄弱である。

出土土器の型式から、2 棺目の埋葬時期は TK43 型式期と考えたが、当該期の杯蓋 (23 - 45) が玄室玄門寄り右側壁付近で単独で出土している。この遺物はおそらく原位置を移動していないと考えられる一方で、奥壁付近では TK10 型式と TK43 型式の須恵器が混在しており、片付け後の状態を反映しているとの想定をした。このような状況から、b 棺は原位置を動いていない副葬品である杯蓋 (23 - 45) の比較的近い位置に置かれ、これとは別に分け置かれたこの時のほかの副葬品は、その後の追葬時に奥壁付近へ片付けられたと理解した。

a 棺の棺体配置は、玄室中央部右側壁付近から出土した遺物から想定した。その付近からは 2 点の鉄刀や多くの鉄器のほか、銀製指輪、琥珀製玉などの装身具が出土したことが注目できる。このような遺物のあり方から見れば、この付近に安置された 1 棺を想定できよう。

なお、銀製指輪や琥珀製玉については、本来は被葬者に装着された状態であったと考えられる。しかし、この位置に a 棺の棺体配置を想定した場合には、棺の隅部になってしまい装着状態を想定

することができない。2点の鉄刀についても並置された出土状態ではないことや、この付近でのその他の鉄器が散在している状態を加味すると、これらの遺物も含めて多少の攪乱を受けて本来の位置から動いているものと考えられる。

以上のように、a 棺から d 棺の4棺の棺体配置を考えた。この状況を今一度整理すると、本墳の玄室における埋葬は、まず出土土器の型式から TK10 型式期、TK43 型式期、TK43 型式期～TK209 型式期、TK209 型式期の4回があると考えられる。そして、想定される棺体配置の b 棺は TK43 型式期つまり2回目の埋葬、d 棺は TK209 型式期つまり最も新しい4回目の埋葬に伴うと考えられる。そうすると、初葬である TK10 型式期の棺は、a 棺または c 棺のいずれかであると考えられる。

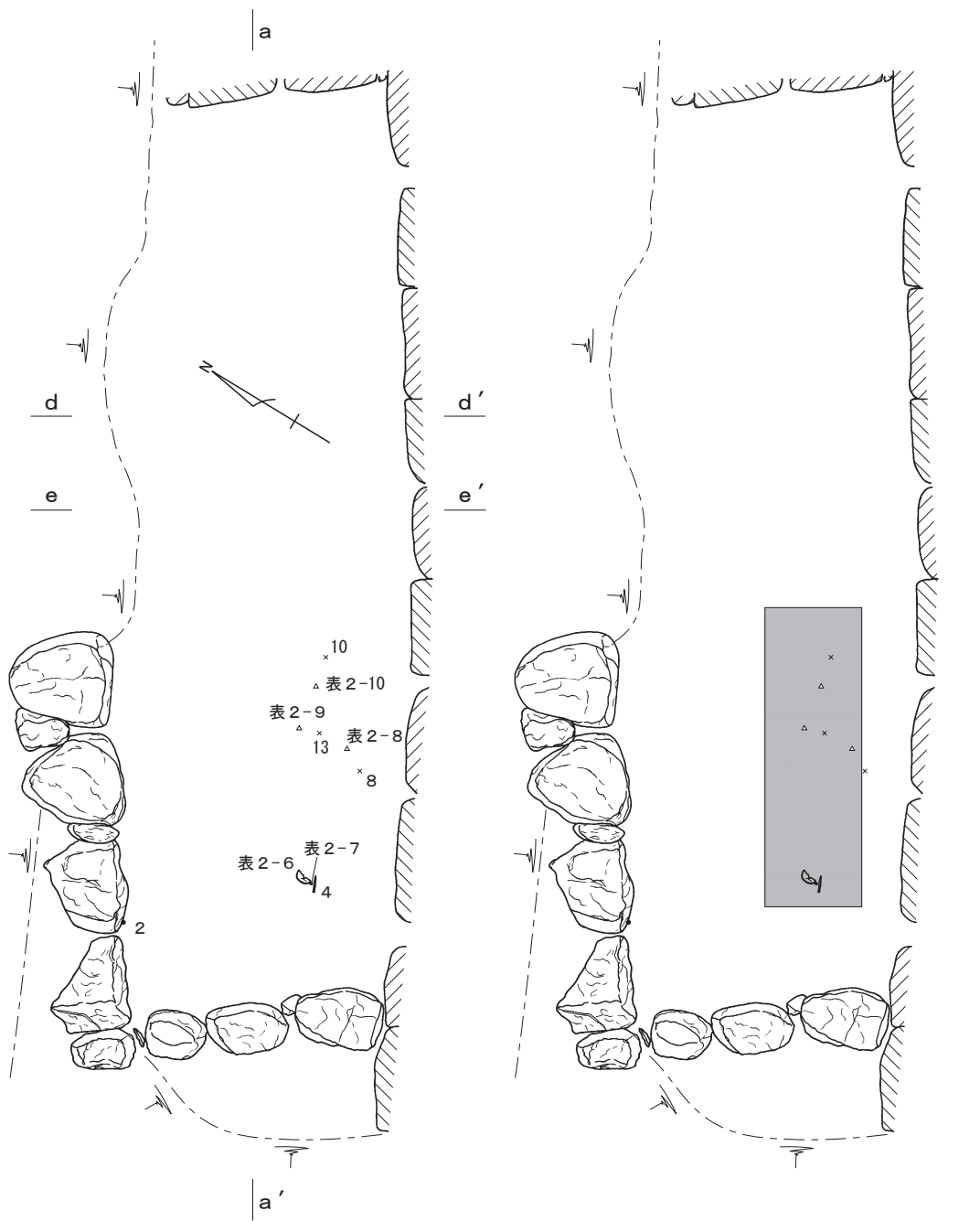
現状では、玄室内から出土した副葬された土器を各棺に対応させることが不可能であるから、このことを実証的に考えることは難しい。床面構造や棺体配置、また、埋葬・副葬の手順などが比較的良好に復元でき、さらに追葬が頻繁に行われている6世紀中葉以降の横穴式石室の棺体配置について考察した森岡秀人氏によれば、群集墳中の横穴式石室において2棺が並列に埋葬される時、開口部からみて「左棺先葬」の傾向が強いという(森岡 1983)。この場合の「左」は玄門から見て左であるから、本墳の場合では a 棺の位置に当たる。

a 棺には、鉄刀のほか多くの鉄器や、指輪・琥珀玉などの装身具も伴っていたとみられる。一方で、現状では c 棺や d 棺に棺台が用いられたと想定できるが、a 棺にはそれがない。しかし、上述したように、玄室内で残存したやや大形の石材である石 2 や石 8、石 12 は、d 棺が埋葬される以前の棺に用いられた棺台用の石材であった可能性が高い。その場合の以前の棺が a 棺であれば、a 棺は、元は c 棺よりもむしろ大形の石材を棺台として用いていたことになる。

このようなことで、a 棺としたものの位置と大きさを始め、所属時期についても決定的な根拠を欠くものの、類例と状況証拠から、ここではこれを初葬棺と考える。したがって、本墳の玄室に見られた4回の埋葬は、a 棺、b 棺、c 棺、d 棺の順になされたと考えられる。

第2節 第2床面

第2床面は図8で示したように、第1床面から10～30cm高い位置にある赤褐色系統の砂礫土(図8-6・7層)の上面で検出した。玄門から奥壁側へ約80cm辺りの左側壁付近では、ヒトの頭骨(表2-6)、歯1点(表2-7)、刀子1点(28-4)が出土した。刀子は頭骨付近から出土し、切先を奥壁側に向けた状態であった。そこから奥壁側約0.7～1.5mの範囲で、ヒトの大腿骨(表2-8・9)や獣類の骨片(表2-10)、鉄釘(28-5～13)が出土した。また、玄門寄りの右側壁沿いでは須恵器杯(28-2)が出土している。そのほかにも、須恵器蓋(28-1)、須恵器の壺か甕の口縁部片(28-3)、鉄釘2点(28-14・15)が出土している。玄室中央付近から奥壁にかけての範囲では遺物は出土しなかった。また、頭骨が出土した地点から鉄釘などが出土した



- 凡例 遺物出土状態
- × 鉄器
 - 須恵器 Δ 動物遺存体
- ※ 遺物番号は図28に対応する。
 ただし、動物遺存体に関しては表2に対応する。

棺体配置の復原案



図15 第2床面 遺物出土状態と棺体配置の復原案 (S. = 1/50)

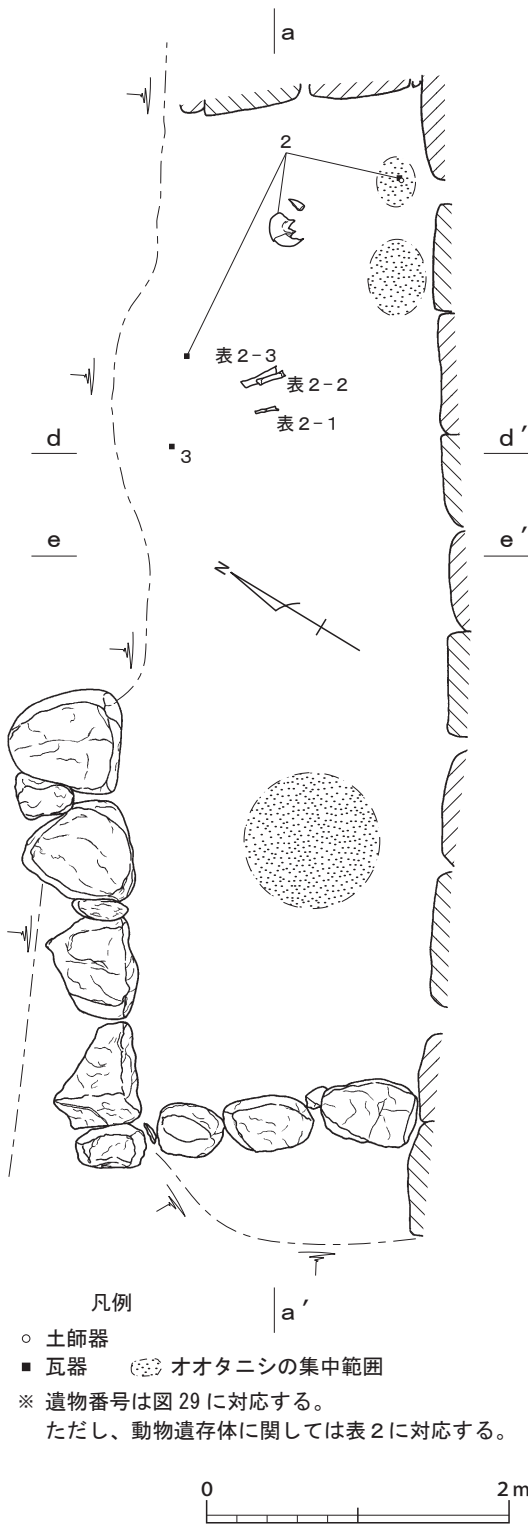


図 16 第 3 床面 遺物出土状態 (S. = 1/50)

玄室中央付近までの範囲においては炭化物を確認した。これらのことから、図 15 の右図に示したように、当該床面では玄門寄りの左側壁付近に、石室の主軸に沿って木棺が安置されていたと考えられる。人骨の出土状態から、頭部を玄門側にして埋葬していたようである。第 2 床面の時期は出土須恵器が破片であるため、その詳細については不明確であるが、おおむね 8 世紀頃と考えられる。なお、8 世紀から 9 世紀末頃の高墳の再利用については、「祭祀」としてよりは、「埋葬の場」として使用しているのが主体であったことが指摘されており (間壁 1982)、本墳もその一例としてあげることができる。

第 3 節 第 3 床面

第 3 床面は第 2 床面から約 10cm 堆積した黄灰色砂質土 (図 8 - 4 層) の上面で検出した。ただし、奥壁から約 30cm の範囲は第 2 床面と同一面になる。奥壁から約 80cm の位置で瓦器椀 1 点 (29 - 2) と土師器の甕か土釜の口縁部片 1 点が出土した。瓦器椀は奥壁寄りの左側壁付近で出土した破片と、玄室中央部右側壁付近で出土した破片と接合した。玄室中央部右側壁付近ではこのほかにも瓦器椀 1 点 (29 - 3) が出土している。玄室中央付近ではヒトの大腿骨などの骨片 (表 2 - 3) や獣類の四肢骨 (表 2 - 1・2)、瓦器椀片が出土した。平面図には図示できていないが、この付近では五輪塔の一部 (29 - 4) も出土している。出土位置は不明であるが、瓦器椀 1 点 (29 - 1) も当該床面に

伴うものと考えられる。また、玄室中央付近より玄門寄りや、奥壁付近からは大きさ1～4cmのオオタニシの殻が多量に出土している。そのほか、土師皿3点や動物遺存体ではウシ、ウマ等が出土している。この面の時期は出土した瓦器碗から12世紀末から13世紀の初め頃と考えられる。当該床面で埋葬が行われていたかについては、ヒトの大腿骨などが出土しているものの遺構などは認められず不明瞭である。少なくとも、瓦器碗や土製煮炊具、五輪塔の一部、多量のオオタニシの殻などが出土していることから祭祀が行われていた可能性が考えられる。この時期における奈良県下の石室の再利用については、12世紀代に祖先の墓として祭祀が行われていたことが指摘されており（土井1992）、第2床面とともに古墳の再利用が行われた古墳として注目できる。

第6章 出土遺物

巨勢山773号墳の出土遺物は、石室内から出土したものと墳丘周辺から出土したもの（埴輪片や土師器片、瓦器片）がある。石室内には合計3面の床面が認められるが、どの床面に帰属するのかが判断が困難な遺物がある。その遺物は、玄門付近から出土している須恵器の甕片と、唐草文軒丸瓦の一部である。須恵器の甕は器壁が7mm～1cmであり、外面に幅の狭い格子状のタタキ、内面に同心円文が認められる。第1床面か第2床面のいずれかに伴うものと思われる。唐草文軒丸瓦は石室内でも比較的上位で出土したものである。近世の瓦と考えられる。

以下、遺物の説明は床面ごとに記述する。その際に、第1床面の土器については、玄室内でその出土状態に一定のまとまりがあり、そこには型式差が認められることから出土地点ごとに記述していくこととする。鉄器や装身具については、出土地点ごとではなく種別ごとに記述していく。

第1節 第1床面

1. 土器

第1床面から出土した土器は図17～23に掲げた。これらの形態や調整・法量などの詳細は別表(67～79頁)に記したので参照されたい。

当該床面からは須恵器と土師器が出土した。それらは一部をのぞくと完形、もしくは完形に近いものである。図17に示したものは工事中に採集した須恵器であるが、第5章で述べたように、工事の時に一緒に取り上げられた台付壺の胴部と脚部片が第1床面の奥壁付近から出土した脚部片と接合したことから、これらの遺物についても当該床面に伴う可能性が高いと考えられる。図18～図22に示したのは奥壁付近から出土した土器であり、図23に示したのは玄室玄門寄り右側壁付近と玄室中央部左側壁付近の土器である。

奥壁付近（図 17～図 22）

須恵器は、杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、甗、広口壺、有蓋長頸壺の口縁部、台付壺の体部から脚部、短頸壺蓋、短頸壺、提瓶、器台の脚部が出土した。蓋杯については、先に述べたように奥壁付近から出土したもののなかには、法量、色調、焼成、胎土や、内面調整の当て具痕や静止ナデといった痕跡などから製作時および焼成時においてセット関係にあったと考えられるものが認められた。それは、杯蓋（17－1）と杯身（19－14）、杯蓋（18－6）と杯身（17－3）、杯蓋（18－7）と杯身（17－4）、杯蓋（18－8）と杯身（19－15）、杯蓋（18－9）と杯身（19－16）、杯蓋（18－10）と杯身（19－17）、杯蓋（18－11）と杯身（19－18）、杯蓋（18－12）と杯身（19－19）である。ただし、身に蓋がかぶせられた状態で検出されたものではなく、出土状態においてはそのセット関係は保たれていない。

須恵器杯蓋は、口径が 14.6～15.6cm の範囲内におさまる。天井部内面には当て具痕に静止ナデを加えているもの（17－1、18－6・8・9・12）や、静止ナデのみのもの（17－2、18－7・10・11・13）が認められる。

時期を示す特徴としては、口径は 14.6～15.6cm と大きいこと、口縁端部は丸く、端部内面に弱い段、もしくは段が弱くなって凹線状となったものがみられること、口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐること、天井部の回転ヘラケズリの範囲は（18－13）のみ 1/2 であるが、そのほかのものはすべて 2/3 であることが挙げられる。このような特徴から、これら杯蓋は TK10 型式に該当する。ただし、口縁端部内面に凹線状が認められてもそれが口縁部全体にみられるものではないことは、TK10 型式でも新しい要素をもつものと言えるかもしれない。

須恵器杯身は、口径が 12.5～13.1cm の範囲内におさまるもの（17－3・4、19－14～20）と、11.3cm のもの（19－21）がある。

須恵器杯身（17－3・4、19－14～20）は、底部内面には当て具痕に静止ナデを加えているもの（17－3、19－14～16・19・20）や、静止ナデのみのもの（17－4、19－17・18・21）が認められる。（19－17）は体部外面に直線を×字状に交差させたヘラ記号がみられ、（19－21）は底部外面に平行する 2本の直線に対して直交する 1本の直線を描いたヘラ記号が認められる。

時期を示す特徴としては、口径は 12.5～13.1cm と大きいこと、たちあがりは短く内傾していること、口縁端部は丸くおさめるが、なかには口縁部内面に面、もしくは弱い凹線状のものがあることなどが挙げられる。このような特徴から、これらの杯身は TK10 型式に該当する。

須恵器杯身（19－21）は天井部内面に静止ナデが認められる。口径が 11.3cm と小さいこと、たちあがりは低く内傾しており、口縁端部は丸くおさめていることから、TK209 型式に該当する。

須恵器高杯蓋（20－23）は口径 10.8cm である。口縁端部は丸く、端部内面に段をもつ。口縁部と天井部の境に稜をもつ。天井部には櫛描列点文がめぐる。この高杯蓋の口径と合う有蓋高杯は、出土遺物中には認められない。

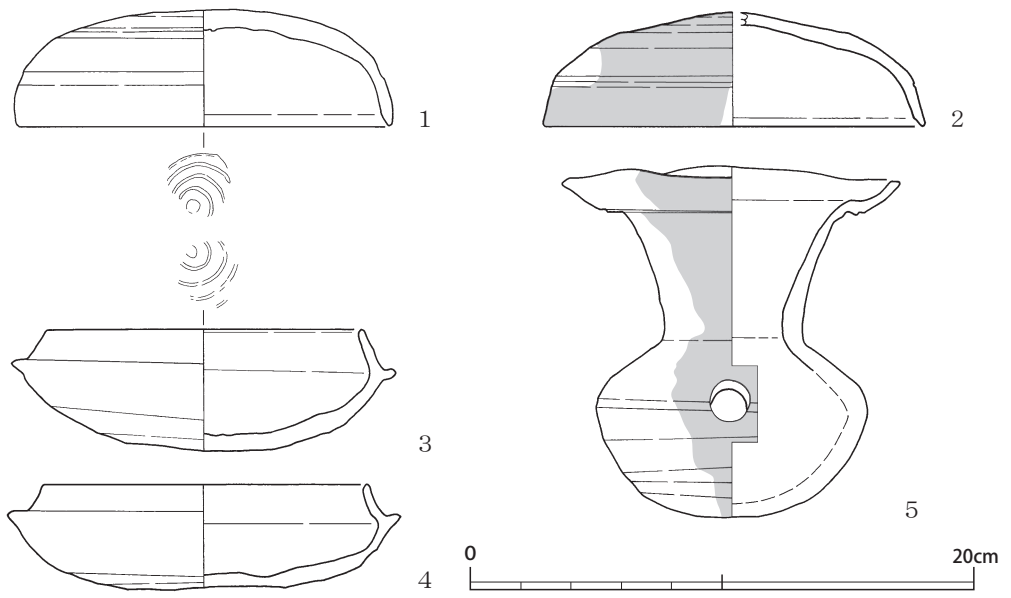


図17 第1床面に伴うと考えられる出土遺物 (S.=1/3)

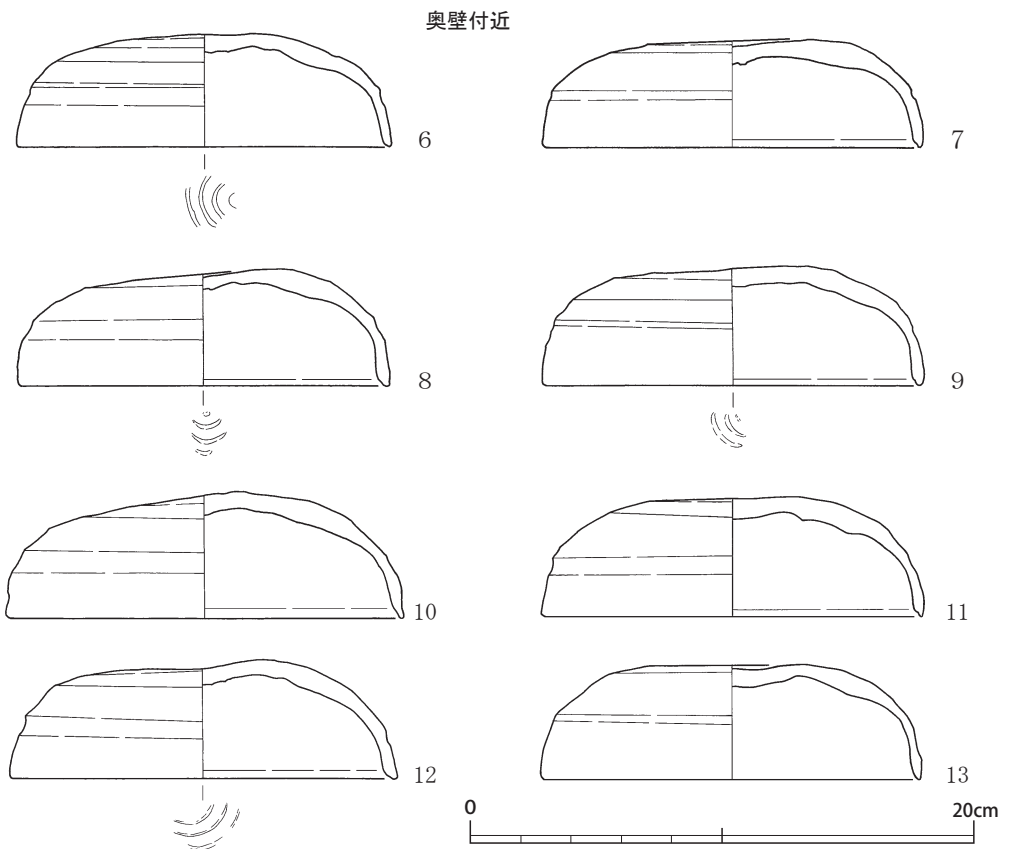


図18 第1床面 出土遺物(1) (S.=1/3)

奥壁付近

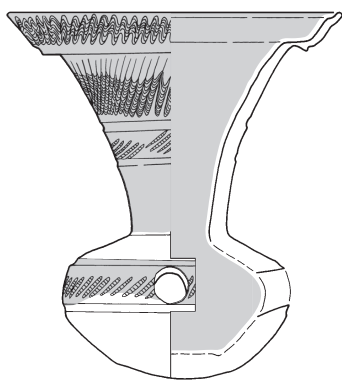
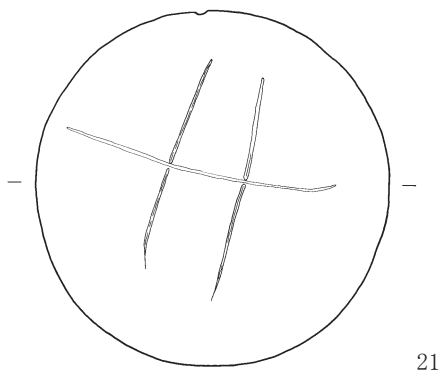
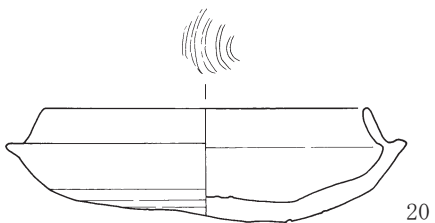
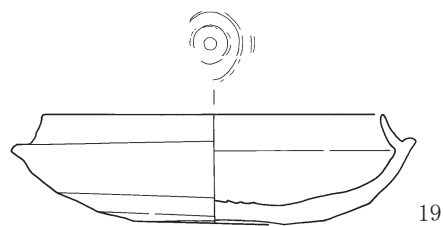
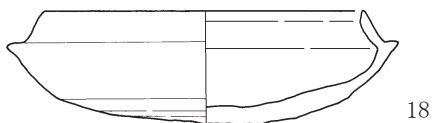
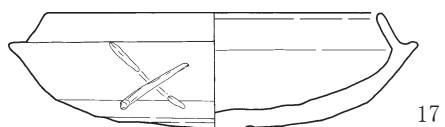
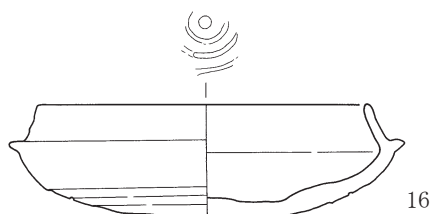
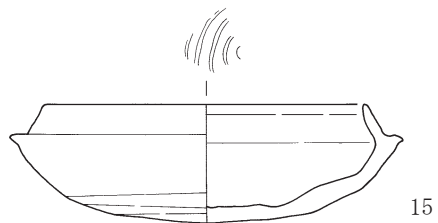
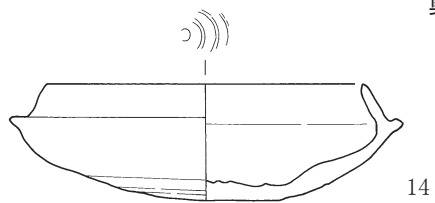
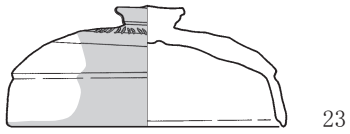


图19 第1床面 出土遺物(2) (S.=1/3)



奥壁付近

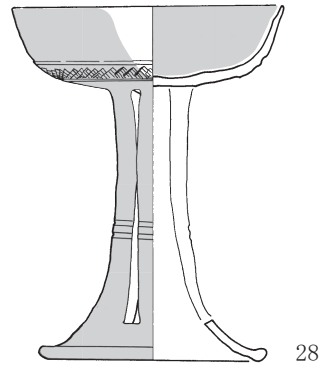
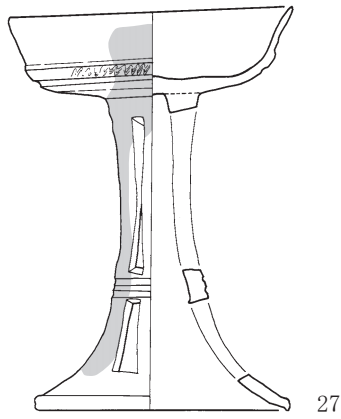
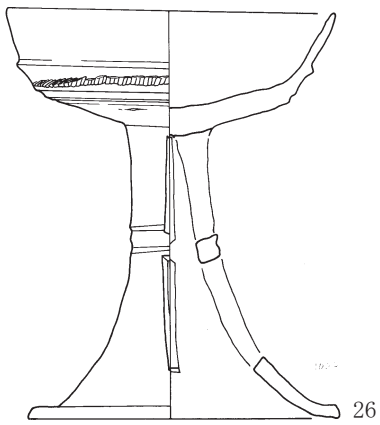
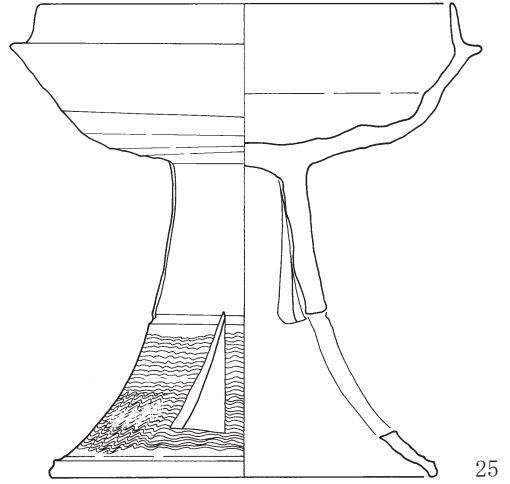
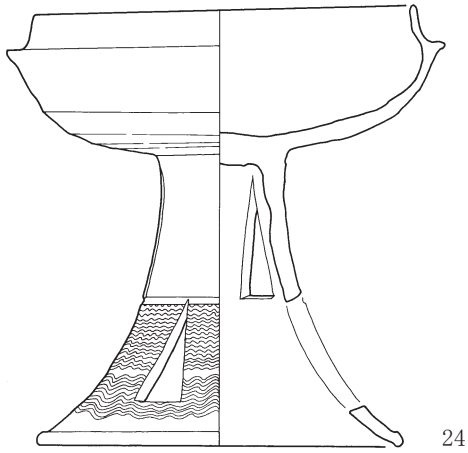
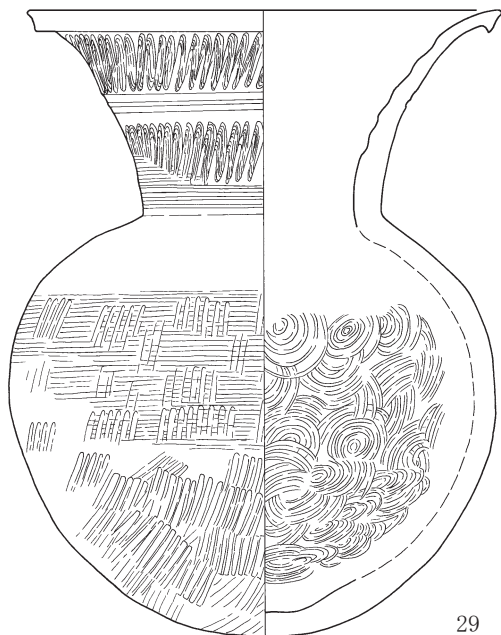
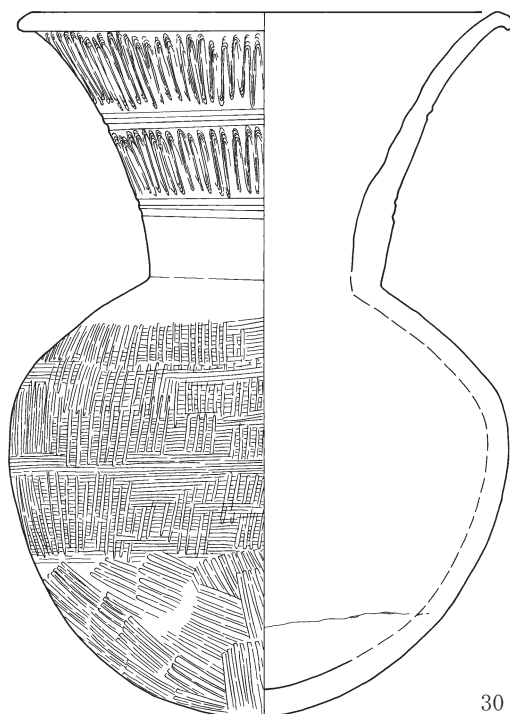


图20 第1床面 出土遺物(3) (S.=1/3)

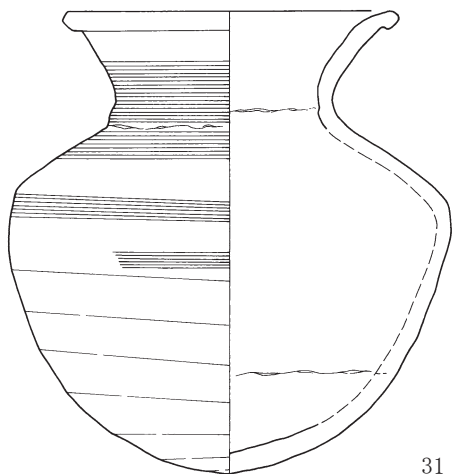
奥壁付近



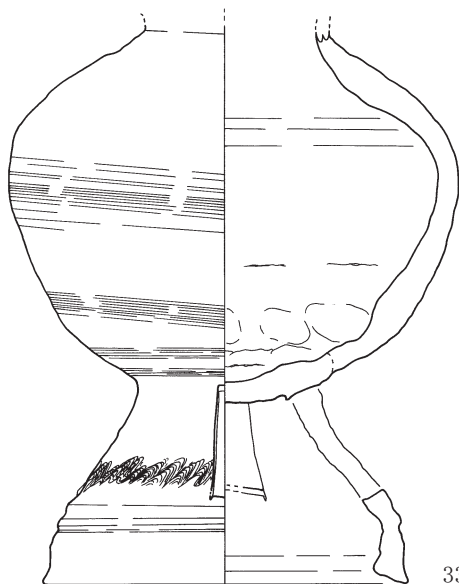
29



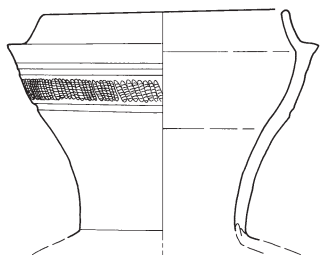
30



31



33



32

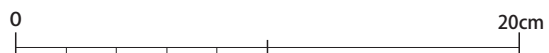


图 21 第 1 床面 出土遺物 (4) (S. = 1/3)

奥壁付近

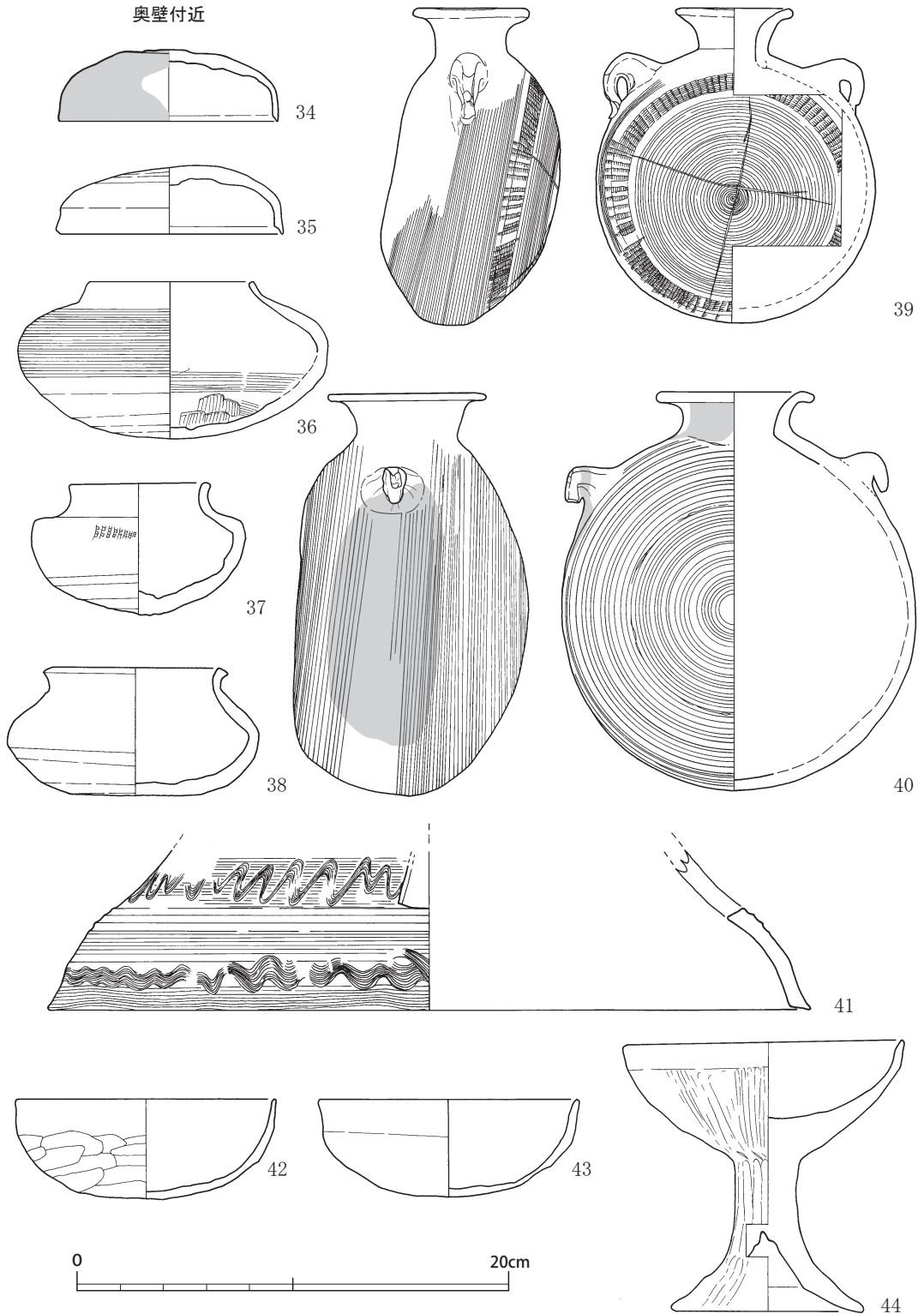


图22 第1床面 出土遺物(5) (S.=1/3)

須恵器高杯は長脚 2 段の有蓋高杯 2 点と同じく無蓋高杯 3 点が出土した。

須恵器長脚 2 段の有蓋高杯 (20 - 24) の口径は 14.8cm、(20 - 25) の口径は 16cm である。(20 - 25) は杯部の底部内面に静止ナデが認められる。いずれも杯部のたちあがりは短く上方へのびる。口縁端部は丸い。脚部には三角形のスカシが上下段とも 3 方向に穿たれ、上段と下段とで千鳥に配置されている。下段には波状文がめぐる。これらは TK10 型式に該当する。

須恵器長脚 2 段の無蓋高杯 (20 - 26) の口径は 12.4cm、(20 - 27) の口径は 10.9cm、(20 - 28) の口径は 10.5cm である。いずれも口縁部は外上方へのびている。口縁端部は丸い。口縁部と体部の境には稜をもち、体部と底部の境には凹線をめぐらす。(20 - 26) と (20 - 27) は杯部の底部内面に静止ナデがみられる。(20 - 26) と (20 - 28) は稜と凹線の間には楕円列点文をめぐらし、(20 - 27) では波状文とみられる痕跡が認められる。(20 - 26) の脚部には長方形のスカシが上下段とも 2 方向にあり、(20 - 27) の脚部には長方形のスカシが上下段とも 3 方向に穿たれている。(20 - 28) の脚部には杯底部から裾部付近まで線のように細長い長方形のスカシが 3 方向に穿たれている。脚部が長脚 2 段であることや、スカシ孔の特徴から、(20 - 26) と (20 - 27) は TK43 型式、(20 - 28) は TK43 型式か TK209 型式に該当すると考えられる。

須恵器壺は 2 点出土した。(17 - 5) の口径は 13.1cm であり、(19 - 22) の口径は 13.2cm である。(19 - 22) の頸部径は小さく、頸部は長大化している。また、口縁部と頸部上位に波状文、頸部中位と体部中位に楕円列点文がめぐる。

須恵器広口壺は 3 点が出土した。(21 - 29) と (21 - 30) は口縁部に 2 段の波状文がめぐり、肩部や体部には平行タタキのちカキメを施し、底部には平行タタキが認められる。(21 - 31) はこれらに比べて頸部が短く、頸部～肩部と体部上位にカキメを施している。

須恵器有蓋長頸壺 (21 - 32) の口径は 9.6cm である。頸部上位に楕円列点文を密に施している。この有蓋長頸壺は後述する台付壺 (21 - 33) と色調、焼成、胎土などの点で類似しているため、同一個体の可能性も考えられる。

須恵器台付壺 (21 - 33) は体部にカキメ、脚柱部下半に波状文を施す。脚部には 4 方向の方形スカシが穿たれている。

須恵器短頸壺蓋は 2 点出土している。(22 - 34) は口径 10cm、(22 - 35) は口径 10.3cm であり、いずれも口縁端部の内面に段をもつ。(22 - 35) は焼成時の痕跡から短頸壺 (22 - 36) とセット関係にあることがわかる。

須恵器短頸壺は 3 点出土している。(22 - 36) は体部の最大径が上位にあり、やや内傾して短くたちあがる口縁部をもつものである。肩部の下半から体部の上半にかけてカキメを施している。これは上記の (22 - 35) とセット関係にある。(22 - 37) は小形品で、体部の最大径が上位にあり、垂直気味に短くたちあがる口縁部をもつ。口縁端部はやや面をなす。体部上位の一部にタタキが認められる。(22 - 38) は体部の最大径が中位にあり、外反して短くたちあがる口縁部をもつ。この

短頸壺は TK209 型式の杯身 (19 - 21) の上にとった状態で出土した。

須恵器提瓶は 2 点出土している。(22 - 39) は小型品で、環状把手を有する。体部前面の周囲には楡描列点文を廻らせ、そこから中心へカキメを施す。側面はカキメ、背面はナデである。(22 - 40) は鉤状把手を有し、体部前面と背面にカキメを施す。

須恵器器台 (22 - 41) は脚部片が出土した。残存率は全体の 1 / 4 程度である。三角形のスカシ孔が穿たれていたと考えられる。

土師器杯は 2 点出土している。(22 - 42) は口径 11.9cm、(22 - 43) は口径 11.8cm である。(22 - 42) は外面にケズリを施している。

土師器高杯 (22 - 44) は口径 12.6cm である。外面は、口縁部に横方向のナデがみられ、体部から脚部にかけてはナデののちミガキを施している。

玄室玄関寄り右側壁付近 (図 23 - 45)

須恵器杯蓋 (23 - 45) は天井部内面に静止ナデが認められる。口径が 14cm とやや小さいこと、口縁端部は丸くおさめ、口縁部と天井部の境の稜が不明瞭であることや、天井部の回転ヘラケズリの範囲が 1 / 2 であることから TK43 型式に該当しよう。

玄室中央部左側壁付近 (図 23 - 46 ~ 52)

須恵器杯蓋 (23 - 46) は口径が 12.8cm と小さい。口縁端部は丸くおさめ、口縁部と天井部の境の稜が不明瞭であること、天井部の回転ヘラケズリの範囲が 1 / 2 であることなどから、TK209 型式に該当する。

須恵器杯身 (23 - 47) は口径が 11.7cm と小さい。たちあがりは低く内傾しており、口縁端部は丸くおさめていることから TK209 型式に該当する。

須恵器短脚の無蓋高杯 (23 - 48) の口縁部は外傾して外上方に開き、口縁端部は丸い。杯部の底部内面には静止ナデがみられる。

須恵器壺 (23 - 51) は頸部径が小さく、頸部は長大化している。

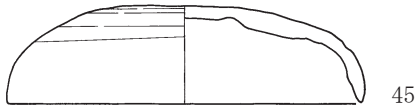
須恵器提瓶 (23 - 50) の把手は形骸化してボタン状となっている。体部前面と背面にはカキメを施す。

土師器杯 (23 - 52) は口径 10.8cm である。奥壁付近から出土した 2 点の杯と比べてやや小さい。

2. 鉄鏃

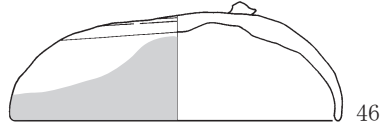
出土鉄鏃は破片を含め 60 点以上が出土しており、そのうち比較的残存が良好で図化したものを図 24 に示した。鉄鏃は尖根系長頸鏃が出土しており、出土位置によりおおむね 2 つの型式に分かれる。先に述べたように、玄室中央部右側壁付近、および右側壁基底石の抜き取り穴内からは多数の鉄鏃が出土した。鏃身部が残存しているものは 13 点あり、長三角形、もしくは長三角形と考えられるものが 11 点、柳葉形と考えられるものが 2 点ある。奥壁付近からは鏃身部が柳葉形を呈す

玄室玄門寄り右側壁付近

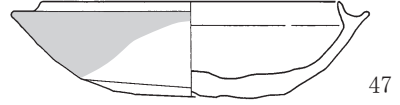


45

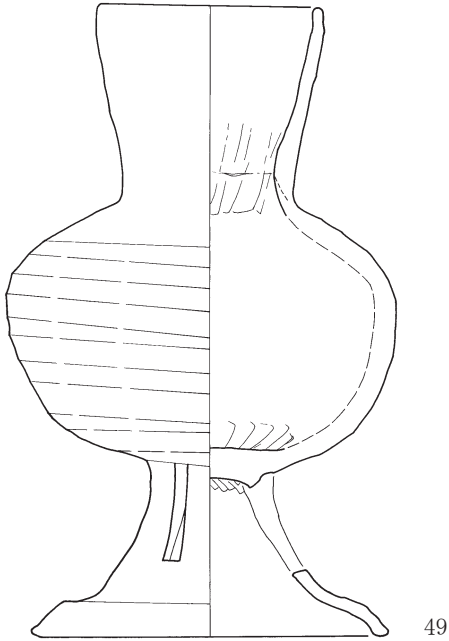
玄室中央部左側壁付近



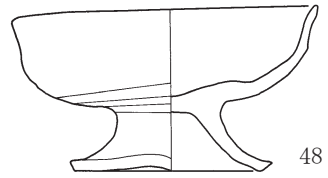
46



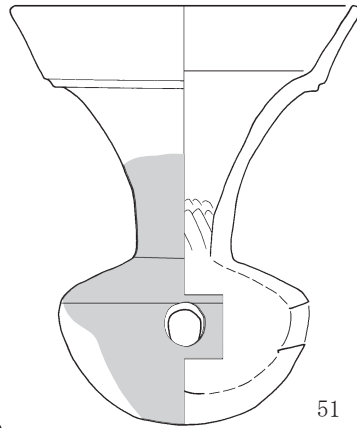
47



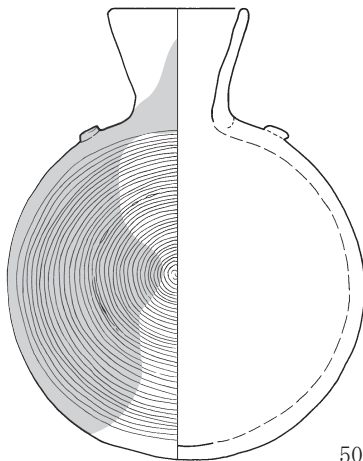
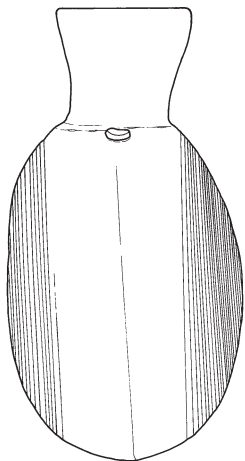
49



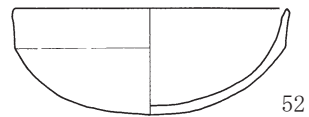
48



51



50



52



图 23 第 1 床面 出土遺物 (6) (S.=1/3)

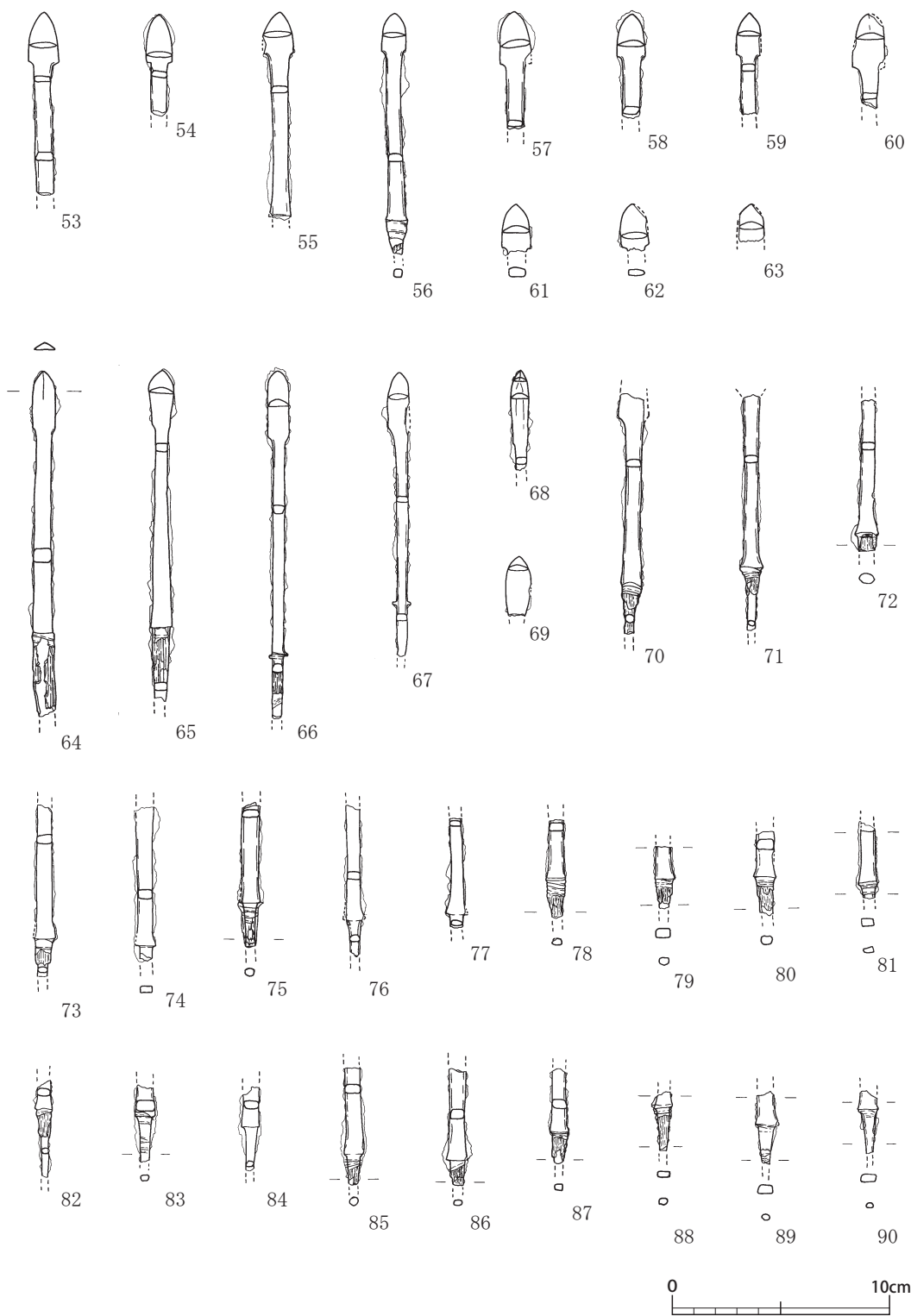


图24 第1床面 出土遺物(7) (S.=1/3)

るものが5点出土している。

(24 - 53 ~ 63) は鎌身部が長三角形を呈するものである。(24 - 53 ~ 56) は平造、(24 - 57 ~ 63) は片丸造である。頸部の断面形は方形、または隅丸方形である。(24 - 56) は頸部に角関を有し、茎部に樹皮が巻きつく。

(24 - 64 ~ 68) は鎌身部が柳葉形を呈するものである。頸部長は(24 - 64 ~ 66) が9.2 ~ 9.8cmであり、(24 - 67) は7.8cmである。(24 - 64) は鎌身部に鑄を有する。関は直角関を有するもの(24 - 64・65) と棘状関を有するもの(24 - 66・67) がある。(24 - 68) は身部長3.4cmであり、ほかのものよりも長い。

(24 - 70 ~ 90) は、頸部や茎の形状がわかるものを示した。いずれも玄室中央部右側壁付近と、右側壁基底石抜き取り穴内から出土したものである。(24 - 70) と(24 - 71) は頸部が残存しており、頸部長はそれぞれ7.5cmと7.9cmである。

3. 鉄刀

鉄刀は2点が出土した。

(25 - 94) は刃と茎の先端部が欠損して出土した。残存長は43.4cmであり、身部の残存長29.9cm、残存幅3.3cm、残存厚8mm、茎部の残存長13.5cm、残存幅は身部側で3.2cm、茎端部側で1.7cmある。刀身のつくりは断面三角形であり、棟の形状は角棟である。関は撫角片関である。茎には直径約6mmの目釘孔が認められる。

(25 - 95) は残存状態が非常に悪く、破片が連なっている状態で出土した。出土状態から、長さは66cm以上あったと考えられる。比較的残りのよい破片から、身部の残存幅約3.4cm、残存厚約7mmある。刀の表面には、木質と布が認められた。布は木質の間に挟まった状態であるため、鞘、もしくは別の有機質を有する個体が付着している可能性が考えられる。また、(25 - 95) の近くから刀装具と考えられる破片が2点(図版18- 刀装具1、刀装具2) 出土している。1点は方形をなし、残存長が一辺約2cmである。保存処理を担当した元興寺文化財研究所からの報告によると、表面には綾織の布と思われるものが残り、その裏には木質がみられる。もう1点は木片であり、その一部には綾織の布と思われるものが残っている。この2点は同一個体である可能性が高い。

4. 胡籙金具

胡籙金具は、吊手金具の一部とみられるものが3点出土した。

(25 - 91) は鉄地金銅張胡籙金具片である。同一個体とみられる3片が出土しているが、遺存状態が良好ではないため比較的良好的な2片を図化した。片側が欠損しており、その最大残存幅は3.2cmである。表面は周縁に2条の沈線を施し、その間に波状列点文を配している。裏面には布目痕・木質が付いており、表面の金銅板の上から鉾を打って留めているが、鉾頭は肉眼観察では多くを欠

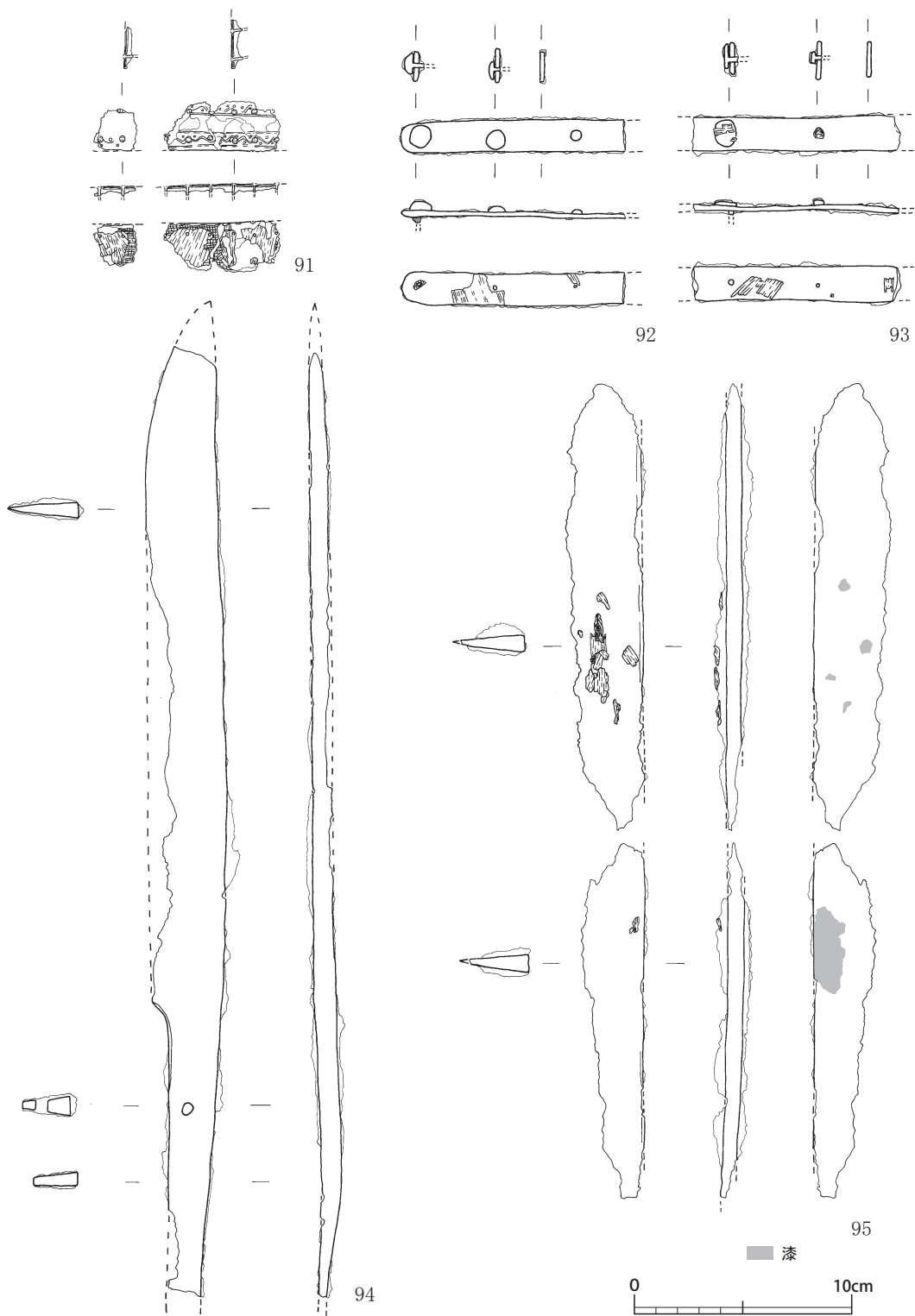


图25 第1床面 出土遺物(8) (S.=1/3)

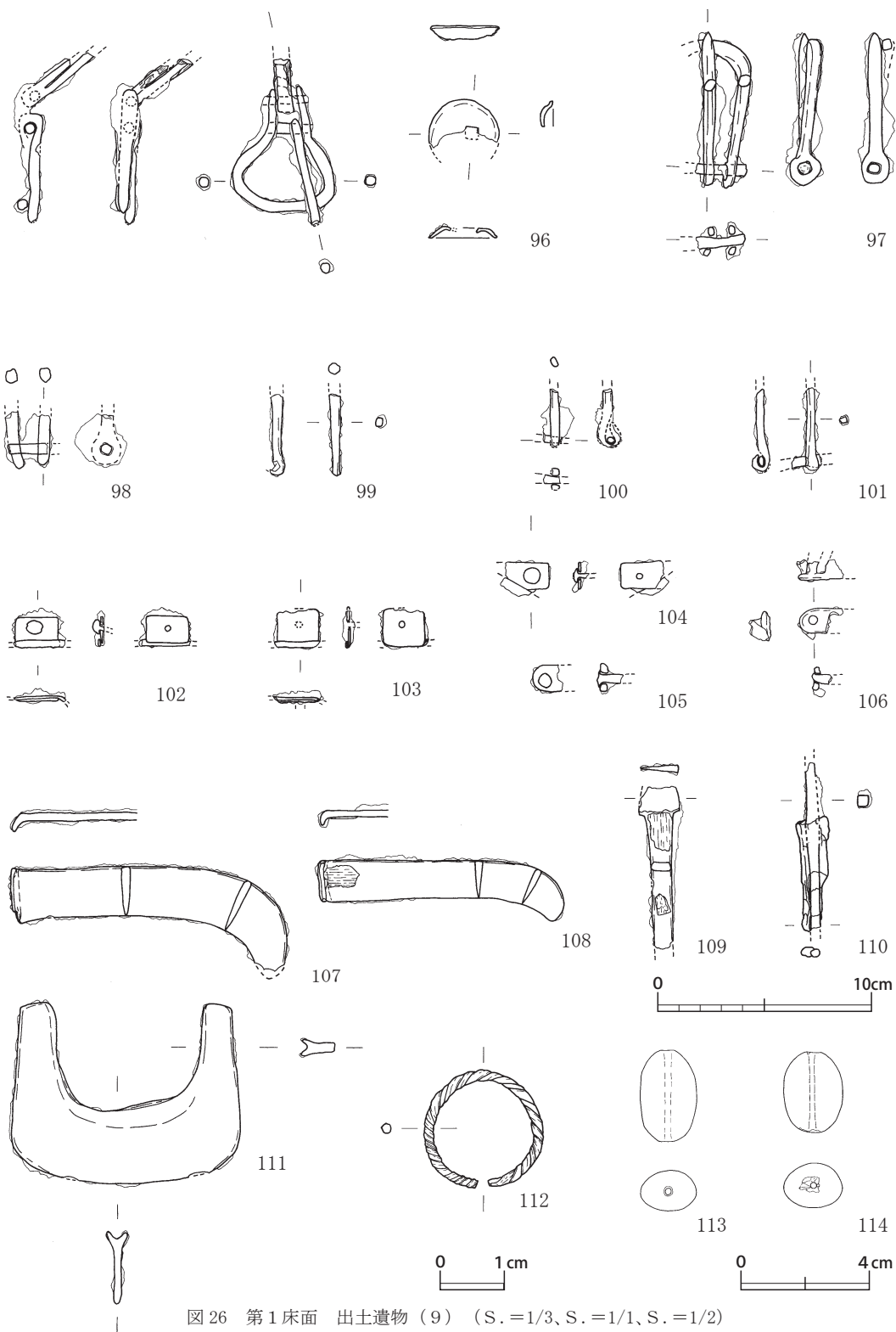


图26 第1床面 出土遺物(9) (S.=1/3, S.=1/1, S.=1/2)

損している。なお、金銅板に関する蛍光X線分析結果は第7章第2節を参照されたい。また、保存処理を担当した元興寺文化財研究所からの報告によれば、鋳部分に銀が検出され、また、裏面には木質と獣毛と思われる痕跡が確認されている。鋳部分に銀が検出されたことから、鋳頭は、元は銀被せであった可能性が考えられる。

(25 - 92) と (25 - 93) は同一個体である可能性が高い。(25 - 92) は端が丸く収まる。(25 - 92) は残存長 10.1 cm、同じく幅 1.5 cm、(25 - 93) は残存長 9.5 cm、同じく幅 1.6 cmである。表面には鋳頭の直径約 1 cm のものと径約 4 mm のものが穿たれている。いずれも裏面には木質がみられ、(25 - 93) は鋳頭にも木質が付着している。

5. 馬具

馬具は鞍 1 点、鉸具 5 点、方形金具 3 点や留金具 2 点などが出土した。

鞍 (26 - 96) は鉸具と座金具、脚からなる。鉸具の輪金は断面形が径約 5 mm の円形の鉄棒を丸く曲げて作られている。輪金には T 字形の刺金と脚を取り付けるための軸をつけている。座金具は半分が欠損している状態であった。直径約 3.2 cm である。

鉸具 (26 - 97) は輪金の半分が欠損している。輪金は断面形が一辺約 5 mm のややゆがんだ隅丸方形の鉄棒を丸く曲げて作られている。輪金の基部には横棒が渡してあり、そこに刺金を巻きつけている。(26 - 98) は輪金の基部と、刺金である。輪金の断面は径約 5 mm の円形をなしている。刺金は輪金の基部に渡された横棒に巻きつけている。(26 - 99) ・ (26 - 100) ・ (26 - 101) も刺金部分で、やはり同様にその基端部を横棒に巻きつけた痕跡が認められる。断面は (26 - 99) と (26 - 100) は円形をなし、(26 - 99) は径約 5 mm、(26 - 100) は径約 4 mm である。(26 - 101) は方形で一辺約 3 mm である。これらの鉸具は鞍 (26 - 96) の周辺から出土していることから、馬具の可能性が高い。

方形金具はいずれも責金具が錆着している。(26 - 102) は幅 1.25 cm、長さ 2 cm であり、鋳頭の径約 7 mm の鋳が打たれている。(26 - 103) は幅 1.9 cm、長さ 1.9 cm であり、鋳頭は欠損している。(26 - 104) は幅 1.3 cm、残存長 2 cm あり、鋳頭の径約 7 mm の鋳が打たれている。

留金具 (26 - 105) は幅 1.2 cm、残存長 1.4 cm である。径約 6 mm の鋳が打たれている。(26 - 106) は別個体の鉄器が錆着していると考えられる。幅約 1.2 cm、残存長 2.2 cm である。径約 4.5 mm の鋳が打たれている。

6. 鉄製農工具

鉄製農工具は、曲刃鎌 2 点、刀子 1 点、鹿角装鉄鑿 1 点、鍬鋤先 1 点が出土した。

曲刃鎌 (26 - 107・108) はいずれも基部に折り返しを有し、折り返しを表に向けた場合に鋒が右を向く。(26 - 107) は全長 12.7 cm、身幅約 2.5 cm、厚さ約 4 mm である。折り返し部の角度は刃

部に対して鈍角である。(26 - 108) は全長 7.3 cm、身幅約 2 cm、厚さ約 3 mm である。折り返し部の角度は刃部に対してほぼ直角である。折り返し部付近に主軸方向に木目がみられる。

刀子 (26 - 109) は刃部の大半と茎部の先端が欠損している。残存長約 7.5 cm、刃部の残存長 1.5 cm、関部幅約 1.9 cm、茎部は残存長約 6 cm、幅は関部付近で約 1.3 cm、中央部で約 9 mm、厚さ約 4 mm である。茎部には主軸方向に木目がみられる。

鹿角装鉄鑿 (26 - 110) は刃部と茎部の先端が欠損しているが、断面を観察すると刃部が正方形を呈していることから鉄鑿の可能性が考えられる。残存長 7.3 cm、刃部の残存長は 2.8 cm で、断面は一辺約 5 mm である。茎部には鹿角が装着されている。ミニチュアの鑿と考えられる。

鍬鋤先 (26 - 111) は U 字形鍬鋤先である。幅 10.5 cm、長さ 8 cm、厚さ 0.9 cm で、ミニチュアの鍬鋤先と考えられる。

7. 装身具

装身具は銀製指輪 1 点と琥珀製玉 2 点が出土した。

銀製指輪 (26 - 112) は完形品である。握じりが認められるもので、外径約 1.85 cm、内径約 1.5 cm、断面形は径約 1.8 mm の円形で、重さは 1.1 g である。4 本の銀線を重ねて握じり、円形にしている。両端部は接続せず、約 1.5 mm の隙間があく。素材には 98% の銀が用いられている。この銀製指輪の詳細は、第 7 章第 1 節および第 2 節を参照されたい。

琥珀製玉はいずれも完形品である。(26 - 113) は長さ 2.85 cm、長径 1.75 cm、短径 1.25 cm、孔径約 2 mm、重さは 4.0 g である。(26 - 114) は長さ 2.5 cm、長径 1.85 cm、短径 1.4 cm、孔径約 2 mm、重さは 4.0 g である。

8. 不明鉄製品

3 点が出土した。いずれも両側の頭部が打たれているため、頭部の平面は不整形な形をなしている。よって、ここでは鋌状金具と呼ぶこととする。断面形は方形を呈する。(27 - 123) は長さ 2.4 cm、幅 6 ~ 7 mm、厚さ 4 mm である。棒状の部分の一部には、本体主軸に直交する木目が認められる。(27 - 124) は長さ 2.6 cm、幅約 6 mm、厚さ約 5 mm である。主軸方向に直交する木目が認められる。(27 - 125) は長さ 2.6 cm、最大幅 7 mm、厚さ約 4 mm である。棒状部分には本体主軸に直交する木目が認められる。これらは鞍 (26 - 96) の近くから出土していることから、馬具の一部である可能性も考えられる。

9. 鉄釘

鉄釘 (27 - 115 ~ 117) はいずれも小形のもので、頭部を直角に折り曲げている。身部には一部に横方向の木目が認められる。(27 - 115) は身部の残存長 8.1 cm、幅約 5 mm、厚さ約 3 mm である。

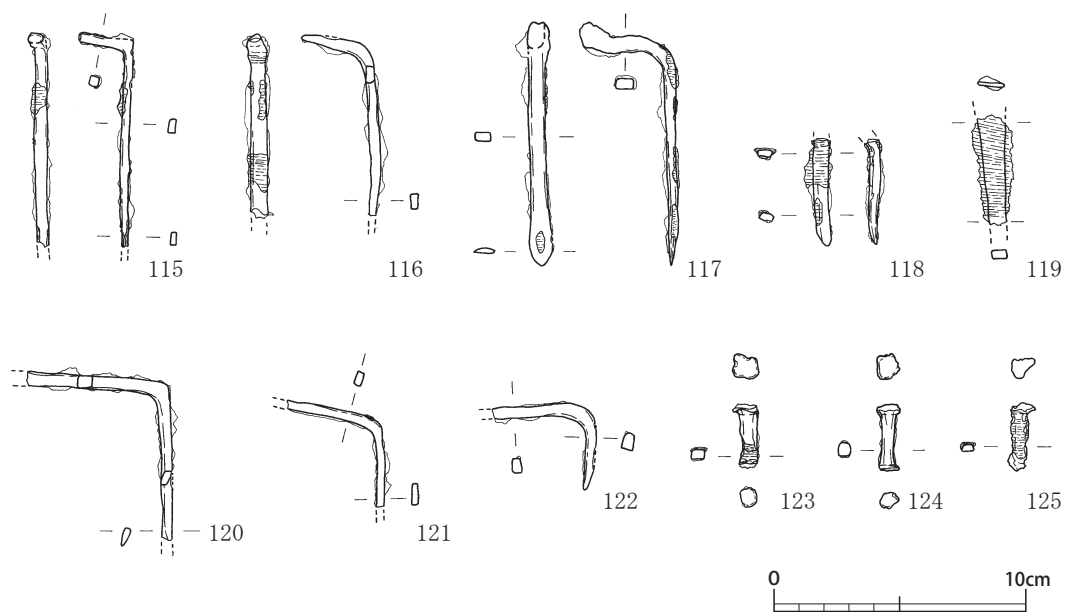


図27 第1床面 出土遺物(10) (S.=1/3)

頭部の断面は一辺4mmの方形を呈する。(27-116)は頭部の先端を打ち伸ばしている。身部の残存長6.9cm、幅約6mm、厚さ約3mmである。(27-117)は完形だと思われる。頭端部が反った形状をなす。身部の先端はやや広がったのち、刃のように先がやや尖っている。身部の残存長は約9cm、幅約6mm、厚さ約4mmである。

(27-118・119)は鉄釘の身部、もしくは鏃と考えられる。(27-118)は残存長4.1cm、幅約5mm、厚さ約3mmである。横方向の木目がみられる。(27-119)は残存長4.3cmであり、残存する最大幅は11mm、厚さ約3mmである。

(27-120～122)はいずれも断面が方形の棒状の鉄を曲げたものである。鏃と考えられるが木質は認められない。(27-120)は残存長約6cmで、幅は5～6mm程度であるが、厚さは2～5mmである。(27-121)は残存長約3.9cmで、幅6～9mm、厚さは2.5cmである。(27-122)は片方の端部が残存している。長さ3.4cm、幅約6mm、厚さ約3mmで、端部が残存していない方の残存長は4.1cmである。

第2節 第2床面

1. 土器

須恵器は蓋B、杯B、壺か甕の口縁、甕片が各1点ずつ出土した。

(28-1)は天井部の多くを欠損しているが、口縁部の形態から天井部につまみを有する蓋Bの

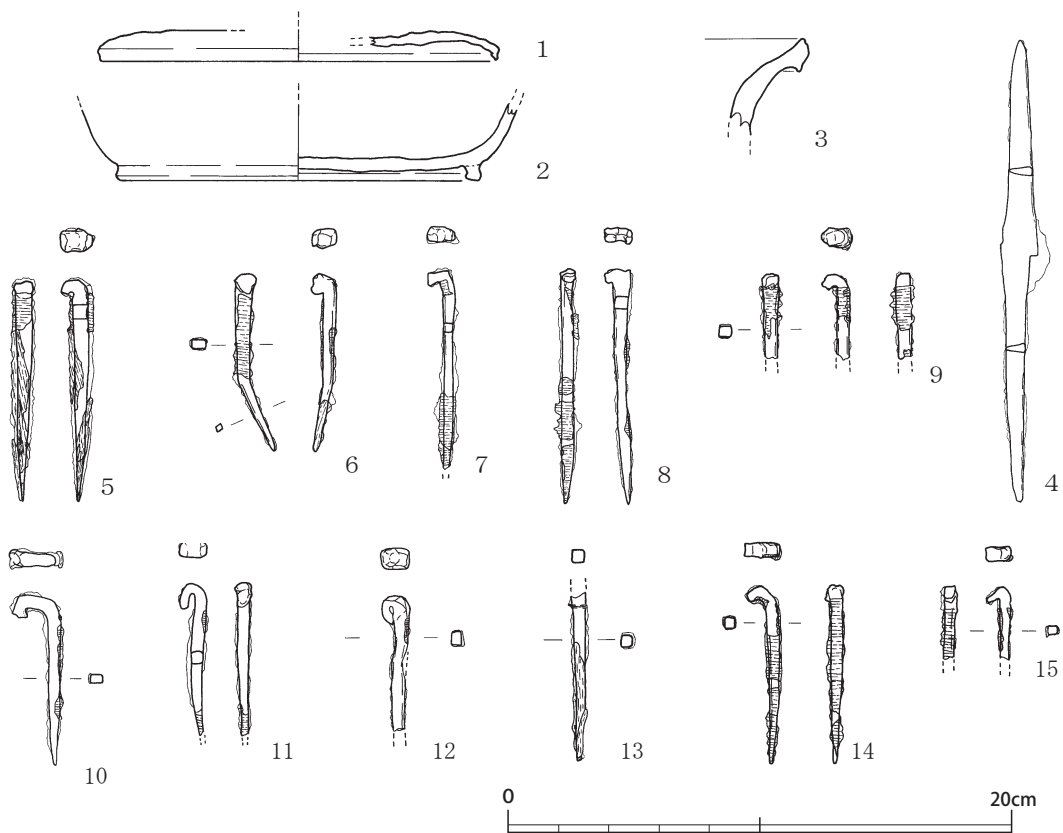


图 28 第 2 床面 出土遺物 (S. = 1/3)

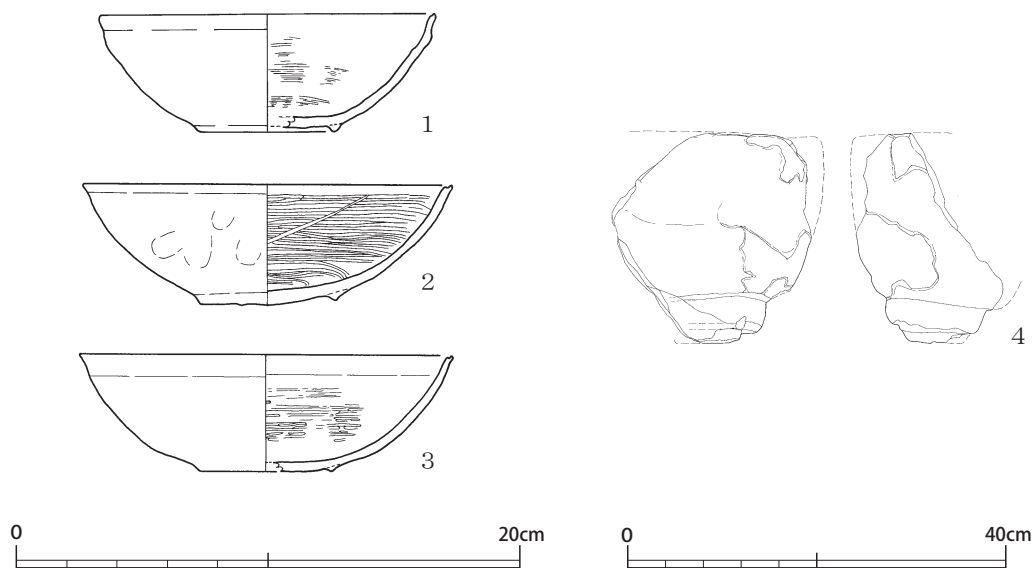


图 29 第 3 床面 出土遺物 (S. = 1/3, S. = 1/8)

破片と考えられる。復元口径は 15.4 cm である。(28-2) は高台が付く杯 B の破片である。口縁が欠損しているため、少ない情報からの復元であるが、杯 B (28-2) の口径は 16 cm を超えると考えられ、蓋 B (28-1) とはセットにならない。(28-3) は壺か甕の口縁部と考えられる。3 片の破片が接合したものであり、そのうちの 2 点の出土位置は不明瞭であるが、残りの 1 点から第 2 床面に帰属するとした。ただし、その形態から第 1 床面に伴う可能性がある。

2. 鉄製品

刀子 (28-4) が 1 点出土した。背に関を有する。長さ約 18.1 cm、刃部長約 8.4 cm、茎部約 9.7 cm である。茎部は断面形が台形を呈しており、背幅 4 mm、刃部側の幅は 2 mm である。

3. 鉄釘

鉄釘は 11 点出土した (28-5~15)。いずれも小形のもので、頭部を直角に折り曲げている。身部には一部に横方向の木目が認められる。(28-5) は長さ 8.8 cm である。身部の頭部付近約 1.5 cm の範囲には横方向の木目があり、その下部の約 6.8 cm の範囲には斜め方向の木目が認められる。(28-6) は身部の中央付近から折れて屈曲している。頭部から身部の屈曲点までは長さ 4.2 cm であり、そのうち身部には約 3.3 cm の範囲で横方向の木目が認められる。屈曲した身部には、先端から約 2.1 cm の範囲で縦方向の木目が認められる。

4. 動物遺存体

ヒトの骨は頭骨や歯、大腿骨、上顎骨、脛骨などが出土した。

その詳細については第 7 章第 3 節で分析結果を提示しているので参照されたい。

第 3 節 第 3 床面

1. 土器

土器は瓦器椀 3 点と、土師皿片 3 点、土師器の甕か土釜の口縁部が 1 点出土した。

瓦器椀 (29-1~3) はいずれも口縁を外反させ、端部の内側に沈線が施されている。高台は低い逆三角形を呈する。体部内面には横方向のミガキが密に施されている。瓦器椀は口径と高台の形態から、12 世紀末から 13 世紀の初め頃のものと考えられる。

土師皿片は 3 点あり、そのうち 1 点は大形土師皿、そのほか 2 点是小形土師皿だと考えられる。口縁部の形態をみると、大形土師皿と小形土師皿 1 点は、「て」字状口縁を呈している。このような「て」字状口縁の土師皿は 10~11 世紀に多いとされる (松本編 1988)。

2. 石製品

五輪塔（29－4）は、空風輪が出土した。残存長 22.2 cm、残存幅 20.4 cmである。

3. 動物遺存体

動物遺存体は、多量のオオタニシの殻が出土したほか、ヒト、ウシ、ウマ等がみられた。とくにウシの骨が多く認められる。その詳細は、第7章第3節を参照されたい。

第7章 自然科学的方法による分析

第1節 巨勢山 773 号墳出土銀製指輪の制作技術の考察

京都美術工芸大学

村上 隆

1. はじめに

巨勢山 773 号墳から出土した銀製指輪（本書図 26 - 112・図 30）は、外径が約 1.85 cm、太さが約 1.8 mm、重さ 1.1 g とたいへん小さなリングである。材質は、蛍光 X 線分析により、微量に金、銅を含むが、純度の高い銀製であることがわかっている⁽¹⁾。6 世紀後半の遺物であるこの指輪の制作技術を探るために最新のマイクロフォーカス X 線 CT (Micro-focus X-ray Computed Tomography) を用いた解析を行ったのでここに報告する。

2. 調査の経緯

この指輪の特徴は、指輪の表面に振った痕跡が荒い溝状に残っていることにある。振りの方向はいわゆる S タイプ⁽²⁾であり、また振りのピッチも一定でない。これは太さ約 1.8 mm の単なる銀線を簡単に円状に曲げたものではなく、かなり複雑な工程を経て成形されていることを窺わせる。出土状態で実見した際に、表面の一部に薄い板が積層したような痕跡が観察されたため、薄い銀板を重ねて巻いた状態を想定し、同じく 6 世紀後半の遺物である福岡市桑原石ヶ元古墳から出土した金製の耳環で確認した「金薄板積層成形技法」⁽²⁾に似た技法によって制作されたのではないかと考えた。しかし、保存処理後に再確認したところ、指輪表面にこのような薄板が積層した痕跡は認められず、制作技術そのものを改めて検討する必要があることがあった。制作技術を探るためには、単なる表面的な観察だけではなく、指輪本体の内部の構造を調べる必要があるため、マイクロフォーカス X 線 CT を用いることにした。用いた装置は、京都国立博物館平成知新館に、新たに導入された「文化財用マイクロフォーカス X 線 CT」である。この装置は、微細な遺物の内部構造を探るには最適な装置であるが、今回分析に供した銀製指輪はその限界に挑戦するものであった。

用いた装置と観察条件は以下の通りである。

「文化財用マイクロフォーカス X 線 CT」(TOSHIBA) (京都国立博物館平成知新館設置)

条件：X 線 電圧：200 kV、電流：50 μ A、6 μ m / 1 sec



図 30 銀製指輪 (S. ≒ 2/1)

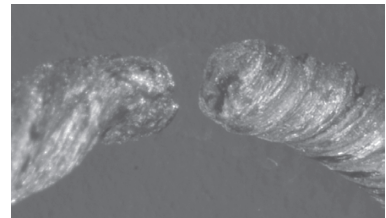


図 31 開口部のアップ

3. マイクロフォーカスX線CTによる銀製指輪の解析

巨勢山 773 号墳から出土した銀製指輪は、表面に振った痕跡が残されている。この振りの方向はSタイプであり、これまで調査してきた古代金糸などにも一般的に認められている振り方である⁽²⁾。そして、振ることで生じた溝のピッチがかなりランダムで（図 30）特に片側の開口部に近づくに伴い密になっていることがわかる（図 31）。これは金属に振りを重ねていくに伴い生じる加工の痕跡である。ただ、一般的に金属線を振あげていくと加工硬化のため、破断が生じることもあり、これほどの振りを施すためには熱処理などの工夫が必要となる。しかし、古代の工人は金属の加工技術に長けていて、1.8mmの太さの銀製針金で丸い輪を作っても、強度が足りなくてすぐに変形してしまうことをよく知っているため、指輪に強度を付加するための何らかの強化技術が試されている可能性があると考えた。出土状態で実見した際に薄板積層成形技法を想定したのはそのような背景があった。従って、薄板積層成形技法の可能性も含めて、銀製指輪の制作技術を探るために、マイクロフォーカスX線CTで内部構造の観察を行った。

マイクロフォーカスX線CTは、遺物の内部を高解像で解析することが可能であるが、銀は、例えば銅と比べてX線が通りにくいこともあり、今回観察に供した銀製指輪の内部状態がどの程度確認できるかは未知数であった。条件を変えて何度か観察を行った結果、銀製指輪の開口部に近い部分の断面の状態（図 32）から、0.5mm程度の細い銀線4本を撚って振っている可能性があることが認められた。それぞれの銀線の断面は丸いものではなく不定形で角ばっており、その太さもかなりランダムであることがわかる。図 33 に、想定される断面の模式図を示した。4本の銅線を撚り上

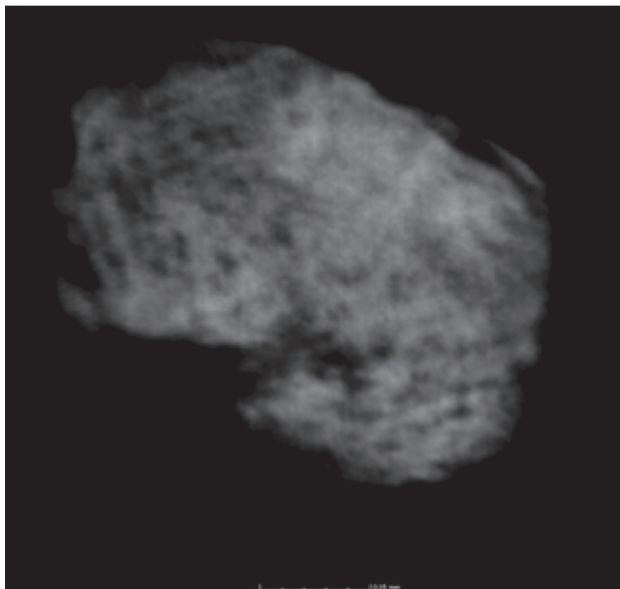


図 32 マイクロフォーカスX線CTによる断面観察

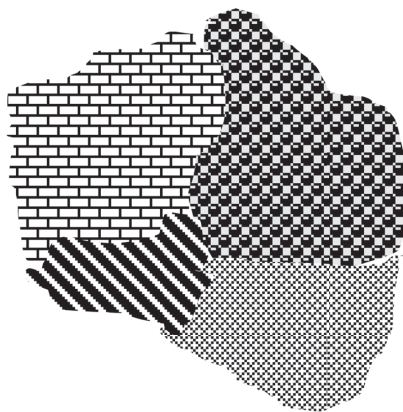


図 33 X線CTの観察結果に基づく想定図

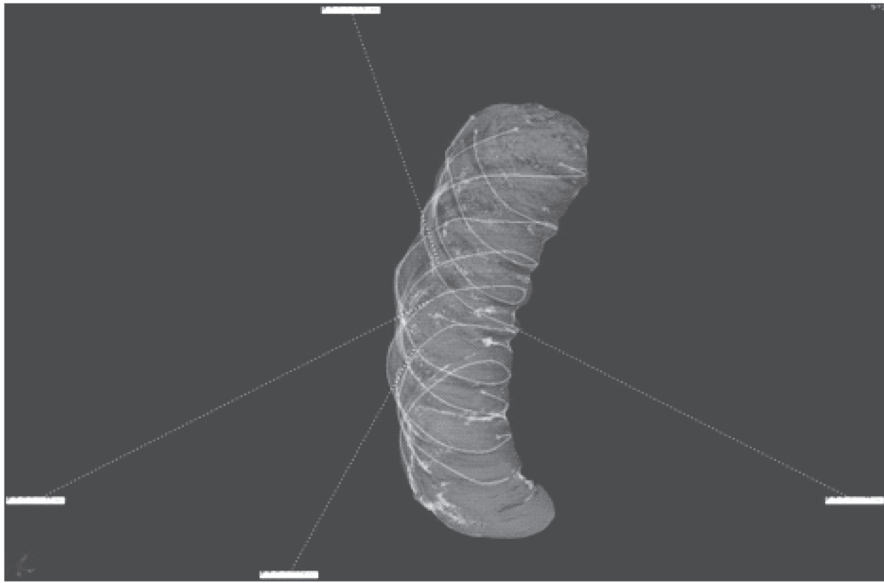


図 34 X線CTで得られた銀製指輪開口部における銀線構造の解析

げて振っているにも関わらず、各線の境界が明瞭でないのは、一部には腐食の影響もあるが、成形後ある程度の温度をかけた熱処理を行うことで、各線間で拡散接合が生じたためと考えてよいだろう。断面観察から得たこのような情報をもとに、改めて表面の溝の状況を観察すると、ランダムな溝が銀線4本が重なり合うことで形成されている状況が確認できた。CT画像で確認した4本の銀線の撚り合い具合のトレースを図34に示した。残念ながら遺物全体のX線CT像を撮像することは不可能であるため、推測を交えて解析せざるを得ないが、0.5mm程度の細い銀線4本を束にして撚りあげて振ることで成形したことが窺われる。また、単に振るだけではなく、4本の銀線を熱処理により拡散接合し、複合材の一体化をはかって仕上げていることが想定できる。

この指輪に使われている、約0.5mm程度の銀線の制作、Sタイプの撚り方、拡散接合による複合化など、個々の技術をみても、これまで6世紀あたりに制作された古代金工品に対して行ってきたさまざまな調査結果⁽²⁾とも整合性もよく、納得のいくところである。

4. まとめ

巨勢山773号墳から出土した銀製指輪の制作技術を、マイクロフォーカスX線CTの観察をもとに考察した。その結果、0.5mm程度の細い銀線4本を束にして撚りあげて振ることで成形したことが推定できた。また、単に銀線を振るだけではなく、熱処理で拡散接合による一体化をはかり、複合材として仕上げていることが窺えた。このようなかなり高度な技術を用いている一方、撚りのピッチを整えることに頓着しない古代人のおおらかさも十分見てとることができる。いずれにしろ、金属素材の特性に精通した古代工人の技術力の高さを垣間見ることができるといえる。

【謝辞】

マイクロフォーカスX線CTによる観察の機会を与えていただいた京都国立博物館と、分析の協力をいただいた㈱東芝に謝意を表す。

【参考文献】

1. 奥山誠義：「巨勢山773号墳出土の銀製指輪・胡録金具の蛍光X線分析結果」（本書第7章第2節）
2. 村上 隆：『金・銀・銅の日本史』（岩波新書）（2007）

第2節 巨勢山773号墳出土の銀製指輪・胡籙金具の蛍光X線分析結果

橿原考古学研究所

奥山 誠義

はじめに

本報告では、巨勢山773号墳において出土した銀製指輪（本書図26-112）・胡籙金具（本書図25-91）についての蛍光X線分析結果を示す。

1. 銀製指輪の分析

資 料：銀製指輪（ねじりのある、小径指輪）

分析条件：機器 日本電子社製 α -2000

管電圧—管電流：最大40KV-50 μ A, 測定時間：200sec

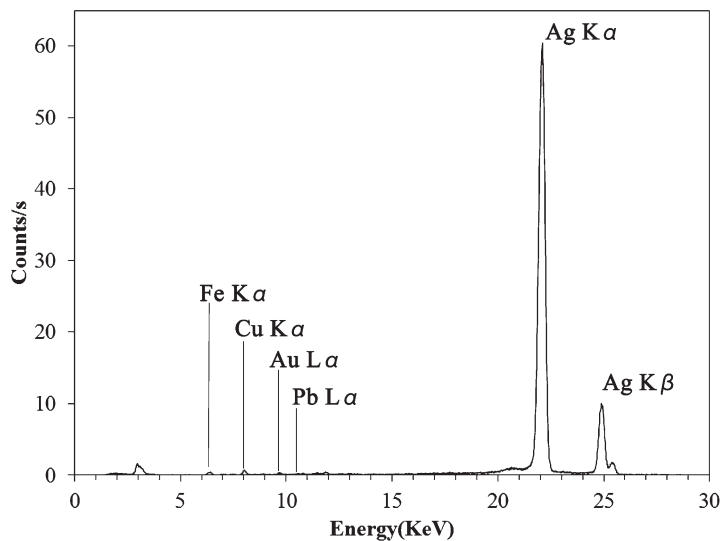


図35 銀製指輪の蛍光X線スペクトル

(1) 検出元素

顕著・・・・・・銀 (Ag)

微量・・・・・・銅 (Cu)、鉄 (Fe)、金 (Au)、鉛 (Pb)

（鉄は土壌成分に、金・銅・鉛は銀鉱石の不純物に由来するものと考えられる）

(2) 半定量値（測定装置に依存する含有量計算法による）

銀 (Ag) = 98%

その他微量元素=計2%程度

※上記数値は測定装置に大きく依存するため、他機・他手法による測定では値が大きく異なる場合がある。

(3) まとめ

ほぼ 100% に近い銀製品と考えられる。

但し、銀 100% では硬く粘りが弱いので“振る”加工はなかなか難しいため、不純物を若干含む限りなく 100% に近い銀高純度のものと考えられる。

2. 胡籙金具の分析

資 料：胡籙金具破片

分析条件：機器 日本電子社製 $\alpha-2000$

管電圧-管電流：最大 40KV-50 μ A, 測定時間：200sec

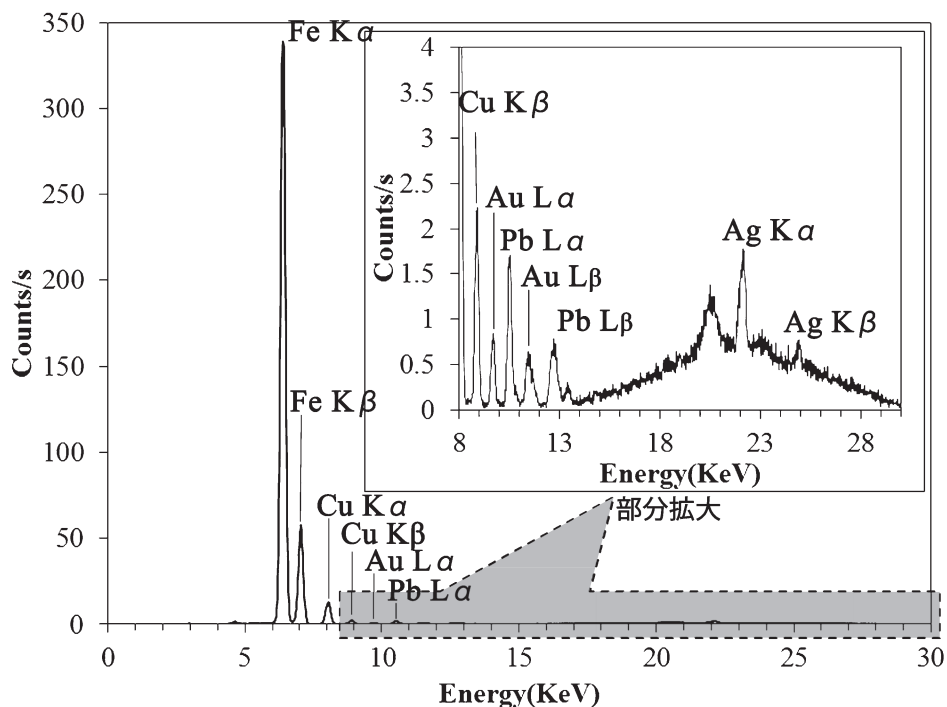


図 36 胡籙破片の蛍光 X 線スペクトル

(1) 検出元素

顕著・・・・・・鉄 (Fe)、銅 (Cu)

微量・・・・・・鉛 (Pb)、金 (Au)、銀 (Ag)

(2) 結果とまとめ

鉄が主要成分を構成している。

銅を顕著に検出し、微量ながら鉛、金、銀を検出していることから、金銅製品であった可能性が考えられる。

結果より、鉄地金銅貼りの製品であったものと考えられる。

第3節 巨勢山 773 号墳出土の動物遺存体の同定

パリーノ・サーヴェイ株式会社
金井慎司

はじめに

本報告では、巨勢山 773 号墳において出土した骨・貝類片についての同定結果を示す。

1. 試料

試料は、6 世紀代の横穴式石室から出土した骨 24 試料である。既にクリーニングされた状態にあり、1 試料中に複数点の破片がみられる。また、中には土塊のまま取り上げられた試料もある。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

2. 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合し、可能な限り復元を試みる。自然乾燥後、試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定し、人骨歯牙の計測は藤田（1949）に従う。なお、骨格各部の名称については、ヒトおよびウシを例として図 37・38 に示す。

3. 結果

確認された種類は、腹足綱 1 種類（オオタニシ）、両生綱 1 種類（カエル類）、哺乳綱 2 種類（ヒト、ウシ）である（表 1）。表 2 に同定結果の一覧を示す。以下、結果を横穴式石室内を 4 分割した各区（図 39）ごとに記す。

なお、人骨の年齢に関しては、胎児が出生前、新生児が 1 ヶ月未満、乳児が 1 歳未満、幼児が 1 ～ 5 歳、小児が 6 ～ 15 歳、成人が 16 歳以上、成年が 16 ～ 20 歳、壮年が 20 ～ 39 歳、熟年が 40 ～ 59 歳、老年が 60 歳以上を示す。

< 1 区 第 3 床面 >

1 は、哺乳綱の四肢骨である。

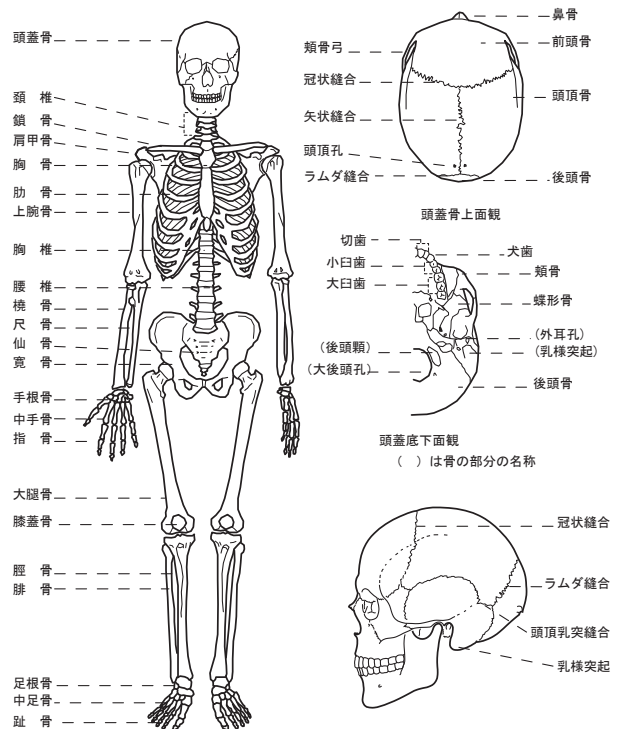


図 37 人体骨格各部の名称

2は、哺乳綱の四肢骨である。

3は、ヒトの右大腿骨と脛骨の可能性のある破片である。成人骨である。右大腿骨は、頑丈で男性的である。この他、ヒトの可能性のある四肢骨破片がみられる。

< 2区 第3床面 >

4は、ヒトの肋骨、左第4中手骨、右第4中足骨、左腓骨、右距骨である。第4中手骨および第4中足骨は骨端の癒合が完了し、また左腓骨および右距骨も含め、骨の大きさからみて成人に達していたと判断される。いずれも頑丈であり、男性的である。このほか、土塊状であるが腹足綱の破片がみられる。

5は、オオタニシの破片である。

< 3区 第2床面 >

6は、ヒトの右側頭骨、脳頭蓋骨、頭蓋骨の破片である。

7は、ヒトの右上顎第1大白歯の破片である。右上顎第1大白歯は、わずかに咬耗しているが、象牙質が露出するまでには至らない。これより小児後半程度の可能性がある。なお、歯牙の大きさは、権田(1959)にしたがうと、男性的である。

8は、ヒトの左大腿骨である。両端が欠損する。粗線の発達は弱い。大きさからみて成人には達していると判断される。

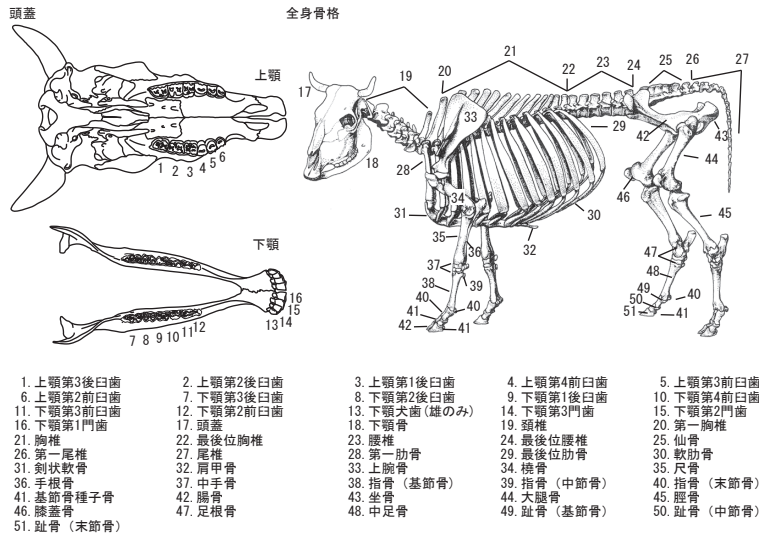
9は、ヒトの右大腿骨である。両端が欠損する。粗線の発達は弱い。大きさからみて成人には達していると判断される。

10は、哺乳綱の部位不明破片である。

11は、ヒトの頭頂骨、上顎骨、左大腿骨、右脛骨である。成人骨とみられる。左大腿骨は、頑丈であり男性的である。

< 3区 第3床面 >

12～23の試料がある。これらの試料の多くは、1試料中に複数点の骨が存在し、試料を超えて



(原図は、全身骨格・脳頭蓋が加藤・山内, 2003、下顎骨が久保・松井, 1999による)

図38 ウシ骨格各部の名称

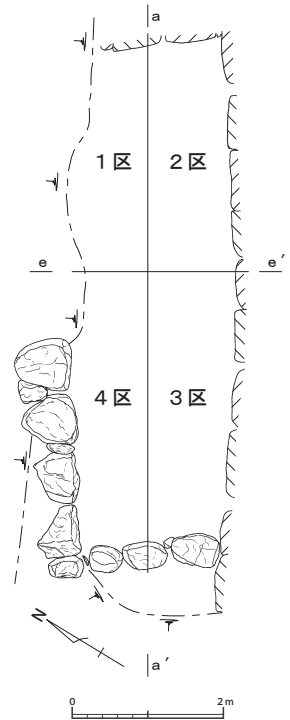


図39 横穴式石室の地区設定

表1 検出分類群の一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
原始紐舌目	Order Architaenioglossa
タニシ科	Family Vivipariidae
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i>
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
両生綱	Class Amphibia
カエル目(無尾目)	Order Anura
カエル類	Fam. et. gen. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
サル目(霊長目)	Order Primates
ヒト科	Family Hominidae
ヒト	<i>Homo sapiens</i>
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus</i>

接合する骨がみられた。

12 は、ウシの右上腕骨である。遠位端幅 76.54mm を測る。

13 は、ウシの左中手骨である。

14 は、ウシの右中手骨である。ほぼ完存する。全長 181mm、近位端幅 51.94mm、遠位端幅 51.83mm を測る。

15 は、ウシの右橈骨である。遠位端部がやや破損する。全長 260.5mm、近位端幅 72.82mm を測る。

16 は、ウシの左肩甲骨と右尺骨、ウシ脛骨・距骨の可能性のある破片である。

17 は、ウシの左右中足骨、およびウシ脛骨の可能性のある破片である。

18 は、ウシの可能性のある尺骨の破片、種類不明の四肢骨・部位不明破片である。

19 は、種類不明の破片である。

20 は、ウシの右下顎第 4 門歯である。

21 は、種類不明の破片で、部分的に赤色を呈する。骨でない可能性もあるが、肉眼観察、実体顕微鏡による観察では正体を明らかにできなかった。

22 は、ウマ / ウシの四肢骨片である。

23 は、哺乳綱の部位不明破片である。

<地区・層位不明>

24 は、カエル類の右上腕骨・左腸骨・左大腿骨、哺乳綱の部位不明破片である。

4. 考察

同定試料では、オオタニシ、カエル類、ヒト、ウシが確認された。ヒト以外の試料については、オオタニシ、ウシが第 3 床面に伴う傾向がある。このことから、第 3 床面で検出されたオオタニシ、

表2 同定結果

番号	地区	層位	種類	部位	左右	部分	数量	計測値	備考		
1	1区	第3床面	哺乳綱	四肢骨		破片	78+				
2	1区	第3床面	哺乳綱	四肢骨		破片	33+		図40-6		
3	1区	第3床面	ヒト	大腿骨	右	破片	1		図40-16		
						脛骨?	破片	1		図40-24	
						四肢骨	破片	6+			
4	2区	第3床面	ヒト	肋骨		破片	2		図40-14		
					第4中手骨	左	近位端破損	1		図40-15	
					第4中足骨	右	遠位端欠	1		図40-23	
					腓骨	左	破片	1		図40-21	
					距骨	右	破片	1		図40-22	
					不明		破片	21+			
					腹足綱	殻	破片	1		土塊状	
5	2区	第3床面	オオタニシ	殻		破片(殻口残)	12		図40-1		
							破片	14+			
6	3区	第2床面	ヒト	側頭骨	右	破片	1		図40-10		
						脳頭蓋骨	破片	25		図40-13	
						頭蓋骨	破片	24+			
7	3区	第2床面	ヒト	上顎第1大白歯	右	破損	1+	幅10.93 厚11.47	図40-11		
8	3区	第2床面	ヒト	大腿骨	左	両端欠	1+		図40-19		
9	3区	第2床面	ヒト	大腿骨	右	両端欠	1+		図40-18		
10	3区	第2床面	哺乳綱	不明		破片	1+				
11	3区	第2床面か	ヒト	頭頂骨		破片	3		図40-9		
						上顎骨	破片	1		図40-12	
						大腿骨	左	破片	1		図40-17
						脛骨	右	破片	1		図40-20
					ヒト?	四肢骨	破片	84+			
					腹足綱	殻	破片	1		図40-2	
12	3区	第3床面	ウシ	上腕骨	右	破損	1+	Bd76.54	図41-27		
13	3区	第3床面	ウシ	中手骨	左	破損	1		図41-32		
14	3区	第3床面	ウシ	中手骨	右	ほぼ完存	1	GL181 Bp51.94 Bd51.83	図41-31		
15	3区	第3床面	ウシ	橈骨	右	破損	1	GL260.5 Bp72.82	図41-28		
16	3区	第3床面	ウシ	肩甲骨	左	破片	1		図41-26		
						尺骨	右	近位端	1		図41-29
					ウシ?	脛骨?		遠位端?	1		図41-37
						距骨?		破片	1		図41-38
17	3区	第3床面	ウシ	中足骨	左	破片	1		図41-34		
						右	破片	1		図41-33	
					ウシ?	脛骨?		破片	2		図41-35・36
18	3区	第3床面	ウシ?	尺骨		破片	1		図41-30		
					哺乳綱	四肢骨	破片	41			
						不明	破片	9+			
19	3区	第3床面	哺乳綱	不明		破片	49.2g				
20	3区	第3床面	ウシ	下顎第4門歯	右	破損	1		図41-25		
21	3区	第3床面	不明	不明		破片	8		土塊状、赤色物質 図40-8		
22	3区	第3床面	ウマ/ウシ	四肢骨		破片	1+		図41-39		
23	3区	第3床面	哺乳綱	不明		破片	44+				
24	-	-	カエル類	上腕骨	右	近位端欠	1		図40-3		
						腸骨	左	破片	1		図40-4
						大腿骨	左	ほぼ完存	1		図40-5
					哺乳綱	不明	破片	52+		図40-7	

凡例) GL:全長 Bp:近位端幅 Bd:遠位端幅

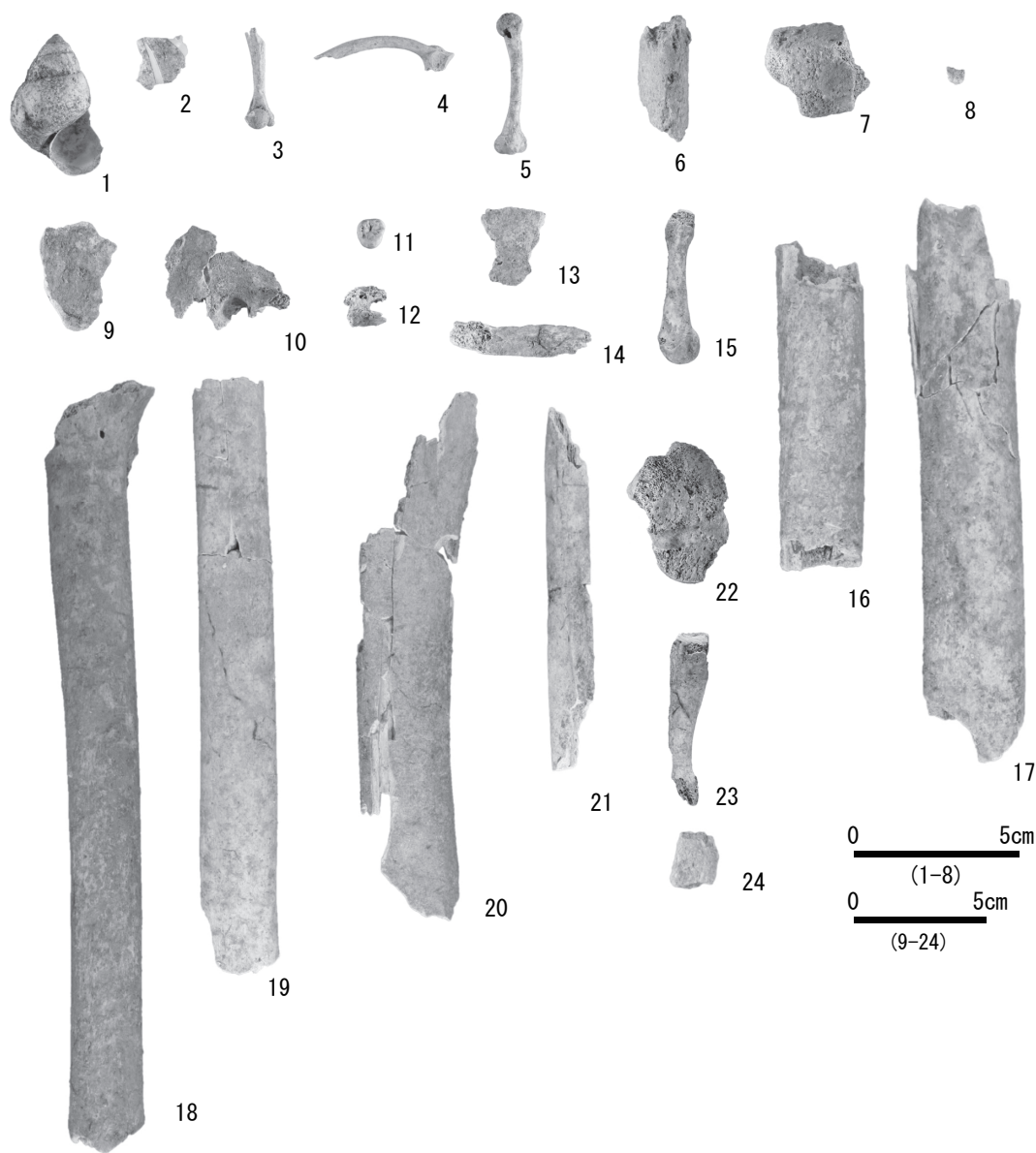
ウシについては、古墳としての機能が停止した後の人間活動により、石室内に持ち込まれたものと推定される。5のオオタニシは、本州～九州に分布し、主に池・沼・河川などの淡水域に棲息する貝類である。なお、4・11で出土した腹足綱の破片もオオタニシの可能性がある。3区第3床面で確認されるウシ（ウシの可能性のある破片も含む12～18、20、22）は、全身骨格が揃っていないが、主要四肢骨がみられ、また重なる部位もないことから、1体分が存在した可能性が示唆される。四肢骨の骨端が癒合していることから4歳以上に達した個体であったと考えられる。また、右上腕骨、右橈骨、右中手骨の計測値から、林田・山内（1957）、西中川ほか（1991）に基づくと体高110cm前後と推定され、在来牛の見島牛や口之島牛の雌に近い大きさである。カエル類は遺構面、出土位置不明である。同定試料は古墳石室内から得られていることをふまえると、カエル類についても、古墳に伴う埋葬、葬送と関係ない個体とみなされるが、遺構面、出土位置不明のため、その由来を考えることは難しい。

一方、ヒトは、左大腿骨が8と11の2点、右大腿骨が9の1点確認されている。大きさや粗線の発達状況からは、8の左大腿骨と9の右大腿骨が、それぞれ似通っていることが指摘される。この特徴と出土位置から、8と9は、同一個体の可能性が高い。同じ3区から検出された左大腿骨の8と11は、同一部位であり、大きさや粗線の発達状況から、別個体である。上記した8と9の大腿骨の特徴と出土状況から、石室内の第3床面の3区には、少なくとも1個体の埋葬があったと判断される。また、11の左大腿骨の存在からは、さらにもう1個体が存在した可能性がうかがえる。

なお、出土したヒトの骨は、大型で緻密質が厚い骨（頭蓋骨・大腿骨・脛骨など）が多いが、緻密質の薄い骨（肋骨・中手骨・中足骨・距骨など）も存在しており、頑丈な骨のみ残存したとはいえない。これら同定されたヒトの骨は、成人とみられ、男性を含んでいる可能性がある。石室内で検出されたヒトの骨については、遺物を含む詳細な検出状況の検討にもとづき、埋葬された個体数やその状態、さらに埋葬後の放置段階での変形や、再送や追葬など何らかの営力が加わることによって生じた擾乱の有無やその影響などをさらに検討していくことが課題である。

引用文献

- 藤田恒太郎, 1949, 歯の計測基準について. 人類学雑誌, 61, 27-32.
- 権田和良, 1959, 歯の大きさの性差について. 人類学雑誌, 67, 151-163.
- 林田重幸・山中忠平, 1957, 馬における骨長より体高の推定法. 鹿児島大学農学部学術報告 6, 146-156.
- 加藤嘉太郎・山内昭二, 2003, 新編 家畜比較解剖図説 上巻, 養賢堂, 315p.
- 久保和士・松井 章, 1999, 家畜 その2-ウマ・ウシ. 西本豊弘・松井 章編, 考古学と自然科学②, 考古学と動物学, 同成社, 169-156.
- 西中川 駿・本田道輝・松元光春, 1991, 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究. 平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果



- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. オオタニシ殻(2区 第3床面) | 13. ヒト脳頭蓋骨(3区 第2床面) |
| 2. 腹足網殻(3区 第2床面か) | 14. ヒト肋骨(2区 第3床面) |
| 3. カエル類右上腕骨(地区・層位不明) | 15. ヒト左第4中手骨(2区 第3床面) |
| 4. カエル類左腸骨(地区・層位不明) | 16. ヒト右大腿骨(1区 第3床面) |
| 5. カエル類左大腿骨(地区・層位不明) | 17. ヒト左大腿骨(3区 第2床面か) |
| 6. 哺乳綱四肢骨(1区 第3床面) | 18. ヒト右大腿骨(3区 第2床面) |
| 7. 哺乳綱部位不明破片(地区・層位不明) | 19. ヒト左大腿骨(3区 第2床面) |
| 8. 不明破片(3区 第3床面) | 20. ヒト右脛骨(3区 第2床面か) |
| 9. ヒト頭頂骨(3区 第2床面か) | 21. ヒト左腓骨(2区 第3床面) |
| 10. ヒト右側頭骨(3区 第2床面) | 22. ヒト右距骨(2区 第3床面) |
| 11. ヒト右上顎第一大臼歯(3区 第2床面) | 23. ヒト右第4中足骨(2区 第3床面) |
| 12. ヒト上顎骨(3区 第2床面か) | 24. ヒト脛骨?(1区 第3床面) |

図40 出土骨貝類(1)



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 25. ウシ右下顎第4門歯(3区 第3床面) | 33. ウシ右中足骨(3区 第3床面) |
| 26. ウシ左肩甲骨(3区 第3床面) | 34. ウシ左中足骨(3区 第3床面) |
| 27. ウシ右上腕骨(3区 第3床面) | 35. ウシ?脛骨?(3区 第3床面) |
| 28. ウシ右尺骨(3区 第3床面) | 36. ウシ?脛骨?(3区 第3床面) |
| 29. ウシ右尺骨(3区 第3床面) | 37. ウシ?脛骨?(3区 第3床面) |
| 30. ウシ?尺骨(3区 第3床面) | 38. ウシ?距骨?(3区 第3床面) |
| 31. ウシ右中手骨(3区 第3床面) | 39. ウマ/ウシ四肢骨(3区 第3床面) |
| 32. ウシ左中手骨(3区 第3床面) | |

図 41 出土骨貝類 (2)

第8章 まとめ

立地と墳丘 巨勢山 773 号墳は巨勢山古墳群の北部に位置し、南から北へ緩やかにのびる尾根先端の低いところに築かれている。墳丘の北から西にかけては現代までに水田として利用されていたため著しく地形の改変を受けているが、復原径約 16 m の円墳と考えられる。

横穴式石室 埋葬施設は無袖の横穴式石室である。石室の主軸は N - 58.5° - E に向け、開口方向はおおよそ南西を向いている。玄門部に框石を有しており玄室床面が羨道床面よりも約 30 cm 低くなっている。石室の下部は地山を約 95 cm 掘り込んだ墓壇内に築かれている。石室の規模は、現状では長さ 7.5 m 以上あり、玄室長約 6.5 m、玄室幅は中央付近で約 2.1 m、玄門部付近で約 1.8 m である。石室には花崗岩の自然石が使用されている。前述のように攪乱の影響を受けているため、天井石と奥壁、右側壁の多くの石室石材が失われているが、比較的良好に残存している左側壁では 6 段分の石積みを確認できる。

この横穴式石室の形態は、玄門部に框石を有しており、玄室床面が羨道床面よりも低い位置にあることから竪穴系横口式石室の形態が想定される。ただし、いわゆる竪穴系横口式石室は石室幅 1.4 m 以下、同様に高さ 1.4 m に満たない石室規模のものと定義されている（蒲原 1983）。当該古墳は石室の幅が最も狭い部分でも 1.8 m であり、高さは残存高でも 2 m あるため、この定義には当てはまらない。そのため、竪穴系横口式石室の系統を引く無袖の横穴式石室であるといえるだろう。

石室の床面 第 1 床面、第 2 床面、第 3 床面の合計 3 面が確認できた。

第 1 床面は古墳築造時の床面である。玄室は地山面上に約 5 ~ 25 cm の土を敷き詰めて貼床をしている。玄門部ではその上に框石を据え、その框石の上面に合わせて羨道部も貼床を施している。この床面には多量の須恵器のほか、金属器など豊富な副葬品が出土している。そして、出土須恵器の型式差から初葬と 3 回の追葬が行われ、合計 4 棺の埋葬があったと想定した。1 棺目（初葬）が TK10 型式期、2 棺目が TK43 型式期、3 棺目が TK43 型式 ~ TK209 型式期、4 棺目が TK209 型式期である。

さらに棺台や副葬品の出土位置などから図 14 の右図に示したように、a 棺から d 棺の 4 棺の棺体配置を想定した。初葬（a 棺）は TK10 型式期に玄室の奥壁寄り右側壁付近に置かれたと考えられる。a 棺には、多量の須恵器のほか、鉄刀など多くの鉄器や、銀製指輪・琥珀玉などの装身具が伴っていたとみられる。また、大型の石材を棺台として用いていた可能性が高い。2 棺目（b 棺）は TK43 型式期に玄室の玄門寄り右側壁付近に安置された。この時の副葬品には須恵器があるが、初葬に伴う遺物とともに奥壁付近へ片付けられたと考えられる。3 棺目（c 棺）は TK43 型式期 ~ TK209 型式期に玄室の奥壁寄り左側壁付近に置かれたと考えられる。この棺には小型の棺台が用いられた。そして 4 棺目（d 棺）は TK209 型式期に、3 棺目を片付けてその棺台を利用し、3 棺目にはほぼ重なる位置に置かれたと考えられる。この時の副葬品は石 12 の奥壁側と玄門側に置かれた土

器がある。

第2床面の時期は出土須恵器が破片であるため不明確であるが、8世紀頃と考えられる。左側壁付近では、ヒトの頭骨、歯1点、刀子1点が出土した。また、頭骨が出土した地点から鉄釘などが出土した玄室中央付近までの範囲においては炭化物を確認した。これらのことから、当該床面では玄門寄りの左側壁付近に、石室の主軸に沿って木棺が安置されていたと考えられる。人骨の出土状態から、頭部を玄門側にして埋葬していたようである。

第3床面の時期は出土した瓦器碗から12世紀末から13世紀の初め頃と考えられる。当該床面で埋葬が行われていたかについては、ヒトの大腿骨などが出土しているものの遺構などは認められず不明瞭である。少なくとも、瓦器碗や土製煮炊具、五輪塔の一部、多量のオオタニシの殻などが出土していることから祭祀が行われていた可能性が考えられる。

出土遺物 各床面から出土した遺物の一覧は以下の通りである。

<第1床面>

奥壁付近：須恵器は杯蓋8点、杯身8点、高杯蓋1点、有蓋高杯2点、無蓋高杯3点、甕1点、広口壺3点、有蓋長頸壺の口縁部1点、台付壺の体部から脚部1点、短頸壺蓋2点、短頸壺3点、提瓶2点、器台の脚底部1点。土師器は杯2点、高杯1点。鉄鏃5点、胡籙金具3点、曲刃鎌2点、刀子1点、鉄鑿1点、鉄釘3点。

第1床面（奥壁付近）と考えられるもの：須恵器杯蓋2点、杯身2点、甕1点。

玄室玄門寄り右側壁付近：須恵器杯蓋1点。

玄室中央部右側壁付近：鉄鏃片33点以上、鉄刀2点、鞍1点、鉸具5点、方形金具3点、留金具2点、鋸状金具3点、銀製指輪1点、琥珀製玉2点。

右側壁基底石の抜き取り穴内：鉄鏃10点以上、ミニチュアのU字形鋏鋤先1点。

玄室中央部左側壁付近：須恵器の杯蓋1点、杯身1点、提瓶1点、高杯1点、台付長頸壺1点、甕1点、土師器杯1点、鉄釘1点。

<第2床面>

須恵器は蓋1点、杯1点、壺か甕の口縁1点、甕片1点、刀子1点、鉄釘は11点。動物遺存体は、ヒト、部位不明獣類。

<第3床面>

瓦器碗3点、土師皿片3点、土師器の甕か土釜の口縁部1点、空風輪1点。動物遺存体は、多量のオオタニシの殻、ヒト、ウシ、ウマ、獣類など。

横穴式石室の位置付け 本墳は堅穴系横口式石室の系統を引く無袖の横穴式石室であると考えられる。畿内地域での分布は寺口忍海古墳群や寺口千塚古墳群など奈良盆地東南部にその中心がみられる。その変遷過程は斉一的ではなく（太田2010）、階層的にも下位に位置する人々であったことが指摘されている（坂1991）。堅穴系横口式石室は、畿内地域においては北部九州に分布するものが

伝播したとする説（森下 1988）や、朝鮮半島南部との関わりの可能性（坂 1991）が提示されている。当古墳は、巨勢山古墳群という群集墳中に築造され、墳丘規模は復原であるが約 16 m の円墳に築かれている。副葬品は多量の土器のほか、鉄刀、馬具、鉄鏃、農具など豊富である。なかでも注目できるものとして銀製指輪や金銅装胡籙金具などが出土しており、石室の形態とあわせてみて、渡来系の人物が葬られたと考えられる。

〈参考文献〉

- 太田宏明 2010 「西日本の無袖石室（1）」『東日本の無袖横穴式石室』
蒲原宏行 1983 「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』
御所市教育委員会 2011 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅳ』（『御所市文化財調査報告書』第 40 集）
田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』（「研究論集」第 10 号平安学園考古学クラブ）
千賀 久 1994 「後期古墳の木棺—重い棺から軽い棺へ—」『考古学と信仰』
土井光一郎 1992 「中世墓に対する一考察」『花園史学』第 13 号
坂 靖 1991 「奈良県内の竪穴系横口式石室」『寺口千塚古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 62 冊）
間壁葎子 1982 「八・九世紀の古墳再利用について」『水野恭一郎先生頌寿記念—日本宗教社会史論叢』
松本洋明編 1988 『十六面・薬王子遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 54 冊）
森岡秀人 1983 「追葬と棺体配置」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念—考古学論叢』
森下浩行 1988 「横穴式石室・伝播の—様相—北部九州型 B 類—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要—1987』

別表 巨勢山 773 号墳 出土土器観察表

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
17-1 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 に伴うと 考えられ る	口径 14.6cm (口縁部約2/3を欠く) 器高 4.6cm 口縁部はわずかに内彎しつつ、下方に下る。口縁端部は丸い。端部内面に凹線状となった不明瞭な段をもつが、全周しない。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り)、天井部にヘラ記号 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり ・-	良好	直径2mm~0.5mmの長石、石英をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	(19-14)とセットか。
17-2 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 に伴うと 考えられ る	口径 15.0cm (残存1/2からの回転復元) 器高 4.5cm 口縁部はわずかに開きつつ下方に下る。口縁端部は丸い。端部内面の段は不明瞭であり、弱い凹線状となっている。口縁部と天井部の境の稜は弱く、弱い凹線がめぐる。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり ・-	良好	直径2mm~0.5mmの石英、長石をわずかに含む。	・暗青灰色 ・暗紫灰色 ・暗紫灰色	
17-3 須恵器 杯身 石室内 第1床面 に伴うと 考えられ る	口径 12.5cm (完形) 器高 4.8cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸く、端部内面に凹線状となった不明瞭な段をもつが、全周しない。受け部は厚みがあり、やや水平に広がっている。底部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり	良好	直径2mm~0.5mmの石英、長石をわずかに含む。直径0.5mm以下の金雲母をわずかに含む。	・暗青灰色 ・暗紫灰色 ・-	(18-6)とセットか。
17-4 須恵器 杯身 石室内 第1床面 に伴うと 考えられ る	口径 12.7cm (残存3/4) 器高 4.2cm たちあがりは短くやや外反気味に内傾している。口縁端部は丸い。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。底部は扁平である。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり	良好	直径3mmの長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部外面の一部に鉄錆が付着している。(18-7)とセットか。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
17-5 須恵器 甕 石室内 第1床面 に伴うと 考えられ る	口径 13.1cm (ほぼ完形) 器高 13.8cm 口頸部は外反して外上方へのび、上部で外方へ屈曲させ、再びやや内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部は水平な面をなす。肩はやや丸みをもって下り、体部最大径は中位よりやや上方に有する。肩部と体部の境に円孔スカシ(直径1.5cm)を穿つ。体部は全体的に丸味を帯びている。底部は丸くおさめている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ	良好	直径2mmの長石をわずかに含む。直径1mm~0.5mmの石英、長石、金雲母をわずかに含む。	・灰白色 および 暗灰色 ・灰色 および 暗灰色 ・淡灰色	外面に自然釉が認められる。
18-6 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.7cm (完形) 器高 4.5cm 口縁部はわずかに開きつつ下方に下る。口縁端部は丸く、端部内面には部分的に段が不明瞭となって弱い凹線状となった箇所がみられる。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり ・-	良好	直径2mm~0.5mmの石英、長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・-	天井部外面の一部に別個体とみられる1cm×0.2mm大の粘土粒が付着している。(17-3)とセットか。
18-7 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.9cm (ほぼ完形) 器高 4.3cm 口縁部はわずかに内彎しつつ、下方に下る。口縁端部は丸く、端部内面に弱い段をもつ。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部は比較的平らである。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり ・-	良好	直径1mm~0.5mmの長石、石英、金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	(17-4)とセットか。
18-8 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.6cm (完形) 器高 4.6cm 口縁部はわずかに内彎しつつ、下方に下る。口縁端部は丸く、端部内面に不明瞭な段をもつ。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部は比較的平らである。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり ・-	良好	直径2mm~0.5mmの長石、石英をわずかに含む。1mm~0.5mmの金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	天井部外面の一部に別個体とみられる8mm×1.5mm大の粘土粒が付着している。(19-15)とセットか。
18-9 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.9cm (完形) 器高 4.7cm 口縁部はわずかに内彎しつつ、下方に下る。口縁端部は丸い。端部内面に不明瞭な段をもつが、全周しない。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり ・-	良好	直径2mm~0.5mmの石英をわずかに含む。1mm以下の長石、金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	(19-16)とセットか。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
18-10 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	頸部径 15.6cm (完形) 器高 5.0cm 口縁部はわずかに内彎しつ下り、端部付近でやや外反する。口縁端部は丸い。端部内面に不明瞭な段をもつが、全周しない。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の約2/3は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり ・-	良好	直径3mmの角閃石をわずかに含む。1mm以下の石英、長石、金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	(19-17)とセットか。
18-11 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.9cm (ほぼ完形) 器高 4.7cm 口縁部はわずかに内彎しつ、下方に下る。口縁端部は丸く、内傾したのち不明瞭な段をもつが、全周しない。口縁部と天井部の境の稜は弱く、凹線がめぐる。天井部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり ・-	良好	直径1mm~0.5mmの石英、長石をわずかに含む。1mm以下の金雲母をわずかに含む。	・青灰色 および 濃灰色 ・淡青灰色 および 青灰色 ・淡青灰色	(19-18)とセットか。
18-12 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 15.2cm (完形) 器高 4.7cm 口縁部はわずかに開きつ下方に下る。口縁端部は丸い。端部内面には部分的に段が不明瞭となって弱い凹線状となった箇所がみられる。口縁部と天井部の境の稜は弱く、弱い凹線がめぐる。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり ・-	良好	直径2mmの角閃石をわずかに含む。2mm以下の石英、長石、金雲母をわずかに含む。	・淡青灰色 ・灰色 ・淡青灰色	(19-19)とセットか。
18-13 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.9cm (完形) 器高 4.5cm 口縁部はわずかに内彎しつ、下方に下る。口縁端部は丸く、端部内面には部分的に段が不明瞭となって弱い凹線状となった箇所がみられる。口縁部と天井部の境の稜は弱く、弱い凹線がめぐる。天井部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の1/2は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり ・-	良好	直径1mm~0.5mmの石英をわずかに含む。1mm以下の長石、金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 および 淡青灰色 ・青灰色	
19-14 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.6cm (完形) 器高 4.6cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸い。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり	良好	直径3mm大の石英をわずかに含む。2mm以下の石英をわずかに含む。1mm以下の長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・-	(17-1)とセットか。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
19－15 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.7cm（完形） 器高 4.7cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸く、端部内面に凹線状となった不明瞭な段をもつが、全周しない。受け部は比較的厚みがあり、やや水平に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ （ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり	良好	直径3mmの長石をわずかに含む。1mm以下の長石と石英をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・－	(18－8)とセットか。
19－16 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 13.0cm（完形） 器高 4.5cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸い。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ （ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり	良好	直径3mmの石英と灰色粒をわずかに含む。直径2mm以下の石英をわずかに含む。直径1mm以下の長石と金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・－	(18－9)とセットか。
19－17 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 13.1cm（完形） 器高 4.6cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸く、端部内面に凹線状となった不明瞭な段をもつが、全周しない。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ （ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり	良好	直径2mmの長石をわずかに含む。直径1mmの石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・－	体部外面には直線を×字状に交差させたヘラ記号が認められる。体部外面の一部に1cm×8mmの別個体の粘土粒がみられる。(18－10)とセットか。
19－18 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.7cm（完形） 器高 4.4cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸く、端部内面に不明瞭な面をもつ。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ （ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり	良好	直径2mm以下の長石、石英をわずかに含む。	・暗灰色 ・淡青灰色 ・および ・青灰色 ・－	焼むらあり。(18－11)とセットか。
19－19 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 13.4cm（完形） 器高 4.35cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸い。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ （ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり	良好	直径3mmの長石をわずかに含む。直径1mm以下の長石、石英をわずかに含む。	・青灰色 ・明灰色 ・－	(18－12)とセットか。

図一番号 器種 出土場所	形態と、調整・体部/天井部 ・口頸部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
19-20 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.8cm (ほぼ完形) 器高 4.5cm たちあがりは短く内傾している。口縁端部は丸い。受け部は比較的厚みがあり、外方に広がっている。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に当て具痕と静止ナデあり	良好	直径2mm~1mmの石英をわずかに含む。直径1mm~0.5mmの長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
19-21 須恵器 杯身 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 11.3cm (ほぼ完形) 器高 4.0cm たちあがりは低く内傾している。口縁端部は細く丸い。受け部は外方に広がっている。底部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり	良好	直径2mm~1mmの石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・一	底部外面には、平行する2本の直線に対して直行する1本の直線を描いたヘラ記号が認められる。
19-22 須恵器 甕 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 13.2cm (ほぼ完形) 器高 14.4cm 頸部径は小さく、頸部は長大化している。頸部は外反して外上方にのび、上部で外方へ屈曲させ、再び外上方へのびる。屈曲部外面に凹線をめぐらせている。頸部の中位とやや下方に凹線をめぐらせており、間に櫛描列点文をめぐらせる。中位の凹線から上方の屈曲部までと、口縁部には波状文をめぐらせている。口縁端部は丸く、端部内面に明瞭な段をもつ。肩はやや張り、体部最大径は中位より上方に有する。体部は全体的に丸味を帯びている。底部は丸くおさめている。肩部と体部、体部と底部のそれぞれに凹線がまわり、その間に櫛描列点文をめぐらせ、その後には円孔スカシ(直径1.3cm)を穿っている。 ・外面 回転ナデ、口頸部に波状文、頸部上方に波状文、中位に櫛描列点文 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、櫛描列点文 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ後ナデか 内面 粘土紐の痕跡あり	良好	直径4mm~3mmの石英をわずかに含む。直径2mm以下の石英を若干含む。直径1mm以下の長石をわずかに含む。直径0.5mm以下の金雲母をわずかに含む。	・暗灰色 および 灰白色 ・暗灰色 および 灰白色 ・暗紫灰色	外面と内面に自然釉が認められる。
20-23 須恵器 蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 10.8cm (完形) 器高 4.8cm つまみを有する蓋である。口縁部は内彎しつつ下方に下る。口縁端部は丸く、端部内面に段をもつ。口縁部と天井部の境に稜をもつ。天井部はやや丸みをもっている。天井部には櫛描列点文がめぐる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3は回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り)、天井部に櫛描列点文あり 内面 回転ナデ ・一	良好	直径1mm以下の石英を若干含む。	・暗青灰色 ・灰色 ・一	外面の大部分に自然釉(天井部は淡灰色、口縁部は暗灰色)が認められる。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
20-24 須恵器 高杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 14.8cm (ほぼ完形) 器高 17.4cm 長脚2段の有蓋高杯である。杯部のたちあがりは短く内傾し、中位より上へやや垂直にのびる。口縁端部は丸い。受け部は外上方に広がる。脚部は脚端部にかけて裾広がりとなる。三角形のスカシが上下段とも3方向に穿たれ、上段と下段とで千鳥に配置されている。下段には波状文がめぐる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、杯底部は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は左廻り) 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、下段に波状文 内面 回転ナデ	良好	直径5mmの石英をわずかに含む。直径2mm以下の石英、黒雲母をわずかに含む。直径1mm以下の長石、金雲母をわずかに含む。	・淡黄灰色 ・淡黄灰色 ・淡黄灰色	
20-25 須恵器 高杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 16.0cm (完形) 器高 18.7cm 長脚2段の有蓋高杯である。杯部のたちあがりは短く、上方へやや垂直にのびる。口縁端部は丸い。受け部は外上方に広がる。脚部は脚端部にかけて裾広がりとなる。三角形のスカシが上下段とも3方向に穿たれ、上段と下段とで千鳥に配置されている。下段には波状文がめぐる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、杯底部は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は左廻り) 内面 回転ナデ、底部に静止ナデ ・外面 回転ナデ、下段に波状文 内面 回転ナデ	良好	6mm×2mm大の白色粒をわずかに含む。直径1mm以下の石英、チャートをわずかに含む。直径0.5mm以下の長石、金雲母をわずかに含む。	・淡黄灰色 ・灰色 ・-	
20-26 須恵器 高杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.4cm (完形) 器高 15.85cm 長脚2段の無蓋高杯である。口縁部は短く外上方へのびる。口縁端部は丸い。口縁部と体部の境に稜をもち、体部と底部の境には2条の凹線をめぐらす。稜と凹線の間には櫛描列点文が認められる。脚部は中位から下方へ裾広がりとなる。2条の凹線によって上段と下段に分かれ、長方形のスカシが上下段とも2方向に穿たれる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、杯体部に櫛描列点文がめぐる。杯底部は回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、底部に静止ナデ ・外面 回転ナデ、下段に波状文 内面 回転ナデ	良好	直径2mm~0.5mmの石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の長石、黒雲母を含む。	・淡灰色 ・灰色 ・-	杯底部外面に粘土紐の接合痕あり
20-27 須恵器 高杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 10.9cm (完形) 器高 15.9cm 長脚2段の無蓋高杯である。口縁部は短く、外上方へやや外反する。口縁端部は丸い。口縁部と体部の境ににぶい稜をもち、体部と底部の境には1条の凹線をめぐらす。稜と凹線の間には波状文とみられる痕跡が認められる。脚部は筒状に下方へ下る。中位よりやや下方に2条の凹線がめぐり、上段と下段に区別できる。長方形のスカシが上下段とも3方向に穿たれる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、杯体部に波状文のような痕跡が認められる。 内面 回転ナデ、底部に静止ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	良好	直径1mm以下の長石を含む。直径1mm以下の石英、金雲母をわずかに含む。	・淡灰色 ・淡灰色 ・-	ほぼ全体に自然釉がかかる。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
20-28 須恵器 高杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 10.5cm (ほぼ完形) 器高 14.1cm 長脚2段の無蓋高杯である。口縁部は短く外上方へのびる。口縁端部は細く丸い。口縁部と体部の境に稜をもち、体部と底部の境には1条の凹線をめぐらす。稜と凹線の間には櫛描列点文が認められる。脚部は筒状に下方へ下る。2条の弱い凹線によって上段と下段に分かれる。スカシは杯底部から脚裾付近まで穿たれるが、中位では細く、ほぼ線状になっている。3方向に穿たれる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、杯体部に櫛描列点文がめぐる。杯底部は回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	良好	直径2mm大の金雲母をわずかに含む。直径2mm以下の長石、石英を含む。	・濃暗灰色 ・濃暗灰色 ・一	ほぼ全体に自然釉がかかる。
21-29 須恵器 広口壺 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 18.8cm (口縁部約1/6を欠く) 器高 24.7cm 頸部はやや外傾してたちあがり、上半は外反して口縁部に繋がる。口縁端部は細く丸い。頸部外面の中位に1条の弱い凹線を廻らせ、その上下に波状文を施す。下段の頸部付近は櫛描波状文の前にカキメを施す。体部はその最大径を中位にもち、肩部は緩やかに下る。底部は丸い。 ・外面 口縁部外面は回転ナデ。頸部外面は上半は櫛描波状文(8条/cm)、下段はカキメ(8条/cm)のち波状文。 内面 回転ナデ ・外面 肩部回転ナデ、体部上半は平行タタキのちカキメ、体部下半は平行タタキのちナデ 内面 同心円文タタキ ・外面 平行タタキ 内面 同心円文タタキ	良好	4mm×1mm大の石英をわずかに含む。直径3mm大の石英をわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、金雲母をわずかに含む。	・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	
21-30 須恵器 広口壺 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 18.4cm (ほぼ完形) 器高 27.8cm 頸部はやや外傾してたちあがり、口縁部に繋がる。口縁端部は丸い。頸部外面には2条1単位とする凹線が2箇所施されている。この凹線による3段の区画のうち上2段には波状文を施している。体部はその最大径を中位にもち、肩部は緩やかに下る。底部は丸い。 ・外面 口縁部外面は回転ナデ。頸部外面は、3段区画の上2段に波状文(7条/0.8cm)。下1段は回転ナデ。 内面 ナデ ・外面 肩部上半は回転ナデ、肩部下半は平行タタキのちカキメ(9条/cm)。体部は平行タタキのちナデ。 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・外面 平行タタキ 内面 ナデおよび指頭による押圧	良好	直径3mm大の石英を若干含む。直径1mm以下の石英、長石を含む。	・青灰色 ・淡青灰色 ・灰白色	
21-31 須恵器 広口壺 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.8cm (ほぼ完形) 器高 18.3cm 頸部は外傾してたちあがり、口縁部に繋がる。口縁端部は丸い。頸部外面の下半から体部上位にかけてカキメを施す。体部はその最大径を上位にもち、肩部はやや緩やかに下る。底部は丸い。 ・外面 上半は回転ナデ、下半はカキメ(7条/cm)。 内面 回転ナデ ・外面 肩部にカキメ、体部上位はカキメおよび回転ナデ、体部中位から下位は回転ヘラケズリ。 内面 ナデ ・外面 回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 ナデ	良好	直径7mm大の長石、直径5mm大のチャート、直径3mm大の石英をわずかに含む。直径2mm以下の黒雲母、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の長石、石英、金雲母を若干含む。	・灰白色 ・灰白色 ・灰白色	

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
21-32 須恵器 壺（有蓋） 口縁部・ 頸部 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 9.6cm（完形） 残存高 9.0cm 有蓋の壺で、口縁部のたちあがりは低く内傾する。口縁部は細く丸い。頸部下位は垂直にたちあがり、中位でやや外反したのち、上位で再び垂直となり、受け部付近で外反する。頸部上位に櫛描列点文を密に施す。 ・外面 口縁部は回転ナデ。頸部は回転ナデのち、上位に櫛描列点文を密に施す。 内面 回転ナデ ・一 ・一	良好	直径2mmの石英を含む。直径2mm以下の黒雲母をわずかに含む。直径1mm以下の長石、金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・淡灰色	杯部内面1/2に密に灰黒色釉あり。(21-33)と同一個体か。
21-33 須恵器 台付壺 頸部の一 部、体部・ 脚部 石室内 第1床面 奥壁付近	頸部径 7.2cm（残存1/4からの回転復元） 残存高 22.0cm 体部はその最大径を上位にもち、肩部は緩やかに下る。体部にカキメを施す。脚柱状部は下外方に緩やかに広がり、脚柱状部下半に櫛描波状文が廻る。2条の凹線を境に脚裾部は垂直に下り、脚端部付近でやや外反する。脚端部はやや尖り気味で、下端は面をなしている。 ・一 ・外面 肩部は回転ナデ、体部はカキメ（9条/0.8cm）およびナデ 内面 肩部と体部は回転ナデ。底部は回転ナデおよび指頭による押圧。 ・外面 回転ナデ、脚柱状部下半に櫛描波状文（7条/cm）を施したのち、4方向に方形スカシを外面から穿つ。 内面 回転ナデ	良好	直径4mm大の石英をわずかに含む。直径2mm以下の石英、青灰色と直径1mm以下の長石を多く含む。	・淡青灰色 ・青灰色 ・青灰色	脚裾部に鉄錆が付着。(21-32)と同一個体か。
22-34 須恵器 蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 10.0cm（ほぼ完形） 器高 3.3cm 口縁部は内彎しつつ、下方に下る。口縁部内面に弱い段をもつ。口縁部と天井部の境は不明瞭である。天井部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の1/2を回転ヘラケズリ（ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ ・一	良好	直径2mm～0.5mmの石英、長石を若干含む。	・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	外面の大部分に自然釉（黄灰色）が認められる。
22-35 須恵器 蓋 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 10.3cm（ほぼ完形） 器高 3.15cm 口縁部はわずかに内彎しつつ下り、端部付近でやや外反する。口縁部内面に段をもつ。口縁部と天井部の境は屈曲によってわかる程度である。天井部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の2/3を回転ヘラケズリ（ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 回転ナデ ・一	良好	直径2mm～0.5mmの石英をわずかに含む。直径0.5mmの長石をわずかに含む。	・暗青灰色 ・暗紫灰色 ・青灰色	天井部外面の一部に灰が融解して塊状になったものが付着している。(22-36)とセットか。
22-36 須恵器 短頸壺 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 7.45cm（完形） 器高 7.3cm 口縁部はやや内傾して短くたちあがる。口縁部は細く丸い。体部はその最大径を上位にもち、肩部は緩やかに屈曲している。底部はやや平らである。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 肩部上半は回転ナデ、下半から体部上半にかけてカキメ（9条/cm）を施す。 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ（ロクロの回転の方向は右廻り） 内面 カキメのち、底部下半にハケメ	良好	直径2mm～1mmの石英をわずかに含む。直径1mm以下の長石をわずかに含む。	・淡青灰色 ・青灰色 ・一	肩部に焼成時の蓋の痕跡が認められる。(22-35)とセットか。

図一番号 器種 出土場所	形態と、調整 ・口頸部 ・体部 / 天井部 ・底部 (脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
22-37 須恵器 短頸壺 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 6.1cm (ほぼ完形) 器高 6.1cm 口縁部は垂直気味に短くたちあがり、口縁部付近でやや外反する。口縁端部はやや面をなす。体部はその最大径を上位にもち、肩部は張る。底部はやや平らである。 ・外面 口縁端部はナデ、口縁部は回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 肩部と体部上半は回転ナデ。体部上位の一部にタタキ 内面 回転ナデ ・外面 ケズリ 内面 回転ナデ	軟	直径2mm大の長石、チャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	
22-38 須恵器 短頸壺 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 7.7cm (完形) 器高 5.85cm 口縁部は外反して短くたちあがり、内傾する面をもつ。体部はその最大径を中位にもち、肩部は緩やかに下る。底部は平らである。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 体部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ	軟	直径3mm大のチャートをわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	・暗灰色 および ・淡灰色 ・淡灰色 ・-	
22-39 須恵器 提瓶 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 5.0cm (完形) 器高 14.6cm 小型品である。頸部はやや外傾しつつ外上方へのび、口縁端部付近で外反する。口縁端部は丸い。体部の正面観は円形で、側面から見たときに前面は丸く膨らみ、背面は中心部分が窪む。把手は「U」字状に曲げた粘土紐の両端が体部に接合されて環状になったものが、側面の上部に2箇所つく。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 前面は周囲に櫛描列点文を廻らせ、そこから中心へはカキメを施す。側面はカキメ、背面はナデ。 内面 - ・-	良好	直径1mmの石英、金雲母をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・-	体部前面に大きく「X」字状のヘラ記号。 口縁部の一部と把手の一部に自然釉。
22-40 須恵器 提瓶 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 6.5cm (完形) 器高 18.4cm 頸部はやや内傾して内上方へのび、中位で緩やかに外傾して外上方へのびる。口縁端部は丸い。体部の正面観はほぼ円形で、側面から見たときに前面は丸く膨らみ、背面は平らである。把手は鉤状のものが、側面の上部に2箇所つく。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 前面と背面にカキメ、側面はナデ 内面 回転ナデ ・-	良好	直径1mm以下の石英、金雲母をわずかに含む。直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・-	口縁部の一部と体部の一部に自然釉。
22-41 須恵器 器台 脚部 石室内 第1床面 奥壁付近	脚部径 35.2cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 7.25cm 2条の凹線を境に脚裾部は下外方に広がり、底部付近でやや外傾する。底部は内傾する面をもつ。スカシは三角形スカシと考えられるが、数は不明である。 ・- ・- ・外面 カキメのち櫛描波状文 内面 回転ナデ	良好	直径1mm以下の石英、長石をわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・灰色	底部はひずみ有り。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
22-42 土師器 杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 11.9cm (完形) 器高 4.65cm 口縁部は、体部から緩やかに屈曲して上方にのびている。口縁端部は細く丸い。体部と底部の境界は不明瞭で、緩やかに屈曲している。底部は比較的平らである。 ・外面 横方向のナデ 内面 横方向のナデ ・外面 ケズリ 内面 ナデ ・外面 ケズリ 内面 ナデ	良好	直径1mm以下の赤色粒を含む。直径0.5mm以下の金雲母、長石を含む。	・淡橙褐色 ・淡橙褐色 ・淡橙褐色	
22-43 土師器 杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 11.8cm (完形) 器高 4.45cm 口縁部は、体部から緩やかに屈曲して上方にのび、口縁端部付近で僅かに外反して開いている。口縁端部は細く丸い。体部と底部の境界は不明瞭で、緩やかに屈曲している。底部はやや丸い。 ・外面 横方向のナデ 内面 横方向のナデ ・外面 横方向のナデ 内面 横方向のナデ ・外面 - 内面 ナデ	良好	直径1mm以下の赤色粒を若干含む。直径0.5mm以下の石英、金雲母、白色粒をわずかに含む。	・淡橙褐色 ・淡橙褐色 ・淡橙褐色	
22-44 土師器 高杯 石室内 第1床面 奥壁付近	口径 12.6cm (完形) 器高 12.5cm 杯部は底部から体部にかけて外傾して外上方にのび、口縁部との境で屈曲してほぼ垂直にたちあがり、口縁端部付近で僅かに外反する。脚柱状部はやや外傾して外下方へ下り、脚裾部は屈曲して広がる。 ・外面 横方向のナデ 内面 横方向のナデ ・外面 ナデのちミガキ 内面 ナデ ・外面 ナデのちミガキ 内面 ケズリ	良好	直径1mm以下の金雲母を若干含む。直径1mm以下の赤色粒を含む。直系0.5mm以下の長石をわずかに含む。	・淡橙褐色 ・淡橙褐色 ・淡橙褐色	
23-45 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 玄室玄門 寄り右側 壁付近	口径 14.0cm (完形) 器高 3.8cm 口縁部はわずかに内彎しつつ、下方に下る。口縁端部は丸い。口縁部と天井部の境は不明瞭である。天井部はやや丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の1/2を回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、天井部に静止ナデあり ・-	良好	直径3~1mmの石英をわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石、チャートをわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・-	
23-46 須恵器 杯蓋 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 12.8cm (完形) 器高 4.2cm 口縁部は内彎しつつ、下方に下る。口縁端部は丸い。口縁部と天井部の境は不明瞭である。天井部は丸みをもっている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部の1/2を回転ヘラケズリ(ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ ・-	良好	直径1mm以下の石英をわずかに含む。	・淡灰色 ・淡灰色 ・-	天井部外面に自然釉が認められる。 天井部の一部に1.5×1cmの別個体がみられる。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
23-47 須恵器 杯身 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 11.7cm (ほぼ完形) 器高 3.8cm たちあがりは低く内傾している。口縁端部は細く丸い。 受け部は外方に広がっている。底部は比較的平らである。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ	良好	直径1mm以下の石英をわずかに含む。	・淡灰色 ・淡灰色 ・-	受け部と体部の一部に自然釉が認められる。 焼きむらあり。
23-48 須恵器 高杯 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 12.0cm (完形) 器高 6.5cm 短脚の無蓋高杯である。杯部は、底部から緩やかに屈曲して上方へのび、口縁部は外傾して外上方へ開いている。口縁端部は丸い。脚柱状部はわずかに内彎して内下方に下ったのち、緩やかに外傾して広がり、脚裾部で屈曲して広がる。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、杯底部は回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ、底部に静止ナデ ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	良好	直径3mm~2mm大の石英をわずかに含む。直径1mm以下の石英、長石をわずかに含む。	・暗青灰色 ・青灰色 ・-	ゆがみ有り
23-49 須恵器 台付長頸 壺 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 8.4cm (完形) 器高 25.0cm 頸部は細く長い。頸部から口縁部にかけてやや外傾してたちあがる。口縁端部は丸い。体部はその最大径を上位にもち、肩部は緩やかに下る。脚柱状部は下外方に広がり、段をなしたのち、脚裾部は下外方へ広がる。脚端部はやや丸い。 ・外面 回転ナデ 内面 頸部上半から口縁部は回転ナデ、頸部下半はヘラナデ。 ・外面 肩部上半は回転ナデ、肩部下半から体部は回転ヘラケズリおよびナデ。 内面 体部は回転ナデか。底部はヘラナデ。 ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) のち、3方向に方形スカシを外面から穿つ。 内面 回転ナデ	良好	直径4mm大の石英をわずかに含む。直径2~1mmの長石をわずかに含む。直径1mm以下のチャートを含む。	・淡青灰色 ・青灰色 ・-	
23-50 須恵器 提瓶 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 5.3cm (完形) 器高 17.8cm 頸部はやや外傾しつつ、外上方へのびる。口縁端部は丸い。体部の正面観は円形で、側面から見たときに前面は少し丸く膨らみ、背面はやや平らである。把手は退化してボタン状となったものが側面の上部に2箇所ついている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 前面と背面にカキメを施す。側面はナデ。 内面 - ・-	良好	直径1mm以下の石英をわずかに含む。 直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	・灰色 ・灰色 ・-	口縁部の一部と体部の一部に自然釉。

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
23-51 須恵器 甕 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 13.3cm (完形) 器高 16.6cm 頸部径は小さく、頸部は長大化している。頸部は外反して外上方にのび、上部で外方へ屈曲させ、再び外上方へのびる。屈曲部外面に凹線をめぐらせている。口縁端部は内上方にやや面をなし、その面には部分的に凹線が認められる。肩はやや張り、体部最大径は中位より上方に有する。肩部と体部の境に円孔スカシ(直径1.5cm)を穿つ。体部は全体的に丸みを帯びている。底部は丸くおさめている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ、下部はヘラナデ?ケズリ? ・外面 回転ヘラケズリ、肩部付近は回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ、自然釉がかかっているため、単位は不明瞭 (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 回転ナデ	良好	直径2mmの石英を若干含む。直径1mm以下の石英、長石を若干含む。	・灰白色 および 暗灰色 ・灰色 ・淡灰色	外面に自然釉が認められる。
23-52 土師器 杯 石室内 第1床面 玄室中央 部左側壁 付近	口径 10.8cm (完形) 器高 4.2cm 口縁部は、体部から緩やかに屈曲して上方にのびている。口縁端部は細く丸い。体部と底部の境界は不明瞭で、緩やかに屈曲している。底部は丸い。 ・外面 ナデ 内面 - ・外面 - 内面 - ・外面 - 内面 -	良好	直径2mm以下の石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の金雲母をわずかに含む。	・赤橙色 ・赤橙色 ・赤橙色	
28-1 須恵器 蓋 石室内 第2床面	復元口径 15.4cm (残存1/11からの回転復元) 残存高 1.2cm 天井部中央につまみが付く蓋と考えられる。扁平で、口縁部から天井部外へ短く下り、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部はやや鋭くつまみだしている。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ナデ、天井部中央付近は切り離し痕 内面 回転ナデ ・-	軟	直径0.5mm以下の石英、長石をわずかに含む。	・灰白色 および 暗灰色 ・灰白色 および 暗灰色 ・灰白色	
28-2 須恵器 杯 体部・底部 石室内 第2床面	高台径 14.0cm (残存1/8からの回転復元) 残存高 3.1cm 高台付きの杯である。体部はわずかに内彎して外上方へのびる。 ・- ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・外面 回転ヘラケズリ (ロクロの回転の方向は右廻り) 内面 ナデ	良好	直径0.5mm以下の長石、チャートをわずかに含む。	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
28-3 須恵器 甕か壺 口縁部 石室内 第2床面	残存高 3.8cm 口縁部は外彎しつつ外上方へのび、口縁端部外面に凸帯をもつ。 ・外面 回転ナデ 内面 回転ナデ ・- ・-	良好	直径1mmの石英をわずかに含む。	・灰色 および 暗灰色 ・灰色 ・淡紫灰色	

図一番号 器種 出土場所	・口頸部 形態と、調整・体部/天井部 ・底部(脚部・高台)	焼成	胎土	・外面 色調・内面 ・断面	備考
29-1 瓦器 椀 石室内 第3床面	復元口径 13.1cm 残存高 4.7cm 体部から口縁部にかけて外上方に僅かに内彎しての び、口縁部で比較的垂直にたちあがり、口縁端部付近で やや外反する。口縁端部は僅かに内傾して段をなす。高 台は低く断面が三角形となる。 ・外面 横方向のナデ 内面 横方向のナデ ・外面 - 内面 横方向のヘラミガキ(暗文) ・外面 - 内面 横方向のヘラミガキ(暗文)	良好	直径1mm以下の金 雲母を若干含む。	・灰色 および 暗灰色 ・暗灰色 ・淡褐色	
29-2 瓦器 椀 石室内 第3床面	口径 14.6cm 器高 4.8cm 体部から口縁部にかけて外上方に僅かに内彎しての び、口縁端部付近でやや外反する。口縁端部は僅かに内 傾して段をなす。高台は低く断面が三角形となる。 ・外面 ヨコナデ 内面 横方向のヘラミガキ(暗文)。口縁端部はヨ コナデ。 ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧 内面 横方向のヘラミガキ(暗文) ・外面 ヨコナデおよび指頭による押圧 内面 横方向のヘラミガキ(暗文)	良好	直径2mm大の石英 をわずかに含む。直 径0.5mm以下の石英 をわずかに含む。	・灰色 および 暗灰色 ・灰色 および 暗灰色 ・灰白色	
29-3 瓦器 椀 石室内 第3床面	復元口径 14.6cm 器高 4.6cm 体部から口縁部にかけて外上方に僅かに内彎しての び、口縁端部付近でやや外反する。口縁端部は僅かに内 傾して段をなす。高台は低く断面が三角形となる。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 横方向のヘラミガキ(暗文) ・外面 ナデ 内面 ナデ	良好	直径1mmの石英 をわずかに含む。直 径0.5mm以下の金雲 母を若干含む。	・淡褐色 ・暗灰色 ・淡褐色	

